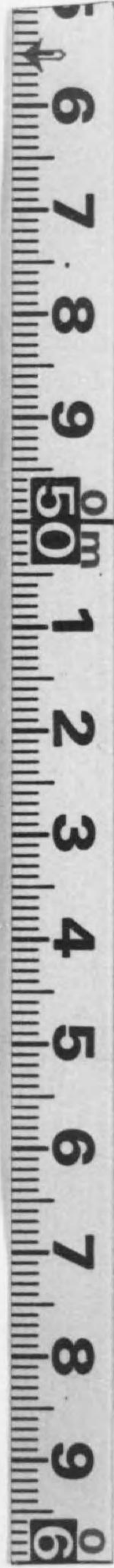


910.25  
483  
3  
910.25-Ka83-3ウ



1200500754376



始





34 1.21



152

910.25  
KA 83  
3

西 鶴 研 究  
片 岡 良 一 著  
山 口 剛



新 潮 文 庫

— 178 —

新 潮 社 出 版





1070-8



西鶴武家物研究

片岡良一

西鶴武家物研究……………片岡良一…一

西鶴町人物研究……………片岡良一…四

西鶴好色本研究……………山口剛…七



好色本の作者として両性愛慾生活のあらゆる断面を見盡した西鶴は、轉じて同性愛の種々相への觀察と諦視とに没入した結果、期せずして武士の生活と氣質とに立入つた。さういふ彼が更に轉じて、武士生活其物武士氣質其物を材料とし主題として取扱つた作品が、即ち彼の武家物であつた。武道傳來記(或は諸國敵打)八卷、武家義理物語六卷、及び新可笑記五卷が、普通に彼の武家物の全體と考へられてゐる。

傳來記は其の別名の示す通り、諸國に起つた敵討の話を綴つて行つたもの、恐らく作者がそれを書くことによつて初めて武家生活と武士氣質とに觸れた武士の念友關係が、屢々血腥い殺戮や争鬪を結果し、ひいては敵討の大團圓に迄發展してゐた所から、或は念友關係と敵討とが屢々並存してゐた所から、作者の興味が動いて、選ばれた主題であつたのであらう。さうした創作心理の推移に對する推定への裏打として、同書には、特に巻頭の二三章より始めて、念友關係に絡んだ敵討説話が多く収録されてゐた。

同性愛と敵討とを書くことによつて、武士氣質と武士生活とに觸れた西鶴は、其處に幾多の長所と美點とを見出すと共に、多くの短所と暗側面とをも見出さずにはゐられなかつた。彼は恐らくさうした短所と暗側面とに充ちた當代武士氣質を憐れずとする氣持に動かされたのであらう、轉じて義理物

語に於て、理想の武家氣質を描き出さうと努めた。彼は其爲に時代を遡つて、多く過去の人物に武士の理想的典型を見出した。義理物語六卷の説話は、かくて大部分昔語といふ種類のものになつて了つた。僅かに「身體破る風の傘」「御堂の太鼓打たり敵」の二章一篇などが、例外的に當代武士を書いたものであつたに過ぎなかつた。

義理物語に於て理想の武士氣質を書いた西鶴は、自ら非理想的なるものへの非難と教訓とを繰返した。その直接の延長線上に立つた彼が、武家生活への教戒と處生訓とを眞つ向に振翳したものが、即ち新可笑記であつた。その題名によつても正しく想像される通り、如備子の可笑記に暗示を得て輯録された本書の各短章は、唯一つ、「武士とは格別長袖の事」といふ小みだしをつけた「官女に人の知らぬ灸所」以外は、すべて「武士は何々の事」といふ小みだしをつけて、或は武士氣質の美點を讚美し、或は武士生活への教訓を寄せるなど、武家物であると同時に、教訓物的な形を與へられてゐる。然もさうした形の中に盛込まれた教訓は、必ずしも武士生活にのみ緊密な關係をもつものではなかつた。寧ろ其の大部分が、武士以外の誰にでも、其儘適用されるものであつた。此點で新可笑記は、武家物として稍々不純なものであつたことが云はれなければならない。のみならず、さうした教訓をよせられた材料其物が、又決して武家物として相應しいものばかりではなかつた。其處には例へば「先例の命乞」の如く、大工を主人公として一種心理小説的なテーマを取扱つたもの、「炭焼も火宅の合點」の如く、炭焼の子二人を主人公として、金の人間の心を支配して行く形を書いたもの、其他前掲の「官



女に人のしらぬ灸所、乃至「魂よばひ百日の樂み」「中にぶらりと俄年寄」など、材料的にも何等武士氣質や武家生活に關係のない説話が、非常に澤山取込まれてゐるのである。然もそれらの説話蒐集の方針が、武家物としてといふよりも、寧ろ諸國に傳はる珍談を書き集めるといふ方に傾いて了つてゐるのであるから、愈々本書は武家物として不純にならざるを得ないと思ふ。本書はかうした不純な内容を、僅かに主人公を武士の後裔とするとか、或は主人公に配するに武士を以てするとかいふ程度の趣向によつて、強ひて武士の世界に結びつけ、辛うじて武家物としての體裁を保たせてあるに過ぎないのである。

4 普通には武家物と考へられてゐないし、又それが當然なのであるけれども、其處に書かれた内容といふ點から云へば、以上のやうな性質をもつ新可笑記などよりも、寧ろ念友關係の種々相を書いた男色大鑑（或は本朝若風俗）の前半四卷の方が、ずつと武家物らしい。第一觀方によつては、作者自身此の男色大鑑をも、他の三つの作品と全然同じ部類に屬するものと考へてゐたのではないかとも思はれる。彼は本書に極めて意氣軒昂たる自序をつけて、堂々と落款をさへ捺してゐる。此の落款乃至署名のある自序は、彼の武家物以外には、僅かに世間胸算用一篇に認められるだけで、他の生前の作品には、たゞ／＼自序のあるものがあつても、署名乃至落款の並存してゐるものは遂に見出されないものである。唯も一つ近代艶隱者に彼の署名ある序文が認められるけれども、あれは假想の作者を設定する爲めの作者のトリックであつたのだから問題にならない。とすれば、此の胸算用一篇を例外として、

5 他は武家物にのみ認められる性質は、果して何處から生れたのであらうか。全くの揣摩には過ぎないけれども、それは或は好色本作者として被つた非難と嘲笑とに憤激した西鶴が、當時の上流階級であつた武士を書いたことに感じた、一種反動的な誇示の氣持を反映してゐるのではなからうか。若し此の推定が誤りでなかつたとすれば、新時代町人としての西鶴が、意外に古臭い物の考へ方の持主であつたことが、きつぱりと斷定される譯だが、それよりも、此の武家物にのみ認められる性質をもつてゐる以上、作者自身男色大鑑をも他の武家物と同じ種類の作品と觀じてゐたのかも知れないと思はれるのである。それが全然武家物としての性質を缺いた後半四卷を伴つて了つたのは、正しく教訓物的武家物として筆をつけられた新可笑記が、實際は非武家物的な性質に墮して了つたのと、或は軌を同じくして、此の作者のもつ連想のルーズさと思考の不緊密さを、暴露して了つたものと云へるかも知れない。

兎まれ西鶴の武家物を考へる場合に、男色大鑑前半の四卷は、少くとも新可笑記の五卷などより、ずつと重大な内容を孕んでゐるものとして、注意されなければならないことだけは云ふ迄もない。此の意味から、必ずしも武家物を以ては呼び得ない大鑑の前半をも、私は此處に他の三つの作品同様に取扱つて行かうと思ふ。さうしてかうした取扱ひ方が許されるとすれば、西鶴はその武家物に於て、まづ念友關係と敵討とを通して武士氣質と武家生活の諸様相を諷視し、次いでそれらのものゝ理想的な形への關心を示して行つたものと云ふことが出來ようと思ふ。西鶴はさういふものを果して如何に



觀し如何に表現したであらうか。

## 二

兩性愛慾生活のあらゆる斷面を描き盡した點で古今獨歩を謳はれる西鶴は、同性愛の種々相を究め盡した點でも、亦世界の驚異だと云はれる。少くとも彼がかなりの同性愛通だつたことは、彼の描いた衆道關係の全面容を見る迄もなく、武士の念友關係だけを取上げてみても首肯出来る。

西鶴が武士の念友關係を取扱つた作品としては、無論男色大鑑をその主なるものとするけれども、決してそれだけでは無かつた。武道傳來記にも様々な同性愛の斷面は取込まれてゐた。義理物語にも「衆道の友呼ぶ衝の香爐」以下、殊に趣の異つた稚子物語が見出される。極めて擦過的ながら、新可笑記にもその方面の記述は含まれてゐた。好色五人女以下武家物以外の作品にも、ちよいとさうした方面の記述は發見される。が、武家物以外の作品に現はれたものは姑く措いて、以上の武家物説話に取扱はれた念友關係の諸様相を、不取敢通觀してみよう。

まづこれを戀愛成立以前に見れば、其處には、「我たま／＼人界に生をうけて、又世に惡まれぬ程の形にして、その情しらぬも口惜し」と、まだ知らぬ戀に憧る、少年の氣持（垣の中は松楓柳は腰付大鑑）から始めて、主從假の契より眞の戀心覺えて念者欲しがらる少年の氣持（傘もつてもぬる、身同上）、「我かく前髪の盛といふも五とせまでの花にもあらず、ひたひに毛貫のかねに散るべきもやが

7

てなり」と、空しく過ぎ行く若衆盛りを啣つ少年の焦躁（東の伽羅様同上）など、少年らしい思春期の惱みも一通り書かれてゐる。美少年を一目見るより主君を捨て家を捨て、三年に餘る浪々を續けて只管彼の後を追ひ、遂に乞食非人にまで成り下る男（色に見籠は山吹の盛同上）、少年が川水に吐いた唾を掬んで、「此つばきわが口中に消えずあつて、甘露不斷の樂みもがな」とつぶやく男（夢路の月代同上）、戀する少年の念者を脅迫して、大道の眞ん中に刀の反をうたす武士（初茸狩は戀草の種傳來記）などの猛烈さを始めとして、少年が狩する野に、鳥のゐないのを知つて、密に手飼の雉子を放つて少年を樂しませようとする男（鬪殺する袖の雪大鑑）、冤の罪の閉門中に自害しようとする少年を憫んで、密に食物を贈り力をつける武士（せめては振袖きて成とも義理物語）などの優しさまで、戀する人を得てまだ達せられぬ間の氣持、或はまだ明かに戀とは云へぬ程のそこはかとなない心の動きなども、濃淡とり／＼に描き分けられてゐる。さうして思ひを通ずる爲の手段としては、所謂千束の文の平凡常道から、或は「玉章は鱷に通はす」（大鑑）の苦肉の策となり、遂には試し斬りの料となつて思ふ人に近づく「色に見籠は山吹の盛」の非常手段に至る迄、さう複雑多岐に涉つてとは云はれなかつたけれども、兎に角様々な方法が語られてゐた。

次に戀愛成立の動機より見れば、まづ念者の側には、流石に少年の美しさに打たれてといふのが大部分であるけれども、それでも例へば「つね／＼小偷心底を見すまし」といふ種類の、對手の手柄に惹きつけられて行くもの（傘もつてもぬる、身）、少年同志の契を見て、可憐の情から其儘二人に慕ひよ



つて行くもの(此道にいろはにほへと大鑑)、愛する女の産後に空しくなつたのを悲しむ餘りに女を疎んじて小姓に親しんで行く男(情に沈む鸚鵡盃同上)など、いふ變つたものも、多少収録されてゐないことはなかつた。それに對して少年が念者に許す動機には、無論相手の心意氣に感じてといふのが一番多かつた。が、同じく心意氣に感ずるとは云つても、その感じ方には無論様々な色合の相異が觀じられた。其の相異をかなり微妙に描き分けてゐるだけでも、作者の此點に關する記述は、決して單調を以て呼ばるべきものではなかつた上に、其處には親しかつた友達の最後の願の故に、形も卑しい六十餘りの老人と、思ひの外なる契を結ぶ「衆道の友呼ぶ衛の香爐」、念者に自分よりさきに愛せられた人を、念者の死後、せめてもの形見と慕ひよる「夢路の月代」の一節など、いふやうな珍らしい動機をもつもの、乃至薫きしめた留木の香に懷しみ寄る「東の伽羅様」、かりそめの冗談が媒となつて、引くに引かれぬ義理となつた「身替りに立名も丸袖」(大鑑)、さては、「昌雲寺の庭をこゝに移して蘇鐵植替へらるゝ日、是なる岩に腰かけながら、まかせ水を手に請けて、あまりを後に人の有ともしらず撒けば、濡れたい折から忝ないと聲低うして云はれし」がいとほしくて、其儘契り合ふに至つたといふ「夢路の月代」の挿話などのやうな、ふとした感覺的の陶酔や、ほんの一寸したはずみを動機とするものなど、作者の微妙正確な觀察を思はせるものも時々見出された。

更にこれを戀愛成立後の經緯に見れば、流石に作者も此處に一番力をこめてゐたらしい。「風吹いて雪の夜かならず參るのよし晝より文つかはしければ、我が家居近く迎に來りたまひ、肩車にの

より具足着たる金牛をたまはりける。道すがら切合事をして、其夜は勘右衛門殿寢姿を馬にして乗れば、よき御大將と申されし」(同上)の無邪氣な飽滿から、「玉章は鱷に通はす」の甚之助より權九郎への書置きに盛込まれたやうな、嫉妬、怨恨、痛憤、捨て鉢、懷舊、愛着、哀傷等の微妙に融け合つた複雑な氣持まで、或は「兩人皆より先に來るに、道橋のたよはく、暮に渡るも浮雲と、大吉高からげして新之助を負ひて川を越しいたはる風情、殊に寛の流も手桶に運びて茶之間に焼付、落葉のけぶり

を厭はず、座敷掃までも獨働き、相番の人には萬をゆるす」(此道にいろはにほへと)と優しく少年を勞はる様子から、念者を「鬪殺する袖の雪」の嫉妬の慘虐無双まで、愛し愛さるゝ二人の間に於けるあらゆる心の動きが、形を通して、微妙を極めて描き出されてゐる。愛する者の身を案じて、彼が仇討の道中を密に守護しながら、度々の艱難困苦を人知れず救うて行く武士の涙ぐましい心遣ひ(形見は二尺三寸大鑑)、脇顔にありとは人の見つけぬ程の癡子も氣にかゝるとて手づから抜き取る念者の愛撫(同上)他に執心の男へも、何とか色よい返事をして、事を起させるなどいふ念者の不純さに怒る少年の純情(玉章は鱷に通はす)死後にも猶ほ愛する少年の髪つきを氣にして、亡靈となつて其形を整へに來る男の執着(夢路の月代)、遠くに契る人ありと聞いて、煩惱をすて、後ろ見をする武士の一種ブラトニックな氣持(形の花とは前髪の時義理物語)等、等の、色様々な若衆氣質と念者氣質とが、其處には相觸れ相絡みあつて微妙に錯綜してゐる上に、戀して成らなかつた第三者の氣持なども一層陰翳を複雑にすべく、融け込んでゐるのである。が、さうした複雑な記述の中で、特に感興を惹くも



のは、所謂若衆盛りの短かさから来る特殊な心理であり事件の陰翳であつた。横戀慕した美少年に拒まれてその念者に果し状をつけた男が、却つて短い若衆の盛りを空しく散らせて了ふことを惜んで彼が脇ふさぐ迄三年の間、自ら申込んだ果し合ひを延ばさうとし(待兼しは三年目の命||大鑑)、父の衰老故に子供を元服させようとするのに、念者が容易に肯はず、其爲遂に流血の慘事を見るに至り(惜しや前髪箱根山嵐||傳來記)、冤の罪の閉門中、優しい心遣ひを示してくれた人を、程經て後知り得て、感激からこれと契らうとしながら、既に脇ふさいだ身の悲しく、わざと着古した脇あけ小袖に身をかへ、年さへ一つかくして枕定める(せめては振袖きて成とも)など、短い少年期をのみ享樂する同性愛に於てのみ現れる特殊な心理或は事件として、異常な興味を唆らずには置かないのである。と同時に、人目をしので相通ひ合ふ二人が、或は小者の風情に丸袖を翳し(玉章は鱧に通はず)、或は法師の形に化け(同上)、或は長持に潜み(傘もつてもぬるゝ身)、或は素襦で大河を泳ぎ渡る(墨繪につらき劍菱の紋||大鑑)といふやうな、種々様々な苦心と冒険とに入つて行く形にも、随分好奇の眼を睨らせずには置かないと思ふ。

最後に戀の終りからこれを一瞥すれば、流石に所謂衆道物語の常套として、偶然にもせよ悪意あるにもせよ、兎に角戀を妨ぐる第三者の出現によつて、悲しく血腥い破局を招くものと、病死にもせよ不慮にもせよ、兎に角一方の死に他が殉ずるもの、或は一方の死に感じて他が遁世するものなどが一番多い。「墨繪につらき劍菱の紋」「初茸狩は戀草の種」などは、前者に屬するものゝうちでも特に典型

的なもので、愛し愛された二人の中の何れか、第三者の爲に殺され、残つたものがその仇を討つて自殺してゐる。「薬はきかぬ房枕」(大鑑)、「心底をひく琵琶の海」(傳來記)などは、後者の中の殉死するもの、「此道にいろはにはへと」は遁世するものゝ好例である。前者と大體の形に於て似てゐながら夫々多少づゝ異つてゐるものに、第三者を討ち果して無事に奉公を勤める「玉章は鱧に通はず」、討ち果した後相携へて放浪を續ける「編笠は重ねての恨」(大鑑)、第三者と念者とが刺し違へて若衆がこれに殉ずる「待兼し三年目の命」、若衆が念者の身替りに立つたのに感じて第三者がわざと念者に斬られ、念者も彼等の義心に感じて自刃する「身替りに立名も丸袖」などが數へられ、後者と形の上だけに少々類似を思はせるものに、自ら嫉妬の餘りに責め殺した念者の後を追うて自殺する「鬮殺する袖の雪」などがある。其他なほ、「按摩とらする化物屋敷」(傳來記)などに書かれた平和な戀の終り、或は寵衰へて懊惱する「形見は二尺三寸」冒頭の平凡な戀の結末などより、寵愛せられながら、私に念者をもつて成敗される「傘もつてもぬるゝ身」の一部、密通を許された殿の恩義に感激して契を捨てる「色に見籠は山吹の盛」「垣の中は松楓柳は腰付」契つた對手が親の敵と知つての懊惱に苦しめられた揚句、遂に自分諸共對手を差貫いて死ぬる「碓引べき植生の宿」(傳來記)、契つて後身の老を恥ぢて姿を隠す「此道にいろはにはへと」の挿話などゝ、多少共品變りたる戀の終りも所々に散見されたけれども、此點に關する作者の記述は、さうまで複雑微妙を極めてゐたとは思はれなかつた。たゞ、敵を討つて自殺する念者が、愛する少年の紋所の形に腹を切つたとか(傘もつてもぬるゝ身)、念者を鬮殺しにし



て自害したあとには、彼をもてなすべき設けが立派に整へられてゐたとかいふ種類の武士氣質や事件の背景が、さうした戀の終りの夫々に、微妙な感觸と味ひとをもたせてゐたことは、云ふ迄もない事であつたけれども。

以上眺め渡して來た所でも明かな通り、武家物に現れた西鶴の念友關係の記述は、時に多少の物足りなさはあるけれども、兎に角随分複雑多岐に涉つてゐた。其處には無論彼の女色描寫程の完璧さはなかつたと思はれるけれども、これだけでも素より彼が同性愛通であつたことは否定されなかつたと思ふ。況してこれに、大鑑後半の四卷乃至其他の作品に書かれた市井賣色の諸様相、及びこれらの作品に散見する僧侶の同性愛慾の諸斷面を考へ合せたら、彼が同性愛通であつたことは愈々動かさないことになつて來る。「世界の驚異」といふ評語も、恐らく決して過當ではあるまいと思はれる。

が、それにしても、此處には餘り必要のないことながら、彼の僧侶の同性愛への理解は、比較的乏しいものであつたらしい。大鑑其他にその方面の記述も時折見出されはしたけれども、それは數に於て寧ろ極めて少いものだつた。その少いものゝ中にさへ、例へば蘭丸を弄ぶ惡僧等の頽廢（編笠は重ねての恨）、牛飼童子、白つく男などになつむ和尙の事缺らしい慘めさ（中脇弄は思の燒殘大鑑）などといふ、武士の念友關係や市井の賣色には見出されない斷面がある所に、正しく想察される通り、長い間の絶對的禁慾生活から生じた僧侶の性格的の偏僻或は境遇などが生む、特異な色調と陰翳とが、彼等の愛慾生活には絡んでゐたらうと思ふのに、西鶴がそれには餘り觸れ得てゐなかつたことを、「世界

の驚異」としての彼の爲に惜しみたいと思ふ。

と同時に、譯の聖、色道の行者と謳はれた西鶴としては、寧ろ不思議にも有つてゐたらしい彼の性的健全さが、元來不自然な習性であるべき筈の男色に、兎もすれば絡りたがる病的頽廢を、殆ど完全に見逃してゐるのを、残念なことと思ふ。それは完璧といはれる彼の女色描寫にも、時に何うかすると不満を感じさせるものであつたけれども、元來不自然な習性である男色の場合に、一層其の感じが深い。彼は男色大鑑に絶對の男色謳歌を敢てした。其點から見ると、彼も亦一個の變質者流であつたらしく思はれ易いけれども、實際はさうではなかつたらしい。彼が大鑑に於て思ひ切つた男色謳歌を敢てしたのは、たゞ彼の作家としての態度——ポーズに過ぎなかつた。だから彼は時々不用意にもそのポーズを崩して、女若二道を同視する彼自身の本體を覗かせて了つた。のみならず、武家生活の規範を説いた新可笑記では、若道を好むが故に家中を騒がす大惡人となる三人の武士を書いて、鑿鑿の眼をむけてゐる（市にまぎるゝ武士）。所詮彼は若道謳歌の變態性慾者流ではなかつたのだと思ふ。従つて彼には變態性慾としての同性愛の怖ろしさや頽廢が、ほんとは書けなかつたのではないか。上來考察して來た彼の衆道物語には、ポーズが生んだ極端な誇張があつた。「此道にいろはにはへと」の手習の師匠、「詠めつゞけし老木の花（大鑑）の主人公等二人のやうな、極端な女嫌ひは書かれた。前者に九歳の少年同志に愛の入墨をさせ、後者に白髮の六十翁に若衆としての身嗜みに腐心させもしたが、さうした誇張が目立つだけで、病的頽廢の暗さや陰慘さは、殆ど何處にも見出されなかつた。唯



一つ、「鰯殺する袖の雪」に、慘虐に迄墮した怖ろしい嫉妬の描叙があつたが、あれは西鶴にさうした方面への理解が十分あつたことを示すものではなく、寧ろ彼の驚くべき性格の強さが作り出した作品の効果に過ぎなかつたのだと思ふ。とすれば、彼の此の方面の記述は、僅かに「夢路の月代」の主人公が、名も知らぬ美少年が川水に吐いた唾を掬ふといふ程度のものに過ぎなかつたことになる。それは素より西鶴自身の性格の反映でもあらうし、また未だ人間が健全さを失ひきらなかつた元祿といふ時代の反映でもあつたのであらうから、素より非難すべきことでも何でもないけれども、それが彼の同性愛描寫に一抹の物足りなさを感じさせるのも亦止むを得ない。

が然し、幾ら健全であつたとは云つても、もと／＼不自然な同性愛であつた。だからそれは、根本的に不健全な約束の上に成立つてゐた。見給へ、強さと潔さとに誇るべき筈の武士が、恍惚として魂奪はれる對手は、何れも女恥かしい美少年であつたではないか。強く鋭き志の故に惣八郎に思ひつかれた「傘もつてもぬるゝ身」の小倫さへ、「わざとならぬ貌ばせ遠山に見初る月の如し。髪は聲なき宿鳥にひとしく、芙蓉の双眸、鶯舌の聲音」といふ豊艶さに誇つてゐた。況して、「玉縁笠の淺黄紙の仕出し、裏髪の色深く、薺染の大振袖、ぬき鮫の大小、此取まはしの小細支、左手に山吹の阿娜花をかざして靜かに豊なるを人間とは思はず、姑射の神人牡丹に化すかとうたがはる」といふ「色に見籠は山吹の盛」の主馬、「七才の時より形定まつて嬋娟に、一笑百媚の風情、見し人男と思はず」といふ「墨繪につらき劍菱の紋」の丹之助等となると、爛熟した肉の香こそなければ、媚を含んだ女性美と、相

距る殆ど一步でもない。かうした女性的な美しさに生きる少年武士は又戀を思つては懐る鏡に前髪のおくれを撫でつけ（此道にいろはにほへと）、或は四里の山路を遠しとせずして髪結ひに通ふ（編笠は重ねての恨）といふやうな、女性化した心情態度に生きてゐた。さうして其爲に、「髪先二つ鬢の清らなる折柳」（同上）など、若衆の貌を彌が上に美しからしむるための髪形の形なども、工夫されたりしたのでつた。健全だつたとは云つても、流石に不自然な戀愛關係だつた同性愛が、かうして對象としての男性に、女性的な美しさと媚めかしさと、更に女性化された心情をさへ要求するの不健全さに、根を置いてゐることは、西鶴の正しく描破した所であつたのであつた。

が、それは兎に角、かうした媚かしく美しい少年が、例へば「あたまつき後ろ下りに髪先短かく、上下黒き龍紋に葉菊の五所紋、糸打の平帯、よしや粧の大小、いかさま衆道のわけらしき風俗」（夢路の月代）などいふやうな寛濶姿の男や、逞ましい武士などもつれ絡んで、媚めきわたる戀の雰圍氣の裡に、武士らしい意氣と意氣地の火花を散らす所に、武士の念友物語の、變に微妙な味ひが出て來るのだと思ふ。西鶴の描いた念友關係が、さうした微妙な味ひのうちに、美しくも亦潔い幾條の葛藤を織り出してゐるものであることは、素より云ふを要しまい。

## 三

念友關係に絡んで、多くの敵討を書いた西鶴は、それを作の中心主題とした傳來記は云ふ迄もなく、



義理物語や新可笑記に於ても、更に大下馬以下武家物以外の作品に於ても、さうした敵討を繰返すと共に、又それとは異つた色々な敵討を取扱つた。が、所謂敵討なるものが、故意にせよ偶然にせよ、兎に角或る動機によつて親近者を殺されたものが、其の對手を討つて恨みを報ゆる報復的行動であるが故に、それらの敵討説話の運びには自ら一定の型があつた。無論其處には作品としての取扱ひさうした型が多少破られてゐるもの、或は最初の事件の後即座に敵が討たれる例外的なものなども時に見出されるけれども、まづ大體は、敵討の動機となるべき争闘から双傷への第一齣から始まつて、出奔した敵を尋ねての漂泊乃至機を覘ふ爲の辛苦となり、最後に敵討の大團圓となるといふやうな輪郭が辿られた。が、大體さうした型通りの發展のうちにも、無論多くの説話の夫々に、異つた賦彩と事件の綾がと觀じられない事はなかつた。

まづ第一には敵を討つ人の最初の事件に横死した人との關係が色々であつた。「心底をひく琵琶の海」以下、流石に親子の關係にあるもの、それも父を討たれた肉親の男子である場合が一番多いけれども、時には、「命とらるゝ人魚の海」(傳來記)の如く、娘が討手の主なるものである場合、「なる程輕い縁組」(義理物語)の如く、聲が討手である場合、或は「不斷心懸の早馬」(傳來記)の如く、以上三者が一緒になつてゐる場合なども認められれば、「思ひ入吹く女尺八」(同上)乃至上掲「命とらるゝ人魚」の海などの如く、以上三者の何れかに、殺されたものゝ妻或は妾が伴つて行つてゐる場、認められる。が、不思議なことに、母を殺されて敵討に出てゐるものは一つもない。絶対に

事ではあるまいと思ふが、例外的の事であつただけに、西鶴の知識觀察が届かなかつたのであらう。親子の關係に次いで多いのは、「見ぬ顔に宵の無分別」(同上)以下兄弟の關係——討手が弟であるもの。これに準ずるものとしては、「女の作れる男文字」(同上)の如く、姉を殺された妹が單身仇を報ずるといふやうなもの。「我が命の早使」(同上)の如く、姉夫婦の仇を妹夫婦が討つものなどが數へられる。第三には「初茸狩は戀草の種」以下念友關係にあるもの。其處には例へば「傘もつてもぬるゝ身」などの如く、念者が若衆の爲に仇を報ずる、所謂逆縁に類するものが時に見出される。尊族親が敵の討手となることを許されなかつたのに、兎に角長者であるものがこれを敢てしてゐるのであるから、敵討として多少例外的な形のものであつたと云へよう。念友關係夫自身から起つたものでなく、これと並行して起つた敵討事件には、「毒藥は箱入の命」の如く若衆が助太刀であるもの、稍々不完全ながら「形見は二尺三寸」の如く念者が後見するものゝ二種類があるのは云ふ迄もない。が、以上を敵討としてはまづ常套的な形とすれば、他には「若衆盛は宮城野の萩」(傳來記)の前半の如く、主君が臣下の仇を報ぜんとするもの、「惜しや前髪箱根山嵐」の如く家來が主人の敵を討つもの、「身體破る落書の團」(傳來記)、「内儀の利發は替つた姿」(同上)の發端などの如く、事件に關係のある友人若しくは責任者が仇を討つといふやうな、異つた形のものも二三數へられる。さうしたものゝ中で最も珍らしいものは、「誰が捨子の仕合」(同上)であらう。敵の討手がないのに苦しんだ尊族親が、拾ひ子をして殺されたものゝ名跡をつがせ、これに仇を討たせてゐる。形としては一番普通の父子のそれである



けれども、法體である長男が、敵討の爲に暫く男となり、討ち了せた後にまた法體にかへる「枕に残る薬違ひ」(同上)なども、坊さんと敵討とが、餘り矛盾し過ぎてゐるために、寧ろ變な可笑しさを感じさせる。西鶴が新可笑記の「書置の思案箱」などで罵倒した、生活の方便の爲に頭を刺つてゐた當時の僧侶の生きた實例であらう。

敵討つ側の人が兎に角以上の如く類別し得るのに對して、討たれる側の人が、さうした幾つかの種類の類別し得ないのは云ふ迄もない。が、これを別な觀方からすれば、直接手を下して人を殺したものと、たゞその人の殺される動機を作つたゞけで、直接には手を下してゐないものと大別される。無論前者が大部分であるのは云ふ迄もないが、直接手を下したものが主君であるとか、或は殺された者自身に何等かの弱味があつて、殺されても一面止むを得なかつたといふやうな場合などに、後者が成立し易い。云はゞ桂馬筋の敵討である。「傘もつてもぬるゝ身」「吟味は奥島の袴」「初茸狩は戀草の種」少し場合は違ふが、「命とらるゝ人魚の海」など、さうした桂馬筋の敵討がかなり屢々繰返されてゐる上に、敵と覘ふ男が病歿したので、その子供を身替りとして討つ「新田原藤太」(傳來記)の場合などがあることを思ふと、兎もすれば、潔い武士的行爲としてのイリウジョンを起させやすい敵討が、一面意外に理不盡な要素を孕んでゐたものであることを考へさせる。

ところで、以上のやうな敵討を結果する事件は、無論種々雑多な原因から起つてゐたけれども、全體として概觀すればまづ何でもなく、激動し易い武士の心に端を發するものが、全體の少くと

も六七分を占めてゐる。他家の小者が弟に無禮をはたらいたのを憤つた兄が、その小者の主人を斬る「嗒嗒といふ俄正月」(同上)、斃死した鳥を食はぬのを嘲けられて斬りつけ、却て斬殺される「行水で知るゝ人の身の程」(同上)、異名を以て呼びかけられたが故に出来出頭を斬る「新田原藤太」など、何れもこれである。よくある鞘咎めとか、不慮の喧嘩、口論など、いふのも、すべてこれに屬しよう。所詮は何れも極めて瑣末な事件から、流血の慘事が惹起されて行くのである。只その中、上掲の「新田原藤太」とか、或は「無分別は見込の木登」(傳來記)とかいふものになると、平素の反感が、事によつて激發させられてゐるのであるだけに、他の場合とは稍々由來する所が異つて深いと思ふ。以上のやうなものに次いで第二には、所謂色情の纏れから事の起つて行くものが數へられる。其處には無論兩性關係に絡まるものと男色關係に基くものとの二種類がある。許婚のもとに密に通ふ男を斬つてする「思ひ入吹く女尺八」、愛妾と密通の疑ありと睨んだ男を刺さうとして人違ひする「踊の中の似せ姿」(傳來記)、妻をすて、又妻に捨てられた男が、未練から妻と親しくしてゐる武士を斬る「後にぞしるゝ戀の闇討」(義理物語)などは前者、若衆が心變りしたものと早合點して斬込んで却て命をとられる「初茸狩は戀草の種」、自分が許さぬのに愛する少年の前髪を切らせたのを憤る「惜しや前髪箱根山嵐」などは後者に屬する。と同時に此處には、仲人口を信じて迎へた女が意外に醜かつたのに憤つた所へ、持參金をつきつけられて激怒した「見ぬ人貌に宵の無分別」、兄の友人に思ひを懸けて拒まれたが故に、その友人の悪口を云ふ男を斬つてのける「心底をひく琵琶の海」などの如く、此の第二の動



機と第一の動機とが重なりあつてゐるものも、少なからず發見される。次に第三の動機としては、全然醜いエゴイズムから理不盡な刃傷に及ぶもの、例へば、自分の失敗を被うて同役の功績を奪はんが爲にこれを斬殺する「誰が捨子の仕合」、兵法の傳授を拒んだ師を怨んでこれを闇討にする「おもひもよらぬ首途の掣入」(義理物語)、刀の鑑定の間違ひを正されたのを憤つて待伏せ、却て自分が殺される「見れば正銘にあらず」(新可笑記)等の如きが擧げられる。さうして第四には、當事者には何等の惡意もなく、たゞ偶然、過失、或は上司の命令等によつて人を殺傷するものが一括される。鳥を射た餘り矢に偶然人を射殺す「神木の咎は弓矢八幡」(傳來記)の冒頭、同じく鳥と誤つて川を泳ぎ渡る武士を射殺す「墨繪につらき劍菱の紋」、上意によつて止むを得ず朋輩を斬る「確引べき殖生の宿」等がこれである。かうした動機が、相手にそれと明瞭に知られてゐながら、然もなほ敵討が派生して行つてゐる所に、敵討といふものが、寧ろ理もなく非もなく、只親近者を討たれたものゝ武士としての體面の爲に、爲さねばならぬ義務とされてゐたのであることが考へられる。不合理であるだけ、それだけ深い感慨と、當時の所謂武士道なるものに對する微妙な理解とを懷かせる。西鶴の書いた敵討の動機としては、恐らく此の種類のものが一番面白いものであつたらうと思ふ。殊に、敵と規はるべき理由もないのに、身近に起つた刃傷沙汰に狼狽して、無分別にも國遠したばかりに、人々からあれが敵と噂され、そのため對手もこれを敵として討たなければ武士の面目が立ち難くなつたといふ「愁の中へ樽肴」(傳來記)のそれなどは、馬鹿々々しいだけ、亦面白い問題を含んでゐると思ふ。

大體以上のやうな事件を動機として、其處から派生して來た敵討つ迄の経緯は、動機となつた事件の其場で即座に敵が討たれて了ふ「惜しや前髪箱根山嵐」の如き簡單なものから、まだその當時は母の胎内にあつた子供が十三歳迄成長して、それから敵討の旅に出る「思ひ入吹く女尺八」などの如き永い期間を要したもので、種々様々であるけれども、西鶴の此點に關する記述は、全體として餘り密であつたと云ふことは出來ない。中には全然其間の記述を缺くものさへあつたかと思ふ。が、それにしても、其間に於ける敵と規はるゝ者の色々に形をかへて世をしるゝ様子、つけ規ふ者の同じく色々に身をやつして行く形、敵を尋ねての長い漂泊の間に陥る生活の不如意さ、遭逢する困苦、殊にだんだん力と頼む者を失つて行く場合などの頼りない氣持、敵の手懸りを得る端緒の色々など、一通りは書かれてゐる。さうしてそれらが夫々色々な意味で興味を惹かないことは無かつたけれども、殊に深い感興を唆らずに置かなかつたのは、敵と規はるゝ人の色々な氣持の變化であつた。つけ規はるゝ自分と思ふが故に、慕ひよる女を情なく遇する「愁の中へ樽肴」のそれ、乃至討たれる迄は大事な體と灸据ゑて身の養生をする「行水でしるゝ人の身の程」のそれなどから、死ぬべき日の近づいたのを知つて、急に萌した美的生活への執着に驅られる「嗚嗒といふ俄正月」のそれ、或は討たれるのを怖れる餘り、かりそめの慕參にも長持の底に潜んで行く「野机の煙くらべ」(傳來記)のそれまでの間に、色々な段階を刻んでゐるそれらの人々の氣持は、西鶴によつて十分書き生かされてゐたとは云へなかつたけれども、兎に色々な感興を起させた。と同時に、敵討つ人の側に起つた事件の中にも、深い味



ひを孕んだものが幾つか數へられないことはなかつた。敵を探る間身をよせた家に、たま／＼結婚の式があつたのに唆られて、共に敵を討つべく連れ立つて家を出て来た義弟に云ひよられ、遂にこれを刺し殺して自分も自害する「太夫格子に立名の男」の女主人公の事件、敵の家と知つて覗ひ寄つた中に、只一人妊婦の苦しんでゐるのを見て、これを勞り<sup>いたは</sup>助けて無事に分娩させる「新田原藤太」の主人公の事件、貧なるが故に敵討にも旅立てず、結果は遂に夫婦喧嘩となり、愛兒と妻とを殺して自殺する「播州の浦波皆歸り討」（傳來記）の挿話などは、さういふものゝ中でも、特に微妙な感觸を湛へてゐる記述であつたと思ふ。

敵討つ迄の経緯の記述に比較的疎だつた西鶴は、敵討の大團圓については、殆どその結果を報告するだけで、一層粗末な取扱ひ振りを示した。彼の物した幾十の敵討物語の中で、敵討の場面が比較的精密に書かれてゐるのは、僅かに義理物語の「身體破る風の傘」「御堂の太鼓打たり敵」の二章一篇位に過ぎない。此の一篇は、恐らく本文中にある「貞享四のとし五月十日」大阪御堂前に起つた敵討といふのが眞實で、或は西鶴自身の目撃したものであつたのかも知れなかつたと思ふが、さうして其爲に彼があれだけの記述を示すことが出来たのかと思ふが、兎に角此の二章一篇の他で、敵討の場面に記述らしい記述があるものは、敵を見かけて斬りつけると、「無禮者人違ひ」と叱咤され、はつとする所を逆に斬り倒されるといふ「播州の浦波皆歸り討」程度の簡單なものを入れてさへ、僅々數篇に過ぎなかつた。傳來記の如き敵討を主題とする作品にとつては、それはかなり物足りない點だと思ふ。

れども、兎に角かうした擦過的な記述の中に語られた大團圓は、形の上から言へば、上述「播州の浦波」のその如く極めて小規模のものから、要害堅固な敵の隠れ家に斬り込んで、敵味方總勢四十五人入互亂れて闘つて、近隣の人々を驚かせる「若衆盛は宮城野の萩」の大げさなまで、幾通りかに分たれる。結果から云へば、云ふ迄もなく無事に敵を討ち果すもの（「思ひ入吹く女尺八」など）、相討に終るもの（「身がな二つ二人の男に」義理物語など）、返り討にあふもの（「播州の浦波皆歸り討」など）、敵が病歿乃至他人の爲に殺害されなどして敵討が成立しないもの（「太夫格子に立名の男」など）、病歿した敵のかはりにその子供を討つもの（新田原藤太）などが數へられる。返り討といふのが比較的多いのが目立つけれども、然し實際の數に於ては無論第一の無事に敵を討ち果すのが一番多く、且つ其處には、討ち得た後に目出度く凱旋するもの（「毒薬は箱入の命」など）、敵は討つたが、敵の助太刀などのために自分も討たれるもの（「内儀の利發は替つた姿」傳來記）の休林の條など）、討つて後剃髪するもの（「身體破る落書の團」など）、自害するもの（「女の作れる男文字」など）など、色々な種類が數へられる。

西鶴の書いた敵討を類別すれば大體以上のやうなことになる。無論もつと仔細に調べて行つたら、もつと異つたものが出て来るかも知れないけれども、まづ大體はこんな所だらうと思ふ。彼の書いた念友關係が複雑であつたやうに、彼の書いた敵討も随分複雑多岐に涉つてゐる。母の敵を討つものがないことなどを別にすれば、或は敵討説話の類型の大部分は網羅されてゐはしないかとさへ思はれる。



彼の知識或は見聞の、廣く豊かであつたことに、此處でも驚かさずにはゐないと思ふ。

が、それよりも、西鶴はかうした複雑多岐な敵討に對して、果して如何なる感懷をよせてゐたのであらうか。時代の子として、殊には時代の常識を彼の思想として語るのを常としてゐた西鶴は、矢張り敵討を武士的氣稟の凝つて發する道義的行爲と觀する因襲的觀念に捉はれて、只管これを讚美してゐたのであらうか。「私には何うもさうとは思はれない。」彼は上來考察して來たやうな敵討の結末に絡んで、或は敵同志の二人に契つた遊女が、敵討の場面に駆けつけて自盡するとか（身がな二つ二人の男に）、問者に入つて却て敵の種を宿した女が、我が子を殺して自殺するとか（野机の煙くらべ）、或は敵討たれた者の妻が、討つた者の家に斬り込んで、却て取ておさへられた上色々に理解されて、討つた者母子と共に遁世するとか（身袋破る落書の團）いふ種類の、隨伴的事件や後日譚を書き加へた。さういふものゝ中、特に深い作者の感懷が寄せられてゐるやうに感じられたのは、「無分別は見越の木登」の後日譚などであつたと思ふ。仇の家に下僕となつて住み込んだあの作の主人公は、折角敵を討ち討つたが、其儘役人に捉へられた。乃で敵討を云ひたてゝ郷里に紹介して貰つたところが、故郷の名家は代變りで、先代に寵を得てゐた自分の家は、父の悪事が顯れて御取潰しになつてゐた。従つて自分の敵討は認めて貰へず、其の結果空しく主殺しの大罪に問はれて、刑場の露と消えるといふのであるが、華々しかるべき敵討のクライマックスが、急轉して縲紲の辱となる邊り、少くとも類型を破つてゐる。これと、敵が自分を待つてゐる爲に慕ひよる女にも許さぬ心入れに感じて、敵討を全然回

ひ止まつて了ふ「愁の中へ樽肴」とが、敵討説話の結末としては、一番面白いものであつたと思ふが、それよりも、これらの結末に於ける悲喜の轉變、敵を討たぬ敵討の終りなどいふものが、纏て西鶴の敵討といふ事件に對する感懷を暗示してゐるのではないであらうか。討つても討たぬも、或は討つのも、討たれるのも、所詮は同じ事だ。人生を支配して流れ去り流れ來る、大きな力の前には、敵を討つての歡びも、討ちそこなつての悲しみも、結局同じものに過ぎないのだ——彼はそんな風に云はうとしてゐるのではないであらうか。さう思つて見れば、彼の取扱つた多くの敵討説話では、踴躍して敵討の旅に出た筈のものが、餘りに多く返り討にされてゐた。敵を討つて遁世するもの、或は子供を殺して自殺する女、敵を討つと一緒に敵の助太刀に討たれるもの、そんなものが數多く數へられた。其處にも此處にも、作者がさうした感懷を、思念を、語らうとしてゐたのではないかといふことが考へられる。敵討のクライマックスに歡天喜地の激情が伴はなかつたこと、敵討の場面を作者が如何にも擦過的に取扱つてゐることなどにも、考へて見れば同じことが感じられると思ふ。若し又一步を譲つて、西鶴にさうした思念を明瞭に語らうとする意圖があつたか何うか疑はしいとしても、純客觀的に世相其物を、世相の中に起る事件としての敵討其物を眺め入つて、これを其儘再現した所に、自らさうした人生其物の味ひが、滲み出すことになつたのであることだけは争へない。全體として擦過的な記述に過ぎなかつた彼の敵討説話が、よし驕る氣ながらもせよ、さうした人生の理趣をさとらせるだけの、深みと眞實とを具へてゐることを、それらの作品の値打として尙みたいと思ふ。



西鶴の書いた武士の念友關係は、上に考察した通り精細微妙を極めてゐた。が、その精細微妙を極めた記述を通觀する時、まづ第一に印象されるものは、契り合ふ二人の武士の意氣と意氣地の強さと激しさとだつた。「傘もつてもぬるゝ身」の小倫が、殿の御威勢をも憚らずに、まことの念者欲しきと云ひきる強さ、念者を問はれて、「小倫に命をくれしもの、たとへば身を摧かるればとて是を申べきや」と嘯く激しき、遂に主君に成敗される邊り、殊に左の手を斬り落されてから、「右の手をさしよべ、是にて念者をさすりければ、御憎しみ深かるべし」と云ふ邊りの強く張りきつた心意氣から、ひいては念者惣八郎が、敵を討つて小倫の墓前に手向け、自ら小倫の紋所の形に腹搔つ割いて死ぬるといふ邊りの激しさが、纏て幾多の念友關係を貫いて流れる根本生命であつた。其處に描かれた多くの武士は、此の強さと激しさとに生きたが故に、一度人を戀うては家を捨て主君を捨て、乞食となつてまだ足らず、遂に愛する人の試し斬りの料とさへ喜んでならうとした。と同時に、かうした強さと激しさとが一度道念の喚發と結びついては、互の密通を許された主君に對する感激より、百年の契を弊履の如く捨て去つて行ひすます放れきつた心持ともなり、嫉妬の激情に結びついては、愛する念者を雪中に丸裸にして、遂にこれを斃殺しにする慘虐にも墮した。云はゞ節義に殉ずるのも、我執に着するのも、等しく直線的な爆發性に彩られてゐたのである。其處に所謂稜々たる武士の氣骨の高鳴りと、

まだ原始味を失はぬ粗野剛直さが感じられた。さうしてその粗野や剛直が、敵討説話に現れては、辱かしめられて激發する怒となつた。かりそめの悪口乃至異名を以て呼びかけられる程度の所謂睡昧の怨をさへ、報しなれば止まない心、報じては酷薄無道に迄墮しなれば止まない心となつた。朋輩を毒殺せんとした女を捉へて箱詰とし、上から五寸釘を隙間なく打込ませた橋山刑部（毒藥は箱入の命）などには、寧ろ凄まじい蠻味とさへなつてゐた。と同時に、節義に殉じて高鳴る氣骨は、死を覺悟して敵討に来る人々を待つ者の、悲しくも亦強く張り切つた心となつて現れた。一言の然諾よく不和な朋輩の妻子を危難に際してかくまひ通す義心となつて現れた（内儀の利發は替つた姿傳來記）、所謂創痕斑々の腕骨を撫して、一番槍の功名談に餘念なかつた戰國武士から、さながらの強さと激しさを承繼いだのが元祿武士の一面であつたといふから、西鶴は此處に正しく當代武士氣質の一面を描破したことになる。

意氣と意氣地の強さ激しさを融かし込んで、西鶴の衆道物語に微妙な味ひを湛へさせてゐたものは、媚めきわたる戀の雰圍氣だつた。その戀の雰圍氣の裡には、前者と並んで戀に頹れた武士の心があつた。見給へ、剛毅殺伐を誇る元祿武士は、其處で媚めかしく美しき美少年の一瞥故に、家をすて主君をすてゝ命をかけて戀ひ狂ふのである。對手の一顰一笑故に、「御家の大事、若殿様にも仰わたされぬ御事まで仰せきけれ」形見は二尺三寸るのである。雪中に斃殺されても一言怒の言葉を發することも出来ないのである。第一美貌に生きる自分と知るが故に鏡や化粧水を懐ろにしよばせ、或は戀し



て成らざるが故に忽ち不義非道に墮して恬として恥ぢないのである。かうした武士の頼れた心は、又其儘に敵討説話にも再現された。人の許婚に通つて鬨討にされる男。敵討の道中に美しい女を見て敵討を忘れる武士(神の咎は弓矢八幡)。それからさうしたアモラスな方面を離れても、果し状をつけられた相手の腕前に怖れて、平詫りに詫つた上、却て事によせて對手を毒殺するもの(毒酒を請太刀の身傳來記)、武藝をすて、算勘辯舌に誇る出来出頭。——泰平の餘澤に慣れて士的感情の剛強さを失ひ、剩へ金と色との間を動く世相に化せられて武士としての表藝を捨て、或は色の世界に没頭して三味線小唄に親しんだのが、又元祿武士の一面であつたといふから、西鶴は此處にも亦當代武士氣質の一面を、かなり鮮かに剔出したことになる。

念友關係と敵討とを通して武家の世界を覗いた西鶴は、以上の如き寧ろ對蹠的な武士氣質の二側面を、其處に見出したのであつた。然も西鶴は元祿時代の子であつた。安土桃山時代以來氳氳に氳氳を重ねて來た國民の生の力が爲政者の固陋な壓迫に歪められながらも、兎に角伸びるだけ伸びきつて、遂に一度に爆發したと云はれる元祿時代の人間として、彼はその時代に相應しい強さと激しさとをもつてゐた。従つて、彼はさうして觀取された武士氣質の一面なる剛強さに、寧ろ共感的な歡びを感じたらしい。でなければ、彼が書いた武士の剛強さに、あれだけ淋漓たる實感は伴はなかつたらうと思ふ。常識的な意味で云へばかなり健全なモラルをもつてゐた西鶴が、さうした剛強さに伴ふ暗側面迄をも是認したらうとは思はれないけれども、少くとも彼がさうした剛強さ其物には、寧ろ陶酔的な共

感を感じたらうとだけは、確に考へられる。と同時に、世相を徹見してその中に蠢く人間の相を根本的に究め盡した西鶴は、少くとも戀に類れた程度の武士の心に、全然同情のある理解をもたなかつたらうとも思はれない。或は却ち或る種の興味と好感とを以てこれを眺めてゐたかと思はれる。にも係らず、彼の武士の理想的典型への關心を背景にした作品に於ては、彼は上述の武士氣質の二面をかなり手酷しく攻撃した。彼は云ふ。「むかしは勇を專にして命をかるく、すこしの韜とがめなどいひつゝのり、無用の喧嘩を取りむすび、其場にて打ちはたし、或は對手を切ふせ、首尾よく立のくを、侍の本意のやうに沙汰せしが是ひとつと道ならず、仔細は其主人、自然の役に立ぬべきために、其身相應の知行を與へ置かれしに、此息は外になし、自分の事に身を捨るは、天理にそむく大悪人、いか程の手柄をすればとて、是を高名とはいひがたし」(發明は飄箏より出る義理物語)と。彼は又新可笑記の「舟路の難儀」に於て、色より身を滅して行く武士を書いて、「總じて武士は相應より内證使の女過る物なり。是榮花の餘世間にしれぬ費ありて、結句表向の若黨仲間不足ありて、かんじんの武役を缺事横道なり。此代官諸事に其難一つもなく、正直を以て大役ををさめられしが、美女のもてあそび止事なく、末は是にて身のはつべき始めなり……此家絶て其名の廢る事遊興に好み入り、武士の私ありし故なり」と云つてゐる。其處に彼の極めて常識的な武士氣質への理想が反映されてゐる。従つてさうした理想を背景としての作品に於ては、彼はもう愛慾のために血腥い事件を惹き起して行く話を、讚嘆的になど決して書かうとはしなかつた。寧ろさうした話を取扱つても、例へば「形の花とは



前髪の時」などに見る如く、念友關係の第三者どころか、第四者迄も點出して入組んだ戀の葛藤を描きながら、遂に双に軋あはらずして無事に治まる大團圓を書くといふやうな態度を示してゐる。同じ敵討説話をでも、理否もなく曲直もなく只ひたすらに對手を討ち果して了はないで、却てこれが病中を優しく勞はり、敵をしてその心入れに感じて自害させる「後にぞしるゝ戀の闇討」の如き作品としてゐる。更に「わが子をうち替手」(義理物語)では、不慮の喧嘩に友達を刺した少年の父を、例へば、「嗚嗒といふ俄正月」の親類縁者達のやうに激動させては了はないで、靜かに子供を戒めて、刺された少年の父の許に届けさせてゐる。さうしてこれを受取つた方の武士をも、徒らに激憤させる代りに、靜かに對手の節義を考へ、更に少年の器量を觀じて、これを刺された我が子のかはりに、養子として貰ひ受けさせてゐる。其他、「女敵に身替り狐」を討つ話(新可笑記)、蛇嫌ひの人を座興に驚かさうとして大事件になりかけたのを、謹んで詫びる事によつて事なからしめた「家中にかくれなき蛇嫌」(義理物語)、我が家の系圖を偽り作つて仕官してゐる武士を、生きる爲にはと笑つて勘辨させて置いて、さて彼が系圖に泥を塗るやうな悪事を働いた時に、初めて事を明かにさせる「筋目をつくり露の男」(同上)、同じ寶刀と短冊を申立てに仕官を望む二人の武士を、何れも一品は偽作と觀破しながら、彼等自身は知らずに陥つてゐる悪事だからと大目に見許してこれをかゝへる「一つ巻物兩家にあり」(新可笑記)など、辿つて來てみると、何れも殺伐剛毅はげに逸る武士氣質とは、まるで反對の武士氣質の一面が、其處に語られてゐることが知られよう。遠謀、深慮、寛宏、叡智、明察、穩かさ等の、激發し易い心と

は凡そ正反對の武士氣質を、西鶴は此處で禮讚しようとしてゐるのだ。此の禮讚には、無論前に云つた西鶴の武士氣質への常識的な評價が裏打されてゐると共に、それは彼の著しく調和を求めたがる傾向にも由来してゐた。強く激しい性格の一面とは凡そ反對な、世の中百般の事象に可及的調和を求めようとする傾向が、西鶴にはかなり根深く認められた。好色生活に粹の理想境を求め、町人生活に色と金との中庸道を求めたのも、何れもさうした傾向の現れだつた。恐らく彼は人間世相の徹底的諦觀者として、其處に見出される悲劇や葛藤の、餘りにも痛ましく慘あはたらしいのに驚いて、かうした調和に心を惹かれて行つたものであらうと思ふ。あれ程強さと潔さを強調し、又それを謳歌した同性愛の記述の中にさへ、彼はさうした調和に心惹かれてゐる彼自身の相を示して了つてゐる。彼が若衆氣質に要求して、「惣じての女は、女の具はる形氣よりしやんとしたるをよし、若衆の男らしく利なるは勿論なり、打見は豊に進まぬを上作物と此道の本阿彌の極めし」(身替りに立名も丸袖)と云つてゐるところなどにも、それが觀じられないことはあるまいと思ふ。此心が、ポーズを捨て、靜かに武士氣質の理想を追求した時に、纏て以上述べたやうな判然した形となつて現れたのであらうと思ふ。と同時に、其處にはまた元祿時代の所謂武士道の影が射してゐた。元和偃武以來既に半世紀、武力によつて當時の社會に於ける第一階級としての位置を獲得し、又それによつて彼等の位置の安固を計らなければならなかつた當代武士は、一面昔ながらの剛強さを保持してゐなければならなかつたと共に、平和時代に於ける爲政者として相應しい心の修養と手腕、或は社會の第一階級者流としての名譽と光榮



とに生きる爲の品位と人格とを兼具へてゐなければならなかつた。家康以來の文治主義がまた嚴にこれを要求した。儒教的な教化が、消極的温情的な倫理觀念が、かくて元祿の武士社會には、かなり思深く植ゑつけられてゐた。さうして此の儒教主義的倫理觀念と、昔ながらの武士的氣稟との、或る意味でかなり矛盾した二つのものが、時代の要求に強ひられて、微妙に糺ひ合された所に、所謂當代の武士道があつた。其の武士道に規定された理想の武士氣質が、西鶴の語つた理想の武士氣質のうち一例へば彼がそれを語るべき材料を過去に摸索したのは事實であつても、反映されてゐるのでないとは素より云はれない。云はゞ、西鶴も亦、武士氣質と武士生活とに對する絶對的規範であつた武士道に彼の武士氣質と武士生活とに對する理想を見出してゐたのであつた。だから彼は、理想の武士氣質を書かうとして、冷靜深慮を推讃して、屢々勇にのみ逸る武士氣質を戒しめると共に、さうした武士氣質の強さ激しさが義に殉ずる道念と絡んで放れきつた現れとなるものをも、亦屢々口を極めて讚嘆した。託せられた人の子を水に溺れさせた自責の念から、我が子を強ひて河水にはまらせる神崎式部(死なば同じ浪枕とや義理物語)、亂軍のうちに逃げ惑ふ時、自分の身寄りの子を捨て、夫の身寄りの子供だけを懸命に抱いて奔る「同じ子ながら捨たり抱たり」(同上)の女主人公、死者との約束を重んじて、墓前に乗馬を繋いで去る武士(死出の旅約束の馬新可笑記)の話など、何れもさうした種類の道義と結んだ武士の強さ激しさを讚嘆したものでないものはなかつた。

以上考察を経て來た通り、西鶴の理想の武士氣質觀は、まづ大體は所謂武士道のそれと相通するも

のであつた。が然しさう云つたわけではまだ盡されないものが幾分か残されてゐた。云ふならば西鶴には、元祿町人のもつ新興の時代精神を身一つに集めてゐたかと思はれる彼としては、寧ろ不思議にも、一種尙古的保守的な思想傾向の一面があつた。その傾向が彼の理想の武士氣質觀にも亦影を投じてゐたのである。既に泰平幾十年の元祿時代である以上、算勘仕置の方面に堪能なことなども、亦當然必要な武士氣質の一面でなければならなかつたらうと思ふし、又さういふ方面の才能が、當時既に相當重視されてゐたのであることは、さうした方面の才能によつて出頭御取立てに預かつてゐる武士が、彼の武家物の中などにも屢々認められることによつて、正しく想察されるのでなければならぬ。にも係らず、彼はその作品中に於て、此等の武士を、たゞ所謂出來出頭として侮蔑的に取扱ふばかりで、少しも尊敬しようとはしなかつた。「今時は武道は知らなくても十露盤を置ならひ、始末の二字を名乗れば、何處でも知行の種となりて、譜代の筋目正者はかならず先知を減少せられる。世はいろいろにかはりて、今より末々は、諸侍たる者、刀の代に秤を腰にさして商ひはやるべし」といふ「無分別は見越の木登」の一節、「市にまぎるゝ武士」のこれに類した感想、或は「見越の木登」の大壁源五左衛門、「播州の浦波皆歸り討」の樗李彌等の所謂出來出頭が、彼の作中人物として、作者から最も虐待されてゐた武士であつたことなどを思へば、恐らく思ひ半に過ぎるであらうと思ふ。さういふ所に、私は彼の理想の武士氣質觀が、元祿的といふよりもつと古い、偏固なものを含んでゐたことを考へるのである。新可笑記の「槍引て行く鼠」に、所謂武士の正道的修業をのみ重んじて、奇道權道を輕蔑



する氣持を示してゐる所などにも、同じやうな新しからぬ彼の考へ方が推察されると思ふ。云はゞ彼は元祿の武士道が要求した所よりも、もつと窮屈な理想の武士氣質觀を懷いて、當代武士と武士生活とに對してゐたのであつた。

ところが當代武士氣質は無論其處に彼の理想とびつたり一致するものも認められたと共に、此章の冒頭に考察したやうな、それと殆ど合致し得ない斷面の多くを含んでゐた。其處に當然彼等の生活を規定する武士道を、重苦しい桎梏と觀する武士の心の喘ぎがなければならなかつた。然も西鶴には、これも前に述べた通り、さうした非武士道的な武士氣質の一面にも、或る好意的な理解をよせるだけの深い人間觀察があつた。人間性への諦視があつた。寧ろさうした武士氣質の現れを、人間本來の相の一面だと觀じたがる氣持があつた。従つて彼にはさういふ武士氣質の一面をもつ人々が、只管武士道の繫縛に繋がれて、云はゞ一種の矯飾生活に獅噛みついてゐなければならぬことに對する、滿腹の同情があつた譯だ。其處に一種變挺な矛盾が感じられると思ふ。一方には當時の武士道よりもつと窮屈な理想を翳して武士生活を規定しながら、他方にはその規定に喘ぐ人々に滿腹の同情を寄せる。云はゞ西鶴は理想で武士を溝の中に突つ込んで置きながら、現實に直面した心ではこれを憐むといふ矛盾に陥つて了つてゐるのだ。

と同時に、鋭い人生の觀照家として、人生に對する微妙な理解をもつてゐた西鶴は、道として、概念としての軌範が存在するところには、常に人間の生命感の伴はない行動があることを正しく知つて

ゐた。自ら彼は概念となつた武士道が、概念であり道であるが故に、當然の觸發を伴はない武士の心を、空虚のまま曳摺つて行く不思議さを問題にせずにはゐられなかつた。それは前者とは一見相似て實際はかなり異つたものであると思ふ。前者には武士道に背反する心があつた。が、後者には寧ろ全然人の心はないのである。武士道に背反する心が、背反するが故に喘ぐのは苦惱である。その苦惱は云ふ迄もなく武士道を重く裏づける。背反するものが果して醜であり、惡であればある程、其處から來る苦惱に裏打された武士道は光を増して來る。が、道として概念としての軌範には、素より何の裏打も伴はない。たゞ空疎な概念に拘束されるものゝ、不聰明があるだけだ。或はその不聰明を強ひられる所から來る悲哀があるだけだ。従つてその悲哀の色が濃ければ濃い程、それを由來させる軌範は莫迦らしく下らないものと考へられるのだ。西鶴はさうした馬鹿らしく下らないものとなつた武士道を、時々注意して見せたのだ。敵と覬はれる理由がなくても、誤つて敵と覬はれれば、武士道の手前から敵討たれる者としての覺悟をしてゐなければならなかつた武士。敵を討つべき因縁もないのに、周圍から敵があると噂されれば、又武士道の手前討ちに行かねばならぬ武士。互に何の意恨もなく、何の拘泥もないのに、「世間の思はくばかり恥ぢて自命捨つる」「不斷心懸の早馬」の二人。それらとはかなり色合ひを異にするけれども、兎に角主命故に人の娘の生肝を奪ふといふ非道を、非道と知りながら敢てして武士道を立てなければならなかつた武士(生肝は妙藥のよし||新可笑記)——西鶴はかうして名のため武士道といふ概念のため、心にもないことをしなければならぬ武士の悲哀を時々書いたの



である。が彼はそれを概念に囚はれた人間の不聰明が生む悲劇とは見なかつた。却てそれを義理に殉ずる武士の心と観じてゐた。云ふ迄もなく武士は絶対に武士道に適従しなければならぬものと考へてゐたからである。其處に彼の思惟的怠惰乃至思考の不透明が考へられると思ふけれども、兎に角彼はかういふ觀察點からも、武士の生活は思ふに任せぬ悲しいものといふ思想に入つて行つたのであつた。自ら彼の作品には、「人間定命の外義理の死をする事、是弓馬の家のならひ」「死なば同じ浪枕とや」、「武士の身は何國を住み家と定め難し。自分の外人の事にも義理の一命を捨るも習ひぞかし」（市にまぎるゝ武士）などいふ種類の、武士生活を悼む言葉が屢々繰返されてゐた。理窟は兎に角、武士道といふものが、實際絶對的な威力を以て、武士生活を拘束し支配してゐたものであつたことを思へば、此の彼の武士生活觀は無論正し克的を射たものであつたと思ふ。尤もかうした考へ方は、徒らに義理に殉ずる武士の生活を誇張した後年の作家によつて、常識に迄墮されたけれども、まだ大方の武士が必ずしも彼等本來の性と心によつて動くことを捨てゝゐなかつた時代に、かうした想念を捉へて來ることに成功したのは、流石に犀利な觀察眼をもつてゐた彼であつたことを思はせる。

が、かうして武家生活に深い同情をもつてゐた西鶴が、その武家物に於て繰返し云つた教訓は、彼自身の實感とは全然矛盾する想念、云はゞ彼自身の思考的昏迷の上に築かれた想念より派生したものであつたが故に、素より武士氣質乃至武家生活の第一義に觸れ得るものではなかつた。殊に「女敵に身替り狐」などの如く、稍々さうした點に觸れるらしく思はせながら、彼の思考の溷濁の故に、却て

教訓物として相應しくないものを孕んで了つたものさへ、一二ならず數へられる。が、さうしたものを別にすれば、常識としてはまづ大體健全なものであつたことが云へようと思ふ。然も人生に調和を求め彼の深い心が、しつかりとその常識を包んでゐるために、全然心の響の伴はない空疎なものとなりきつてはゐなかつた。其點では教訓としても必ずしも不成功に終つたものとは云はれないかも知れない。「他の愁る時は其心に愁るを正道とぞ」（梢に驚く猿の執心||新可笑記）と云ひ、「惣じて物の命を取事勿れ」（同上）と云ひ、或は嫉妬を戒しめ遊蕩を諭し、粗野暴慢を警告するといふ種類の、完全な常識として、素より多くを云ふ程のことはないけれども。

## 五

西鶴の武家物が内包する所は、以上考察して來た通り、かなり色々な方面に涉つてゐた。が、其處に取扱はれた内容のうち、靈妙な實感とか、濃やかな理解の裏打とかいふものを伴つて表現されてゐたものは、僅かに念友關係の種々相と、意氣と節義に生きる武士の強さだけだつた。敵討の色々にせよ、武士道の極楷と人間的意慾との相剋に惱む武士の心にせよ、色々書かれてはゐたけれども、それは單なる知識的な報告、或は僅かに觸れられた理解としての表現しかもつてゐなかつた。鋭い觀察の眼をもつた作者ではあつても、西鶴は結局町人であつた。武士の生活を外から眺めるだけでも、上來考察して來たやうな色々な點を捉へるだけの觀察力をもつてゐたのは偉とするに足りるけれども、



矢つ張り其の理解が、武士生活のあらゆる方面に、徹底的に濃やかではあり得なかつた。それには町人として、武士の世界を彼岸にばかり眺めて、武士道をたゞ嚴かに尙いものとのみ考へてゐたのも悪かつたのだと思ふ。兎に角彼の捉へた諸題目の中で最もよく書かれた武士の念友關係さへ、女色描寫程には靈妙完璧を極め得てゐなかつたといふのも、彼が健全であつた爲ばかりではなく、一つにはかうした武家生活への理解の不十分さから來たものであつたのかも知れない。

が、さうは云つても、男色大鑑は優れた作品であつた。書かれた内容も兎に角複雑だつた。表現も、各短章の脚色も、かなり優れた作家的手腕を思はせた。菊池寛氏が本書の表現的價値を激賞して、「大鑑の出た貞享四年の卯年は、西鶴の筆が高潮に達した時で、筆觸の雄渾なる、心理描寫の鮮なる、遙に他の諸作を凌駕してゐる」(シングの戯曲と大鑑)と云はれたのも、當然であつたと思ふ。がたゞその文章の雄渾瑰麗が、作者にとつての持味でなく、一種のポーズを孕んだものであつただけに、時に努力の跡の見え透く拮据聲牙に陥りもしてゐるのが惜しまれる。

脚色の複雑巧緻といふ點から云へば、傳來記も必ずしも捨てたものではなかつたけれども、これはまた餘りに複雑なプロットを、餘りに簡單に表現しようとして、人物の心理的陰翳や事件の味ひなどが、しつくりと浮み出してゐない恨みがあつた。彼の武家生活への理解が稍々擦過的なものであつたやうに感じられるのは、或は此の傳來記のさうした方面への表現が、餘りに稀薄不十分であつた所から來たものかも知れなかつた。仔細に見れば、上に述べた通り、随分色々な斷面が考へられる西鶴の

武家物であつただから。

傳來記や大鑑と異つて、義理物語と、殊に新可笑記は、各短章の構成が簡單だつた。それでも義理物語には多少の脚色上の苦心や手腕が觀じられた。新可笑記にも、多少小説的な運びや焦點の打ち方がないことはなかつたけれども、これはまづ百物語類似のものといつてもいい種類の小咄集に近かつた。尤も義理物語にも幾分さうした性質はあつた。それだけ作者の氣持は、悪い意味でなく、安易だつた。叙述にも強ひて工夫された舞文曲筆の跡はなかつた。従つて大鑑などには見られない眞率な味ひがあつた。それに比すると新可笑記は、前にも云つた通りその製作動機に不純なものがある上に、作者が稍々教訓に着して改まつた氣持になつてゐる爲に、文章記述にも不純な濁濁が多い。ちよつと艶隱者のそれに似たやうな文章の感じさへある。材料も雜駁だ。支那種の譚案か聞き囁りらしい話、それから大鑑でも多少氣になつた漢文の引用なども眼立つ。がそれも、武家物に行詰つて、新機軸を出さうとする爲の努力であつたと思へば面白い。

武家物として書かれた新可笑記が、變に内容の不純な雜話集的なものになつて了つたことは前に云つたが、さういふ點から云へば、男色大鑑にも、「情に沈む鸚鵡盃」のやうな寧ろ女道物語に屬すべきもので、男色はほんのついたり過ぎないやうなものがあつたし、傳來記にも、敵討説話になつてゐない「大蛇も世にある人が見た例」、或は敵討が全然挿話かつたりのやうなものになつて了つた「斷心懸の早馬」などが見られた。節義に殉ずる武士の話を中心に、理想の武士氣質を書かうとし



しい義理物語にも、例の二章一篇の敵討説話以下、作品全體の統一を破る種類の作品が込んでゐた。此の作者がもつてゐた連想乃至思考の、よく云へば奔放多角さ、悪く云へばがこんな所にも反映されてゐるものと思ふ。

之を要するに武家物は、浮世草子作者としての西鶴にとつて重要な活動圏の一つであつたけれど寧ろ半武家物の大鑑以外には、彼を重からしむべき程に作品として優れたものはなかつた。が、彼が此處で、或は材料に對する知識の乏しさからであつたかも知れないけれども、兎に角材料との距離を忘れて作品に即き過ぎるといふ、從來の彼が兎もすると陥りたがつた作家的未熟さを、完全に擺脫しきつて、純客觀的な態度を確立し得たこと、其の結果として、彼が遺した武家氣質乃至武家生活への記録が、表現的價値は別として、兎に角それらのものゝ色々な斷面を、如實に傳へ得たことを、彼自身及び後世にとつての武家物の値打と考へることが出來ようと思ふ。云はゞ武家物に於ては、寫實小説家としての西鶴の手腕よりも、寧ろ寫實小説家としての態度其物の方が、より多くの價値を遺してゐるのだと思ふ。——西鶴の武家物に對する考察として、以上はたゞこれを内から觀たゞけの研究であつて、武家研究としての完成を期する爲には、なほ外からこれを究めなければ——文學史上に於ける位置其他を調べなければ、形として完全なものとは云へないと思ふけれども、もう既に豫定の紙數を大分超過してゐるから、此稿は一まづ此處で筆を擱くことにする。

欠



# 欠

ての世相の變轉を叙し、次いで藝者、醫者、僧侶、雇女、乳母などといふやうな、夫々世相の一角を形造る人々の群を、職業別に一括して書いたもので、同じ町人物とは云つても、金一面の永代藏などとは、作の基調も色合も随分異つたものであつた。恐らく金に即して町人生活を眺めはじめた西鶴の眼が、作を重ねるに随つて、漸次に金其物を離れて、「世相或は人間の生活其物に眺め入らうとする氣持にと移つて來たのであらうと思ふ。従つて、はじめのもの程捨象され勝ちであつた町人の、經濟生活」と對蹠面をなす愛慾生活なども、後のもの程濃厚に作中に織り込まれるやうになり、遂に世の人心に至つては、「一日暮しの中宿」とか、「官女のうつり氣」とかいふ種類の、寧ろ好色本の一齣とも見られるやうな作品さへ現れるに至つたのであつた。人間の生活を全圓的に眺めて、然も力點を愛慾に置いた置土産が、かうした作者の歩みの前に生れ出でたのも、素より當然であつたと思ふ。

## 二

色と金との間を彷徨した元祿町人の生活から、愛慾の一面を捨象した町人物の世界は、云ふ迄もなく黄金萬能の世界であつた。其處には色濃い拜金主義が猛烈な渦を巻いてゐた。「ひそかに思ふに世に有る程の願ひ何によらず、銀徳にて叶はざること天が下に五つあり、それより外はなかりき。これにましたる寶船のあるべきや」(永代藏「初午は乗て來る仕合」と云ひ、「人の家に取りたきは梅櫻松楓、それより金銀米錢ぞかし」(同上「二代目に破る扇の風」と云ふ、すべてが猛烈な拜金主義者の言葉



でなければならなかつたと思ふのに、それさへ西鶴の町人物に描かれた世界に比べれば、なほ生々温  
いと感じられる。それ程西鶴の描いた世相は金に徹底してゐた。その世界に於ける人々は、彼が「  
徳にて叶はざること五つあり」と云つたその五つの道をさへ、金のためには踏み躪つて顧みなかつた。  
彼等の或者は、犬の死骸を黒焼にして、疳の薬と詐り賣つて歩いた（同上「才覺を笠に着る大黒」）。  
した金の回収が覺束ないとなれば、人の息子を養子に迎へるといふやうな嘘をも吐いて、弄ぶ  
ざるものを弄びもした（胸算用「銀一匁の講中」）。西鶴が「人の家にとりたきもの」と云つた梅松櫻井  
の庭木をさへ、枸杞五加木から十八さゝげといふやうな、「取りえのあるもの」に植ゑ替へた（永代藏  
「銀のなる木は門口の柵」）。功利以外、金以外、殆ど何もない元祿町人の生活相と、さういふ町人の  
生活を孕んだ世相とが、其處には徹底的に描き出されてゐるのだ。

ところで、既にかうした世相であり、かうして金にのみ人生の意義と可能とを見出してゐた人間で  
あつたが故に、西鶴の町人物に描かれた人々は、又逆に金から徹底的な支配を受けてゐた。元來が人  
間生活の方便のために作られたものでありながら、金は不思議にも人を役する力をもつてゐる。金を  
單に金として、物質として見てゐる間はまだ理解が浅い。金は魔物である。生命であり力である。善  
にもあれ悪にもあれ、あらゆる力の發現の源泉となる。不思議なものだ」といふやうなことを、嘗て  
夏目漱石も云つてゐた。黄金萬能主義の世相に住する町人物の人々は、此の金のもつ不思議な力に支  
配されきつてゐるのだ。彼等には所謂恆心など微塵も無かつた。彼等は人生に於ける悲喜の總てを金

に見出してゐる。すべての行動を金の有無によつて規定されてゐる。貧富の變轉につれて彼等の心は  
何うにでも變つて行つてゐる。「今は七十餘歳なれば少しの不養生も苦しからじと始めて上下共に我  
袖に著替へ」といふ成り上り者も、豊かさに慣れては何時知らず人柄までもしをらしくなつて行く  
（永代藏「煎じやう常とはかはる問藥」）の昔は千二百石取つた人の息女として萬を花車に暮した女も  
落魄れては裏町の小質屋に、僅か長刀の鞘一つを云ひ懸りの、けちなゆすりを働いてゐる（胸算用「長  
刀は昔の鞘」）豊かに遺産を受繼いだ時には餘りに卑吝な父の遺言に逆つて、人間らしい心持を示し  
た男も、其の心故に産を傾けて、借金しながら死んで行く時には、或る意味で、父のそれより亂暴な  
遺言狀を遺してゐる（永代藏「朝の鹽籠夕の油桶」）。黄金萬能主義の世相を徹見した西鶴は、かうして、  
金が入々を支配して行く形を諦視し、従つて、金が入々の心に食ひ込んで、複雑微妙な作用を示すこ  
とを、精緻を極めて觀察したのだ。此の意味で、彼は決して金を單なる物質とのみ觀てゐたのではな  
かつた。「富貴は悪をかくし貧は恥をあらはす」（町人鑑「古帳よりは十八人口」）と云ひ、「親分限なれ  
ば不孝者も隠れて知れず、親貧なればすこしの悪も包み難し」（同上「津の國のかくれ里」）と云ふ、彼  
が金の性質に與へた説明は、思索に乏しかつた彼の言葉の常として、兎もすれば、淺薄な常識と見ら  
れ易い危険をもつてゐるけれども、それでも其處に金を單なる物質以上の不思議な力とみてゐる氣持  
が、端的に反映されてゐる。況して彼の町人物に於ける具體的な記述に觀る時、彼のさうした點への  
觀察が、極めて深く微妙なものであつたことを思はずにはゐられない。其處では金が——金のな、



とが、直ちに人間をして人生の無常を觀じさせた(永代藏「怪我の冬神鳴」)。人の嫌ふ貧乏神を祀り、邪鬼にも陥らせた(同上「祈るしるしの神の折敷」)。人間の心を、強奪の目的で覗つた金が、皆大金もするために、手出しも出來ずにしり込ませるといふ程に、弱く萎縮させもすれば(胸算用「奈良の庭籠」)、「我と身を引てわづかなる亂れ錢のそばへも寄りかね」といふやうな、金への恐怖に捉はれさせもした(世の人心「引手になびく狸婆々」)。拾はれた金が、極端な拜金主義者の心を占領して、何時の間にか遊蕩に足を踏み入れさせれば(二代目に破る扇の風)、店の者の拂はずに歸つた酒代が、それを請求された始末屋の主人を、「逆も銀出すからは只歸るは一代の損と分別極めて」茶屋酒に親しませる動機ともなつた(世の人心「色は當座の無分別」)。思ひがけず、煤拂ひの日に見出された金が、「かゝる盗心ある鼠を宿しられたる不祥に、満丸一年此銀を遊ばして置きたる利銀を、屹度母屋から濟まし給へといひ懸り、一割半の算用にして十二月晦日の夜請取り、本の正月をするとして」老婆を獨り寝させるといふ、徹底的な卑陋さを發揮させる機縁ともなつた(胸算用「鼠の文使ひ」)。黄金萬能の世相——殊に大阪といふ商業都市の眞ん中に住んでゐた西鶴は、かうした金のもつ不思議な力への徹底的な味識を得るのに、極めて都合のいい條件をももつてゐた譯であるけれども、兎に角かうして金の力を激見した點でも、彼は極めてユニツクな作家であつたことが云はれなければならない。好色本作者としての彼を激賞した田山花袋氏の如きは、又此點からも彼を嘆稱して、「日本ばかりではない、外國にもこれ程金を描いた作者はないかも知れない」(西鶴小論)と迄云つてゐる。近頃の所謂プロレタリア文

の中などに、或はもつと深刻な、もつと金に歪められた人間の心などを書いた作品があるかも知れないと思ふけれども、所謂プロレタリア文藝が、傾向的な主張に急な作品であるだけに、西鶴だけの複雑さと微妙さとは、恐らくさういふものにも望めまいと思ふ。宮島資夫氏の「金」などを讀んで、私はふとそんなことを考へさせられたのであつた。

兎まれ西鶴はその町人物に於て、元祿町人の生活相と、さうした人々の生活を孕んで展開された世相とを、精緻を極めて活寫した。それは云ふ迄もなく只一色の黄金萬能の世相であつた。が、「通觀すれば只一色の黄金萬能の世相でも、流石に處によつて夫々特殊な地方的の色彩や空氣がないことはなかつた。鋭い觀察と微妙な感受性をももつてゐた西鶴が、素よりさうした地方的の色彩や空氣の相違に、鈍感であらう筈がなかつた。京大阪江戸の所謂三都をはじめとして、長崎、堺、奈良、伏見等に於ける、「經濟生活を通して見た地方色の相違を」彼は鮮かに描き分けてゐる。外人相手の大がかりな商賣などに慣れて、僅かな利得など眼中に置かない長崎商人の空氣さ、従つて僅かな資本では思はしい商賣にも取りつけぬ經濟生活の規模の大きさ、それとは反對に地味にくすんだ堺の町人生活、同じく慎ましやかに穩かなうちにも、舊都らしい豊かさを漂はした奈良の空氣などといふものが、どれ程鮮明に描き出されてゐたことか。嘗て近松秋江氏が、「異國のモウパッサンやメリメエなどが鱗鱗立しても及ばない名文」とまで推奨した「具足甲も質種」(世の人色)の一節の如き、桃山時代の豪華さを昔の名残りととゞめながら、果敢なく亡びて行かうとする伏見の町の、淋しくすがれた人々の生活の趣を、



至妙と云つてもいゝ程の深い感觸と細かさとを以て描き出してゐたと思ふ。廣く世相を大観して根本の相を掴むと共に、その大観されたものゝ隅々への正しい味識をも有つてゐた西鶴であつたと思はれる。

が然し、さうして至妙に描き分けられた經濟生活に於ける地方色の相違といふものも、西鶴に於ては要するに人間の氣質の相違が根本になつてゐた。例へば、江戸の經濟生活の寛濶さ放漫さを云はうとしては、所謂江戸人氣質から出發して「高うて買はぬといふ事なし。京大阪にては、相場違ひの物は、設へ祝儀の物にしてから、中々調ふべき人心にあらず、爰を以て大名氣とはいへり。京大阪に住み馴れて心の小さきものも、其氣になつて錢を算むといふ事なし、小判を厘秤にて懸る事なし」きを取れば又そのまゝに先へ渡し、世は廻り持ちの寶なれば、一人として吟味する事にはあらず」算用「長久の江戸店」と書きつゞけて行くといふやうな、その土地に住む人間の氣風を描いて、その氣風の反映した空氣乃至經濟生活の性質を思はせるといふ範圍内だけのものであつて、其處に行けてゐる商賣其物の種類の様式の相違などには、殆ど言ひ及んでゐなかつた。古くからの商業都市とて發達して來た大阪の商業様式と、新しい植民地であり殊に武士の都であつた江戸のそれとの間には、恐らく随分著しい相違があつたらうと思ふのに、さうした方面への記述は殆ど見出されないいふやうに——。云はゞ西鶴の描いた地方色の相違は、直接經濟生活に參與してゐる所謂支人のみそれではなく、矢張り外から眺めた素人のそれに過ぎなかつたのだと思ふ。田山花袋氏は、西鶴と

ふ男は、何時か一度は緞の着物に前垂かけといふやうな姿であつたのではないか、といふやうなことを云つてゐたけれども、此點で私には何うもさうは思はれない。さうして彼が直接に商賣に携つたことのある人間ではなかつたが故に、當時の經濟生活としては、最も重要な意義をもつものであつたらしい投機熱などを、比較的軽く見過して了ふ不用意さなどに、墮してゐるのだと思ふ。

が、さうした素人らしさが齎らした作品の不滿は多少あるにしても、西鶴は兎に角よく世の中を眺め渡してゐた。當時の商業が、前代に比して、すべて豊かに大規模に、且つ便利第一主義に傾いて來たことや、資本主義的な組織が漸次に根を下ろしはじめて來た様子などといふものを、彼は極めて正確な把握を以て書いてゐる。と同時に、經濟生活に於ける地方色の相違をさへ、根本は人間の氣質から出發して眺めようとした彼の、世相に蠢く人間達の色々な氣質や生活振りへの理解も、亦當然確實さと複雑さともつてゐた。永代藏から世の人心に至る四部のすべてに書かれてゐた所謂長者氣質や手代氣質の色々から、世の人心に取り集められてゐた醫者、僧侶、乳母、女中乃至は其日暮しの細民などの生活に絡る特殊な條件と、その條件から派生して來る生活振りなど、實際色とりどりに描き分けられてゐた。一般の女房氣質、乳母や其他の雇女、殊に「命に掛の乞所」(世の人心)に書かれた醫者の生活相など、さういふものゝうちでも、特に作者の微妙な觀察と正確な理解とを示すものであつたと思ふ。



明けても暮れても金を目標として動いてゐた町人、殊に新しい經濟組織のうちで獨り巨利を占むべき條件に置かれてゐた町人の生活が、目を逐うて潤澤になつて行つたのは素より當然であつた。續々がさうした潤澤さのみ生甲斐を感じて、「惣じて三人口までを身過とは云はぬなり。五人より世を覆るとはいふ事なり。下人一人もつかはぬ人は世帯持ちとは申さぬなり、且那といふものもなく、朝も通ひ盆なしに手から手にとりて女房盛りで食ふなど、いかに腹ふくるればとて口をしき事ぞかし」(祈るしるしの神の折敷)などと考へてゐるところにも、如何に彼等の世界が景氣のいゝものであつたかが覗はれる。にも係らず、彼等は潤澤な財力を生かしてつかふべき生き方を許されなかつた。又知りもしなかつた。永代藏に描かれた致富の動機などの中で、僅かに社會的意義をもつものは、「國に移して風呂釜の大臣」に於ける、荒蕪地を開墾する話位のものであつた。(彼等の生活が、貯蓄にしろつかふにしろ、如何に無意義なものであつたか想像されると思ふ。豊かでありながら、無意義な生活を餘儀なくされてゐたが故に、其處に當然世を擧げての奢侈と榮耀と逸樂とが誘された。打ち續く泰平が無論さうした風潮を一層煽り立てた。豊かで贅澤な元祿世相が、かうして展開されたのだ)辛うじて大晦日を越し得た塗物屋の内儀が、「火燧に紫ふとんをかけ、茶縹子の煎敷、延の鼻紙に壺打のやうじ取り添へ、たばこの火に伽羅を焼きかけ、煎じ茶を臺天目にて運ばせ、

手もとに源氏物語、いたづらに氣を移す事を年中の仕事にして、花見紅葉見の鴛籠、芝居の替り／＼に棧敷をとらせ、中居腰元お物師つれて」(古帳よりは十八人口)といふやうな、身分不相應な日常生活と遊樂氣分とに耽つて行き、ないものまでもある顔の僭上男が、「帳羅をひつばつては茶屋小屋に入り浸る(胸算用「都の顔見世芝居」といふやうな、遊樂氣分の横流も、其處に當然生れ出た)「諸國の人を見知るは伊勢」(世の人心)の伊勢の繁昌などに、最もよく示されてゐるやうな、所謂盛り場や名所舊跡の繁榮なども、必然的に結果して來た。すべてが豊かであつたが故に華やかに浮き／＼した世相であつたに相違なかつた。西鶴の町人物は、その好色本に於ける同じ種類の記述などと共に、さうした世相の豊かさや贅澤さを、極めて明確に傳へてゐる。

が、好色本の世界が、何うかするとさうした豊かさ一面に片づいてゐたのに對して、町人物のそれには流石にさうした贅澤な一般世相のうちにも、かなり著しい貧富の懸隔があつた。一方に、後の江戸の戯作者達が好んで描いたやうな、金があり過ぎて、煩い男があるかと思へば(胸算用「闇の夜の悪口」、他方には、僅か十四文の編笠を、暮の夜市に賣りに出して、果敢なく年を越さうとするやうな、情ない暮しもあつた(同上「つまりての夜市」)。一年中の豆腐の代金に七貫七百六十二文を拂ふ大身代があれば、夫婦に小猿一匹のしがない所帯をさへもちかねて、猿をすて、夜逃げしようとするもの(町人鑑「保津川の流山崎の長者」、乃至は思ひがけぬ冬神鳴にたつた一つの鍋釜を碎かれ、止むを得ず買ひ求めたばかりに、「其年の暮にそれ程足らずして九匁二十四五所に買ひがかり、やかましき事を聞



きぬ(怪我の冬神鳴)といふやうな、乏しい生活に喘がなければならぬ人々も多かつた。俳諧師乃至藝間として、權門富者の生活に親近する機會の多かつた西鶴は、彼の眺めた元祿の生活を、その町人物の隨所に、追眞の筆力を以て描き出した。「おもしろの女蕩の都や、山も川も花の歩行くを見て、悲しやいかなる因果にて田舎には生れけるぞと、我が國元の事を忘れて、遊興に氣を亂しける。されども限りありて、歸るさに色よき妾者十二人抱へて豊後に下り、居坐りの普請美を盡して、軒の瓦に金紋の三字を付けならべ、四方に三階の寶藏、廣間につゞきて、院、六十間の廊下、東西に築山、南に洲濱を掘らせ、岩組西湖を移し、玉の蔭石、唐木のかげに雪舟の卷籠、銀骨の瑠璃燈をひからせ、瑪瑙の釘隠し、青貝の梁鼻、眞綿入りの疊に天鷲絨の付け、其外の結構記し難し。雪の朝を詠め、夏の夕涼み玄宗の花軍をやつし、扇軍とて數多の羊左右に分けて、其身は眞中に坐して汗しらぬ姿を、兩方より金地の風に扇ぎ立てられ、風強きか女に靡き、負けたる方の扇は振ぎ取りて池にうかめ、扇ながしを慰みの一景、昔の眞野の長者は奢には何としてかは及ぶまじ(國に移して風呂釜の大臣)といふのが、やがて彼の描いた富者の中でも、特に元祿的な、氣違ひじみた豪華さをもつてゐるものゝ一例であつた。豊富な色彩と羅びやかな物の形象と、放縱な官能の匂ひと、さうしてそれらのものゝ眞ん中に膨れ上つてゐる町人の傍若無人な生活態度とが、さながらに想ひ描かれるではないか。無知故に、さうして旺盛な活力の捌け口を他に求め得ないが故に、彼等はかうした生活を人生最後の理想郷と考へてゐたの

これ程迄に豪華絢爛を極めたものでない迄も、西鶴の描いた當代富者の生活で、かうした種類の豪華さと所謂成金臭味とを帯びてゐないものは、恐らく無かつたと思ふ。

と同時に、鎗屋町といふ淋しい裏町に住んで、出入ともにしがたない場末町の生活などを眺めてゐた西鶴は、惨めにひしやげられた貧乏人の生活をも、精妙を極めて觀察してゐた。「夫婦子が一人、弟に二三郎とて背癩病、ひとり乳のませし乳母が足立たずして外に頼む鳥もなく爰にかゝり舟、日和を見てもどれを一人出て行けといふものもなし。さりとは十貫目の利銀にて八十目取り、五人口は過ぎがたし。此銀朔日に請取り、五匁の家賃をのけて置き、白米のよきに味噌鹽薪をととのへ、常住香の物業、この外にはいかなく、三月の鯛を一枚、松茸一斤二分する時も目に見るばかり、咽がかわけば白湯に焦殻、油火も眞中につともして、これを寢さまに消して鼠のあるるをかまはず、盆正月の着物もせず、年中始末に身をかため、慰みには觀世紙縷をして明暮不自由なる世や(怪我の冬神鳴)と云ひ、更に徹しては、「古錢買を呼び入れ、鏡臺の金物、銅網の鼠取り、禁中熊手一本、爪をれの五徳一つ、取集めてから錢百三十に」値段つけさせた夫婦が、「人の聞くとも知らず、借錢の分は始めから濟ます心入にあらず、錢五百天から降れがな、ゆるりと取る年男と、哀れやいたいけ比の娘、今いくつ寢てから正月ぢやと云ふを、米の有る時が正月よと白眼」みつける(永代藏)世渡りには淀鯉のはたらきといふのが、さういふ彼が描いた貧乏人の生活であつた。暗く悲しい雰圍氣の裡に、或は意氣地なく銷沈し、或は惨めに歪んだ人間の心持が端的に滲み出してゐる。殊に彼の好んで作品の場面と



した場末町の小質屋とか、暮に迫つての夜市とか、乃至は渡し舟の中の貧乏人達の話とかいふものに反映された貧乏生活の陰暗さは、分限長者の生活の豪華さが呆れる程のものであつたのと同様に、は寧ろそれ以上に、驚くべきものがあつたと思ふ。『日常目睹する所といふ以上に、感傷の涙に曇らるることのなかつた鋭い目と、如何なる人間生活の深潭をもまじろぎもせず直視し得る性格の強さが無かつたら、彼はかうした貧乏生活の惨めさと苦しさを描いて、あれ程精緻を極めることは出来なかつたらう。』と共に、或は其處にはかなり色濃い彼自身の生活の反映があつたのかも知れつた。一度は底の知れない感潮生活に浸つたことがあつたに相違ない西鶴は、さうした生活の結末、或は「萬懸帳埒あかず屋の世之介」といふ言葉などに示されたやうな、窮迫の時代を通過して、かも知れなかつた。と同時に、或は比較的後年の俳諧師としての彼の生活も、貧乏から餘り縁遠くのでは無かつたのかも知れない。「具足甲も質種」の一節に、「我等も質置く事五十度に餘れり。一度請けたる事なし」などと彼は不用意な言葉を漏らしてしまつてゐるから。

が、それは兎に角、(貧乏人の生活を諦視した西鶴は、彼等に對して、致富成功の心得などを色説きながら、一面彼等が、當時の世相では、何うにもうだつの上らぬ人種であることを知つてゐる。『心を疊み込む古筆屏風』(永代藏)の主人公は、僅か五十兩の端金を資本と頼まねばならぬに、悲しい絶望を感じてゐる。『才覺を笠に着る大黒』の人物は、僅か百兩の細元手で酒店を出ばかりに、大資本家との競争に敗れて、一酒元手を水になして四斗樽の薦を身に被る身の上となす

さういふ世の中であつた。さういふ世の中であることを正しく観てゐた西鶴は、「兎角銀が銀をまうくする世の中」といふ言葉を一再ならず繰返した。さういふ世の中では、貧者の十匁は、富者の五匁より、よつほど無力なものであることを、彼は屢々云つてゐた。言ひかへれば、貧者は貧なるが故に、分限長者より餘計な金をつかはねばならず、時に分限長者より高價なものに衣食しなければならぬことを、彼は屢々書いてゐるのだ。「此米は一斗を二月の晦日切に約束して、我等が身を手形に書き入れて、九十五匁の算用にして借りましたよ。世間は四十目の米食ふ時、九十五匁の米を食ふ事、そのたの鈍なる故」(胸算用「平太郎殿」と云ひ)或は「わづか五百目の銀借らうとして、目に見えぬ費はのけて置いて、八十四匁六分五厘が物をつかひける。まことに貧者の手づまる事、かゝる物入りのありけるゆゑぞがし。」(町人鑑「品玉とる種の松茸」と云ふ、何れさうした世相に於ける、不思議な現象を剔出してゐるものではなかつたか。かうした現象の支配する世の中であるが故に、富者は年を経て愈々豊かに、貧者は働くにつれて益々貧寒になつて行く。西鶴の口調をかりて云へば、世は自ら貧福の別ちありて人の儘にはならぬものなのである。盡未來際變らぬ貧富の階級である。其處に西鶴の驚異があつた。「過ぎにし酉の歳諸道具迄も煙となし、皆々丸裸になりしが、程なく以前の如く酒屋は杉をしるしの門はかはらず、本町の呉服棚それ〴〵の錦を飾り、傳馬町の絹屋綿屋も同じ棚つき……昔見し人其家職かはらず、この前日用取は其姿、山伏はその顔、腫物切疵の膏藥賣は今も同じ聲、ひとりも身過をかへたるは見えず、貧者貧にて分限は分限になりける。これ程不思議なる事なし」(永代藏)仕



合の種を蒔錢」。

かうした疑惑と驚異とに逢著する所まで、西鶴の世相諷刺は深められて行つたのであつた。彼の彼の疑惑や驚異から出發して、さうした疑惑や驚異を齎らす根本の理由である社會の經濟組批判の目をむけようなどとは無論しなかつた。第一あれ程金の力の強大さを云ひながら、彼は富至貧者の何れかに、彼等が富者或は貧者であるからといふだけで、特殊な同情なり同感なりを容うとはしなかつた。彼が描いた程、あれ程黃白絶對の世の中でも、それでも富者が必ずしも絶對福を滿喫して、醉生夢死してゐるとばかりも限らなかつた。表口三十間裏行六十五間を家藏にやづけ、幾十人の雇男を願で使ふ大問屋の主人公夫妻にも、年中袴を着て少しも腰をのさず、朝かまで居間を離れず人の機嫌をとらねばならぬといふやうな、辛氣臭さがあつた(同上「舟人馬かまの庭」)。かと思へば、所謂年中風車の貧乏人にも、此世が必ずしも苦惱ばかりの世界とは限らなかつた。「扱も輕き身體外より見ての苦み、内證の樂介各別ぞかし」(町人鑑「鹽うりの樂助」)。其處にの富者があつた。彼は所詮は個に即した作者であつた。「苦と云ひ樂と云ふものは、結局個人々心境にあるもので、富と云ひ貧といふやうな階級にあるものではないと考へてゐたのだ。だから、決して富者を富者なるが故に憎みはしなかつた。寧ろ却て或る好意と尊敬とを感じてゐたかと思ふ。」「其家の親方にそなはりし人は、其身ばかりの世渡りにあらず、一人の心ざしを以て家内の外か身をすぐるをよろこび、是にまじたる善根なし」(世の人心「千貫目の時心得た」)。彼はそんな

を云つてゐた。と同時に、其日暮しのしがたい人々の生活をも、たゞ慘めだとはかり觀じてゐたのでなかつた。其處に前掲の「内證の樂しみもあれば、又さうした人々の生活の色々が、此の人生を極めて便利な、住みよいものにしてゐるものであることなども、彼は云つてゐる(同上「何にても智慧の振賣」)。彼は恐らく、それでいふのだ、それが人生の相なのだといふ風に考へてゐるのだと思ふ。たゞ、年の瀬を越し兼ねる貧乏人の多くが、掛け乞ひ共を追ひ拂ふ手段として、種々様々な胡麻化しを演じてゐるのを、微笑を以て眺めてゐた彼が、比較的富んだ者が分散せねばならぬ場合に逢著して、色々の猾手段を廻らす事に對しては、かなり激しい憎惡の眼をむけてゐる所に、貧者と富者のそれぞれに對して、多少異つた心の動きを示してゐるやうにも見えるけれども、それは要するに、前者には切迫詰つた止むを得なさと、止むを得なさに驅り立てられるもの、苦笑すべき愛嬌とを認めた西鶴が、後者には身の取り置きを思案して置くといふ餘裕の絡んでゐることを、恕し難く思つたのに過ぎないのだと思ふ。貧富一如——彼は結局それを考へる男だつたのだ。

四

世の中といふものは容易に變つて行かぬもの、無産者は永久にうだつの上らぬものと觀じた西鶴は、それを屢々口にしながら、然もそれが人生の全面容だとは考へなかつた。却て、變らぬと見れば寧ろ不思議な程に變らぬものである人生が、變ると見ればまた不思議な程に變轉の目まぐるしいもので



ることに注目した。それは決して彼が矛盾した想念に陥つたのではなかつた。人生といふもいふものなのだ。さうした矛盾した二側面を孕みながら、靜かに流れ去り流れ来る所に、人生微妙さ複雑さがあり、従つてさうした微妙さ複雑さを如實に把握し得た所に、人生觀照家として鶴の、如何なる想念にも囚はれない自由さと深さとがあつたのだ。昔榮えた伏見の城下が、僅か四十年の間に果敢なくさびれて来たことなどを、鮮かに描き出してゐた所などにも、兎に角さうした人生の變轉を靜かに眺めてゐる西鶴であつたことが、端的に反映されてゐる譯だと思ふが、さういふ彼はまたさうした世相に住する人々の貧富が、崩されたり積まれたりして色々に變轉して行く形を眺めて、その由つて来る所を究めようとしたのだつた。致富の要訣を説き町人道を高唱しようとする町人物の意圖の一つは、云ふ迄もなく其處から生れた。

貧富の變轉を諦視した西鶴が、まづ富貴を壞滅させる根本の動因と考へたのは、奢侈と逸樂と遊藝への惑溺などであつたらしい。富貴から貧賤へと人を驅り立てる力を、彼自ら個條書にして示した長者丸の毒斷ち(煎じやう常とはかはる問樂)の中には、流石に「諸事の抜請判」とか、「金山の中間入」とか、さては「心當なしの京のぼり」とかいふ種類の、經濟生活への特殊な理解や奇警な觀察を思はせるものもあつたけれども、其處に最も力をこめて戒められてゐたものは、矢張り奢侈や逸樂のそれであつた。況して幾十の●に於て、具體的に語られた富から貧への顛落の理由は、殆ど大部分がそれであつた。あれ程豪華な生活に誇つた「國に移して風呂釜の大臣」も、その豪華な生活故に産

傾けた。鐵壁の拜金思想に凝り固つて、財産に獅噛みついてゐた「二代目に破る扇の風」の主人公も、ゆくりなく覺えた放蕩の味故に没落した。あらゆる遊藝歌俳諧に通じた男は、彼が藝者であるが故に、「商賣すること無用」とされて、親仁から若隱居を申し渡された(町人鑑「津の國のかくれ里」)。さうしてさうした多藝の男は、早くから隱居でもしなければ、遂には袖乞非人に迄成り下るより他はなかつたのであつた(才覺を笠に着る大黒)。

長者丸の毒斷ちに、かうした理由以外の色々を數へてゐる西鶴は、その多くの作品に於ても、かうしたものの以外に零落の動機を書かないのでは素よりなかつた。もとく富んでゐたとは云へない迄も、兎に角従來の状態より一層慘めな貧困に陥つて行くものの中には、前にも述べた通り、大資本に壓倒されて行く小資本家もあつた。借錢の利に追はれて倒れる者もあつた。其他、仕つけた商賣をすて、却て失敗して行く者もあつた(品玉とる種の松茸)。不時の災難や物入りによつて打ちのめされて了ふものもあつた(町人鑑「所は近江蚊帳女才覺」)。家を新に普請したことが永年の華客を失ふ動機となり、そのため終に没落して行く者もあつた(銀のなる木は門口の格)。觀察として面白く、従つて觀照家としての西鶴の觀察の微妙さを思はせるものは、さうしたものの中に多く見出されると思ふけれども、彼自身としては、決してそれらの話に現れた動機などを重視してはゐなかつた。彼はたゞ只管に奢侈と逸樂との怖るべきものであることを強調したのだ。さうしてさうしたものと同一種類の現れである所の結婚の費用、時代的な贅澤さ、乃至其處から派生して来る目に見えぬ物入りなどを、繰り



返してゐるのだ。其處に云ふ迄もなく時代の反映があつた。世を擧げて好景氣の調子に乗つてゐた元祿時代では、實際さうした榮耀と奢侈と逸樂とが、貧富の變轉を支配する、最も強大な力であつたらう。西鶴はさうした世相の眞實を徹底的に把握したのだ。彼の把握が徹底的であればあるだけ、彼が其の點に拘泥こたはつたのも當然だと思ふ。

が、さういふ點では世相の眞實を見究めてゐた西鶴が、當時の世相を被りてゐた投機熱の流行といふ現象にさしたる拘泥を示してゐない所には、前にも云つた通り、商賣人で無かつた彼の、當時の經濟生活への理解の不十分さが、暴露されてゐるのだと思ふ。町人に惠まれた經濟界の好調につれて、賣つた買つたの風潮が、元祿世相のあらゆる隅々に、漲みなぎり溢れてゐたといふ。西鶴の描いた所を見て、さうした世相であつたことは確かに肯ける。にも係らず、彼は其處に力點を打つことをしなかつたのだ。致富防貧の何れの心得にも、彼は賣れとも買へとも云はなかつた。投機による財界の失脚者などといふものは殆ど書かなかつた。幾ら好景氣であつたと云つても、従つて買ひさへすれば儲かる世の中であつたとは云つても、其道での失敗者がなかつたなどとは無論云へまい。西鶴はそれを完全に見逃してゐるのだ。彼はその方面に關しては、僅かに金のある者が買へば儲かるものといふ程度の理解しか有つてゐなかつたらしいのだ。町人の經濟生活を眺め、貧富の變轉を叙した町人物として、作者のさうした方面への理解が不十分であつたらしいことを、止むを得ないことゝは云ひながら、稍々物足りないことに思ふ。

と云つて、西鶴がさういふ方面の現れを、見てゐないのでは素よりなかつた。投機による失敗者をこそ書かなかつたものゝ、彼は「津の國のかくれ里」以下それによる成功者の話は屢々繰り返した。のみならず、世に瀾漫する射倖心の猛烈さを利用して致富に成功する「世は欲の入札に仕合」(永代藏)の如き、さうした世相の機微を鋭く穿つた作品をさへ書いてゐる。云はゞ西鶴は、投機全盛の世の中であることを、正しく觀てゐながら、商賣人でないために、それに特殊な理解をもつことが出来なかつたゞけなのだと思ふ。

が、それに對する把握こそ不確實であつたものゝ、兎に角投機による致富の實例の幾つかを書いた西鶴は、其處に富の蓄積されて行く動因の一つを擧げた譯だ、が、彼はそれを當然重視しはしなかつた。とすれば、彼が重視した致富の動因は、果して何んなものであつたらうか。彼はまづ第一に質素節儉の消極主義を擧げてゐる。零落の根本には殆ど常に奢侈と逸樂とが絡かんでゐると觀じてゐた彼が、さうした消極主義を致富の第一要諦と考へたのは素より當然であらう。と同時に、永代藏巻頭の一章に、「世の中に借銀の利息程おそろしきものはなし」と云つたのをはじめとして、到る處で利息の怖ろしさを繰り返した西鶴は、又當然の結論として、利息の力の貧富の變轉に大なる關與をもつものであることを云ひ、引いては借家の家賃などといふものをも、致富の要因の一つとして數へてゐる。第三には、彼は以上のやうな人間の積極的な働きの加はらない致富道とは全然反對の、勤勉努力といふ積極主義が、また致富の重大な要因をなしてゐることを云つてゐる。彼が自ら致富の要訣を抽象羅列し



た長者丸の方組には、「△朝起五兩△家職二十兩△夜詰八兩△始末十兩△達者七兩、此五十兩を細にして胸算用秤目の違ひなきやうに手合念を入れ、これを朝夕呑み込むからは、長者にならざるといふ事なし」と書かれてゐる。其處に第一の消極主義と此の第三の積極主義とが、打つて一丸となされてゐることが觀じられよう。長者たるべきものゝ日常服用すべき持薬に、かうした方組を作つてゐる所に、彼がそれらを特に重視した氣持が覗はれる。と共に西鶴は、さうした温健至極な平凡常道だけが、富を致し得るものゝすべてでないことも無論知つてゐたのだ。「糊守手代それそれ得意の御屋敷へ出入ともかせぎに勵み合ひ、商賣に油斷なく、辯舌手だれ智恵才覺、算用たけてわる銀をつかまず、利徳に生牛の目をもくじり、虎の御門の夜をこめ千里にゆくも奉公、朝には星をかつぎ秤竿に心玉をなして、朝暮御機嫌とれども、以前とはちがひ、今繁昌の武藏野なれども、隅から隅まで手入して更に擱取もなかりき」(永代藏「昔は掛算今は當座銀」)。かうした金儲の仕難い世となつては、寧ろさうした平凡常道は、致富とは屢々縁遠いものでさへあることを、彼は時々云つてゐた。必然的に彼は、人の氣つかぬ所に工夫を見出す才覺や、時には危道をさへ渡る放れ業などを尙んだ。云はゞ、西鶴が考へた致富の第四の動因は、所謂才覺や機略の放れ業であつたのである。然もさうした才覺や機略は、もと／＼危道であり權道であるが故に、無論時には道義と結びついて現れることもある代りに、屢々不義や不徳とも結びついてゐた。此點から云へば、西鶴は不義や不徳も亦富を致すべき力の一つであることを認めてゐたのだと思ふ。が、意外にもモラリストであつた西鶴は、さうした不義や不徳による致富

を、無論是認してはゐなかつた。茶殻を茶にまぜて賣ることによつて富をなした「茶の十徳も一度に皆」(永代藏)の主人公は、廻る因果で狂死した。人の忘れて行つた金を誤魔化した「品玉とる種の松茸」の一人物は、手のない徳利子を設けて生き恥をさらしたのみか、身代さへもすり減らした。云はば不徳によつて集つて來た金は又不徳の報によつて散つて行つて了ふのである。かうした因果應報を信じた西鶴は、又當然不義とは反對の徳行が、幸運を齎らすべきものであることを云つてゐた。猿を助けて長者となる男(保津川の流れ山崎の長者)、貧に憫む女を救うて分限になる話(町人鑑「五日歸りにおふくろの異見」)などいふやうなものを、西鶴は屢々書いてゐる。其處に彼の觀じた第六の富をなすべき力があつた譯だ。然も西鶴は、さうした因果觀をのみ適用するには、餘りに豫定の出來ない人生であることを、十分に知つてゐた。彼は當然さうした因果の外にはみ出した、人間には何の理由も原因もない全然の偶然が、幸運と富とを齎らすものであることを云はずにはゐなかつた。運不運——西鶴は矢つ張りそれを人間の貧富を支配する最後の力と觀じてゐたのだと思ふ。

ところで、世の貧富を眺めてそれを變轉させる力を以上のやうなものと考へてゐた西鶴は、前にも云つたやうに、その觀察から出發して、所謂致富防貧の心得を説いたのであつたけれども、さうして掲げられた心得は、既に上來の考察の中に明瞭にされてゐると思ふから、此處には徒らにそれを繰り返す煩を避けることにする。



致富の心得を説いた西鶴は、一面かなり所謂智恵才覺を尙んだ。尤も一口に智恵才覺とは云つても、その内容は無論いろ／＼だつた。便利第一を目的として布の切り賣りを始めるとか（昔は掛算今は當座銀）、刺身の切り賣りを試みる（世渡りには淀鯉のはたらき）とかいふ種類の才氣もあつた。大工の落して行く木切れを拾ひ集めるといふやうな綿密な注意もあつた（煎じやう常とはかはる問葉）。「柳は緑花は紅」といふ程度の僅かな暗示を正確に判定する慧敏さもあつた（祈るしるしの神の折敷）。迷信的な人間の氣持を利用するさかしさもあつた（初午は乗て來る仕合）。思ひきつて身分不相應な藥禮を拂つて豊かだと人に思ひ込ませる度胸乃至機略もあつた（買置は世の心のやすい時）。た種類の何れであるにもせよ、其處には常に自らの運命を打開して行かうとするもの、込みと力が感じられた。西鶴はそれを尙んだのだ。彼はそれを尙ぶの餘りに、「人の分限になる事、仕合せといふは言葉、實は面々の智恵才覺を以て稼ぎ出し、其家榮ゆる事ぞかし。これ福の神の戎殿のまゝにもならぬなり」（銀一匁の講中）と迄云ひもすれば、時には才覺に走り過ぎて不徳に陥るものさへ、是認するやうな態度を迄示した。其處に積極果敢だつた元祿時代精神の反映が感じられる。力に解放され力に生きた元祿町人の氣組が感じられる。

が然し西鶴にとつて、それが果して衷心からの本音であつたか何うか、頗る疑はしい。彼は前にも

云つたやうに、不徳と絡み合つた才覺を心からは是認する男ではなかつた。のみならず、「才覺の軸すだれ」（胸算用）といふ作などでは、さうした才覺に走るものを戒しめて、却て平凡常道を行くものゝ手堅きを讃稱してゐた。すべての點で保守的な、穩健な主張に傾いてゐた晩年の西鶴の本音は、恐らく其處らにあつたものではなかつたらうか。彼が時にさうした本音と反對の言説や態度を示したのは、矢つ張り例の男色大鑑に、強ひて男色を女色以上に謳歌しようとしたあの態度などと同じやうな作家としてのポーズに陥つたのではなかつたか。作家としての態度が變に偏つてゐた永代藏などに、さうしたものゝ現れが最も濃厚で、彼の氣持がずつと冷靜な落着きと平衡とを得てゐる町人鑑などでは、それがずつと稀薄になつてゐる所などからも、さうした事は考へられる。第一彼は前にも云つた通り、此の人生といふものが、決して人間の豫測通りに動いて行くものでないことを知つてゐた。人間以上の何か大きなものゝ支配の前には、人間が徹底的に無力なものであることを知つてゐた。人間の力どころではない、何うかすればその人間を支配する力そのものであるかとも思はれる因果律でさへ、律しきれない人生であることを知つてゐた。だから、彼は云つてゐる。「分限は才覺に仕合せ手つだはではなりがたし。随分かしこき人の貧なるに、愚なる人の富貴、この有無の二つは、三面の大黒殿のままにもならず、鞍馬の多聞天のをしへに任せ、百足のごとくはたらきて、その上に身袋のならぬ是非もなし」（永代藏「高野山借錢塚の施主」と。かういふ彼が、兎もすれば人間の力を過信しようとする智恵才覺の綱渡りや、度胸機略の權道を、それ程までに價值づけようとは、何うしても思はれない。少



くとも町人物時代の西鶴は、人間の力などを、そんなに力強く、そんなに嘆稱すべきものと観する世界とは、餘程異つた、所謂天の思召しの前に、謙虚に跪かうとする者の世界に入つてゐたのだ。天の與へる運命を、靜かな悦びを以て享受しようとする氣持に入り得てゐたのだ。

尤もさうした世界に入り得てゐたとは云つても、彼は決して所謂優遊無爲の得脱生活をのみ人に強ひようとしたのでは無かつた。又強ひ得るものだとも思つてゐなかつた。「一切の人間運は天にあり、神鳴落ちてつかまれば、死は前生よりの定まりごとゝいへり。されども用心して身をのがるゝことにはのがれ、長命の後病死をするはこれ人の常なり」(世の人心「官女のうつり氣」)。彼はこんなことを云つてゐる。所詮は天の定めた運命の前に無力な人間である。けれども人間は決して天の與ふる運命の前に、恭順に跪いてゐるものではない。恭順でなくても何でも、矢つ張り天の支配に動かされてゐるのでありながら、出来るだけ自分で生きて行かうと努力する。それが人間の相だ。人間の背負はされた運命だ、といふのだ。其處に西鶴の人間の微妙な色合があると共に、人間の自力主義への或る程度迄の肯定も生れたのだ。「人間が人間として生きて行くために必要な所謂教訓も、無論其處から派生して來たのだ。彼の自力主義肯定や教訓は此の意味で決して空しい身振りだけでは無かつたのだ。彼の心の底からの叫びではない迄も、兎に角眞實の聲だつたのだ。「されば家業の事、武士も大名はそれぞれ國につかはりて願ひなし、末々の侍親の位牌知行を取り、樂々と其の通りに世を送る事本意にあらず、自分に奉公を勤め、官祿に進めるこそ出世なれ。町人も親に儲けたためさせ、讓狀にて家督請

取り、仕にせおかれし商賣、又は棚賃貸銀の利づもりして、あたら世をうかうかとおくる」は「天命知らず」といふやうな考へ方(「祈るしるしの神の折敷」)は、つまり昔も今も餘り變らぬ町人道の根本であり、従つて當時の世相に遍漫する思潮として、西鶴も矢張りその幾分を分け有つてゐたのであつたらう。たゞさういふ氣持から發して所謂智恵才覺の自力主義を然く讚稱した點では、彼の、より根本的な觀念から考へて、やゝ其の聲を大きく張り過ぎたのではないかと思ふのである。と同時に、彼の町人物に盛り込まれた教訓は、武家物に於けるそれなどのやうに、必ずしも所謂道を目標として説かれたものゝみではなく、たゞ處世の方針を説き致富の要訣を説くといふだけの、教訓としても第二義的な、方便的なものが少くなかつたゝめに、時に健全な道徳とは一致し得ないものも見出された。殊に初期のものには所謂勝てば官軍の方便主義が濃厚だつたと思ふ。彼の氣持が落着いて、意圖に即して偏るといふ傾向が少くなるにつれて、町人物に於ける教訓も、漸次にさうした色調から遠ざかつて、武家物に於けるもの同様、穩健妥當なものになつて行つてゐるけれども。

が、何れにしても、町人物時代の西鶴自身は、もうさうした自力主義や教訓の世界に住んでゐる人間では無かつた。第一早く既に貧富一如の世界に入つてゐた彼は、あれ程迄に金を書き、貧富を寫し、致富の心得を説きながらも、實際には金などの支配する世界に生きてゐる人間ではなかつたのだ。人間長くみれば朝を知らず、短かくおもへば夕におどろく。されば天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世は夢幻といふ、時の間の煙死すれば何ぞ、金銀瓦石にはおとれり、黄泉の用には立ち難し



(初午は来て来る仕合)などといふ言葉は、黄白の否定を含んではゐても、まださうした西鶴の住んでゐた世界を、如實に傳へてゐるものとは云はれないかも知れないけれども、例へば、「生あれば食あり、世に住むからは何事も案じたるが損なり」(永代藏「伊勢海老の高買」)といふやうな言葉や、「鹽賣りの樂介」に描かれた主人公の、貧しいながらに拘泥のない生活を讚美してゐる氣持などになると、さうした世界の深さを、端的に傳へ得てゐると思ふ。毀譽もなければ褒貶もなく、富もなければ貧もない無色怡樂の世界——西鶴はさうした世界に安住しながら、靜かに世の紅紫綠黃を眺めてゐたのだ。千轉百折する世相の變移を靜かに眺め暮してゐたのだ。さういふ彼が、人間は結局さうしたものだと思ひながら、それを全然肯定してゐながら、然も彼等の餘りにも二義的なことにのみ没頭し過ぎて、第一義の世界の靜かな法悦から遠ざかつてゐるのを、ふと淋しく感じた時などに、吐息まじりに漏らされた言葉などが、例へば、「世に金銀の餘慶ある程、萬につけて目出たき事外になけれども、それは二十五の若盛りより油斷なく、三十五の男盛りに稼ぎ、五十の分別盛りに家を納め、惣領に萬事を渡し、六十の前年より樂隱居して、寺道場へまゐり下向して、世間向のよき時分なるに、佛とも法とも辨へず、欲の世の中に住めり。死ねば萬貫持つても、帷子一つより皆浮世に残るぞかし」(銀一奴の講中)といふやうな形となつて現れたのではないか。世俗の肯定と、それを強く突き放したやうな氣持と、それとは反對のひどくそれに關心を注ぎかけて行つてゐる態度とが、其處には不思議に絡みあつてゐる。

兎まれ町人物作者としての西鶴は、世相以上の深い世界に入つてゐた。さうしてその世界から、靜かに世相の變轉と人間の狂奔とを眺めてゐたのだ。自ら彼の町人物には、描かれた世相の奥に、彼の住んでゐる深い世界が横つてゐた。長い／＼の間に變轉して行く人間の運命が書かれてゐた。其處に町人物の作品としての深さと微妙な味ひとがあつた。田山花袋氏によれば、詩がない金は、作家にとつて最も書き難いものゝ一つであるといふ。其の書き難い金を描いて精細微妙を極めてゐる點から云つても、又この味ひの深さ濃やかさから云つても、町人物は西鶴の浮世草子中でも、特に優れた價値をもつものと云はれなければならない。西鶴と云へば直ちに好色本が連想され、従つて兎もすれば好色本のみを以て全西鶴を斷じようとした從來の偏見が訂正されて、少くともそれと同程度以上に、町人物が評價されはじめて來てゐるのも、蓋し當然であらうと思ふ。西鶴全創作の頂點である置土産や、まだ彼の作か何うか確證されるに至らない好色盛衰記などを除けば、胸算用や世の人心以上に深いものをもつてゐる作品は、彼の多くの浮世草子中にも、殆ど見出されないのだから。殊に胸算用といふ作品は面白かつた。年の瀬を送迎する人々の心に起伏する複雑な氣持、悲喜とり／＼の情感、金に採られて踊る人々の色々な姿などが、複雑な陰翳を以て浮き彫りにされてゐる。町人物中での傑作といふ藤岡作太郎氏以來の定評に負かないものだと思ふ。が、他の三つの作品にしたところで、素より胸算用と何れ程の徑庭があるといふのでもなかつた。たゞ世の人心や町人鑑は、冒頭に述べた通りの未定稿的な性質や、團水の補筆の跡らしいものゝために、部分的に稍々透徹した趣を缺いた點があ



り、永代藏は、町人物最初の作品として、度々云つて来た通り、作者が主題に即き過ぎて、記述が稍々抽象的の一面的に流れてゐる上に、それとは異つた意味で抽象的な談理の多いのが、稍々煩うるさい感じを與へるために、何れも胸算用には一籌を輸するといふのに過ぎなかつたのである。兎に角、嘆稱すべき町人物であつたと思ふ。

## 西鶴好色本研究

山  
口  
剛



この小稿はまづ『好色一代男』の考察を以てはじめる。  
 どんな考があつてのことか今からは知るよしもないが、西鶴の作には、匿名のものが多かつた。『一代男』にしても、西吟の跋文に、鶴翁の轉合書といふ斷りがなかつたら、一應は疑はれて、しかる後にそれと決定されるのであつたらう。或は西鶴署名のないために、その眞作も疑問視せられてゐるものもあらう。またそれとは違つて、西鶴の名が立派に記されてゐながら、時人また後人のさかしらに出づるものも少くなからう。西鶴の署名の存在は、彼の作であるか、ないかを決定する唯一の條件でなかつた。従つて世に西鶴本、西鶴物と稱する中には、疑問の書が多い。わけて好色本に屬するものに多かつた。

西鶴の好色本に就いて、幾分の立言をなす以上は、何を措いても、これ等の疑問を質すことを最先にすべきである。

しかし、書史學上の研究も十分でなく、西鶴語格の研究の結果も、何等聞くことが出来ない今日に於て、それを先にするのは、武斷みづからを快しとせぬ限り、却つて疑惑を生ませて、はてしなき迷路にわけ入らせることになる。故にさし當つては、世の西鶴を以てゆるし、みづからさう信じて疑はないものゝみを對象とする。その他のものは、機あつて觸るゝあれば、すなはち觸れ、觸るゝに及ぶ

なきは、後を追はないことにする。畢竟は、どんなに範圍を狭めても、彼が本質に關する見を、一二にせずには済むと思ふからである。

どんなに狭く限つたにせよ、西鶴の好色本が齎らせる問題は決して少きを苦しまなかつた。それどころか『好色一代男』たゞ一つを對象にしても、なほ言説の煩にたへざるものがあらう。

いろ／＼の理由は西鶴の好色本を、西鶴が有する他の諸傾向の作物と切り離して考へることを困難ならしめる。西鶴好色本考察の窮極は、その困難のあるところを鮮明するにあるか、とも思はれる。

西鶴の好色本は、所詮性慾といふことに歸着する。しかし、西鶴がその性慾をどう扱つたかといふ問題が、そこから新に起つて来る。そも／＼が好色といふ言葉は、直に性慾を意味してゐない。西鶴も好色本を草する場合に、性慾にのみ専らでなかつた。性慾を高調すると共に、それをおぼろにし、それを稀薄にする要素をも用ゐた。それを肯定すると共に、否定するが如き態度をもしば／＼くりかへした。西鶴が何故にそれ等の要素を併せ有し、それ等の態度を併せ用ゐたか。またそれ等の錯雜交錯から、どんな現象が起るか、西鶴の好色本の考察は、何を措いてもこれ等を念としなければならなかつた。

特に切り離された好色本に對する考察の方法が、町人物に對する態度と區別されねばならぬ理由は、こゝにある。いふまでもない、町人物に於ける西鶴は金を描いて純一なることを期してゐたのである。何故に西鶴は色に對しては不純に、金に對しては純一であつたか。彼の性慾觀がさうさせたのであ



らうか、或は好色本著作の日が俳諧から轉じて後、なほ多くの時を經過しなかつたためであらうか。こゝにもまた一問題が伏在してゐる。

以上の諸問題は、要約して、西吟がいふところの「轉合」といひ代へることが、むしろ便利であるかとも思はれる。

西吟の『好色一代男』の跋の一節には斯うある

或時鶴翁の許に行つて、秋の夜の樂寐、月にはきかしても餘所には洩ぬむかしの文枕と、かいやり捨てられし中に、轉合書のあるを取集て、荒猿にうつして、稻白を挽薬口鼻に讀てきかせ侍るに、煙謗田より闕あがり大笑止す、歛をかたげて手放つそかし

『一代男』を考察の對象とする時は、まづこの轉合を分析して、其中にくさんくの要素の存在することを指摘し、また諸要素の結合の状態を吟味すべきであらう。また『二代男』『一代女』『五人女』『男色大鑑』などを對象としては、『一代男』の轉合がどう推移し、變化したかを穿鑿すべきであらう。然る後に、これを綜合して、西鶴の好色本の本質を治定すべきであらう。

この小稿が『好色一代男』の轉合觀を以てはじまる所以である。

しかし、限りある範圍に於て、果して豫期するところを成し得るか、どうかを知らない。或は説いて轉合の一二を分析するにとゞまるかを、そのはじめから危ふんでゐる。

『好色一代男』の考察はまづ卷一、主人公世之介の七歳の章「けた所が戀のはじまり」の分析を以てはじめる。つまるところは、あまりに多い『一代男』が含む諸問題を、ある程度まで、作者みづからをして限定させようためである。

櫻もちるに歎き、月はかぎりありて、入佐山、爰に但馬の國、かねほる里の邊に、浮世の事を外になして、色道ふたつに、寐ても覺めても、夢介と、かえ名よばれて、名古や三左、加賀の入など、七つ紋のひしにくみして、身は酒にひたし、一條通り、夜更て戻り橋、或時は若衆出立、姿をかえて、墨染の長袖、又は、たて髪かつら、化物が通るとは、誠に是ぞかし、それも彦七が貞して、願はくば咀ころされてもと、通へば、なを見捨難くて、其比名高き中にも、かつらぎ、かほる、三夕、思ひくくに身請して、嵯峨に引込或は、東山の片陰、又は藤の森、ひそかにすみなして、契りかさなりて、此うちの腹より、むまれて世之介ト名によぶ、あらはに書しるす迄もなし、しる人はしるぞかし、

『一代男』は、七歳にして戀を知り、六十歳にしてなほ女護島わたりする世之介五十四年の好色の生涯を叙する。それにしてはふさはしからぬ無常哀愁の第一句である。『一代男』は作者また新文體に意があつたといはれてゐる。それがどうして、かぎりありて入佐山などの常套句を用ゐたのであらうか。



かた／＼解し難き起筆であつた。

入佐山は但馬の歌枕である。されば他奇なき「爰に但馬の國」である。但馬の國かねほる里の邊にとあるのは、生野附近といふことであらうか。生野の鑛山は、天文十一年二月から採掘されたといふ。石見佐摩の銀山の採掘方法が傳へられて以來、天和の頃にもひきつゞいて隆盛であつたとのことである。世之介の父がその住人であるとすれば、鑛山師を意味するのであらうか。それともたゞ銀山の縁を以て、富豪を示すのであらうか。

父のかへ名は夢介とよばれてゐる。その子の世之介の世は浮世である。卷一、十歳の章には、すでに「浮世の介」ともしるされてゐる。浮世は、その頃の用例としては、まさしく今いふところの現代また現實に當る。その名によつて、父と子に夢と現實との對をなさせる西鶴の肚裏のものが、何であるか、まづ知らねばならない。

7 世之介の母親のたれであるかは詳でない。たゞその比名高き太夫の中なるかつらぎ、かほる、三夕のどれかであつた。西鶴は「此うちの腹よりむまれて世之介ト名によぶ」とのみいつてゐる。西鶴は何故に、どれがそれと明にさしてはなかつたのであらうか。一筆の勞を吝む理由を知りたく思ふ。

西鶴はまた世之介に就いて、「あらはに書しるす迄もなし、しる人はしるぞかし」と言つてゐる。果して、彼の言の如くその人あつてこの事があつたのであらうか。その事は存しながら、その人はなかつたのであらうか。西鶴の思はせふりは、何故であらうか。

西鶴には、ともすれば讀者を欺いて呵々と笑ふ癖があつた。これ等の記事を読むに當つても、相應の戒心を要とする。

西鶴はしるしてゐる、その世之介は七歳になつた。夏の一夜、腰元に手燭ともさせて、しとに起きた。

お手水の、ぬれ縁ひしぎ竹の、あらけなきに、かな釘の、かしらも御こゝろもとなく、ひかりなを、見せまいらすれば、其火けして、近くへと、仰られける、御あしもと、大事がりて、かく奉るを、いかにして、闇がりなしてはと、御言葉をかへし申せば、うちうなつかせ給ひ、戀は闇と、いふ事をしらずやと、仰せられける程に、御まもりわきさし持たる女、息ふき懸て、御のぞみに、なしたてまつれば、左のふり袖を引たまひて、乳母はいぬかと、仰らるゝこそ、おかし、

西鶴の日に、しるされたやうな早熟の子があつたらうか。成程、西鶴も「是をたとへて、あまの浮橋のもと、まだ本の事も、さだまらずして、はや御こゝろさしは通ひ侍る」と腰元をして思はせてはゐるが、なほその腰元をして、「つゝまず奥様に申」させる。しかも「奥様に申て御よろこびのはじめ成べし」とある。世に或は變態早熟の子はあらう。しかし、それを喜ぶ母が世にあらうか。西鶴がこの作にいはんとするものが、何であるかと、いよく考へさせられる。

七歳の世之介は、頻りに戀に責められてゐる。姿繪も集める、比翼鳥の折すゑも作る、それを連理の造り枝に結びもする。西鶴は、こまやかに記しをはつて、七歳の章、「けした所が戀はじめ」を結ぶ。



結ぶに當つて、斯ういつてゐる。

五十四歳まで、たはふれし女三千七百四十二人、少人のもてあそび、七百二十五人手日記にしる、戯れた女、少人の數の多少は問題でない。西鶴は何故に、さうまで精細の數を傳へながら、世之介の六十歳を、五十四歳といふのであらうか。そこに何等かの作意が伏在するのであらうか。それとも一時の過失であらうか。もし過失であるとすれば、折から彼の心を奪つたものは何であつたらうか。

## 三

『一代男』が『源氏物語』の模倣であることは、最も明な事實である。

三十四歳の世之介は、勘當の身を泉州の佐野、迦葉寺、迦陀などに浦住ひしてゐた。その女共と舟遊びして、雷雨に遭ひ、一人浪に寄せられて漸く助かつた。間もなく父の訃報を得、そのまゝ家に迎へられて遺産を受ける。こゝに大々々盡となつたとある。すなはち『源氏物語』の「須磨」「明石」あたりの源氏君の行跡をうつし傳へたものであつた。

六十歳の世之介は女護島渡りする。「戀風にまかせ、伊豆の國より、日和見すまし、天和二年、神無月の末に行方しれず成にけり」これが『一代男』の結びの言葉である。すなはち、卷の名のみあつて、その文なき「雲隠」を下に構へての趣向であつた。

かゝる大綱を外にして、中ごろにも「夕顔」をうつした卷四「因果の關守」あたりが、顯著な事例

として指摘せられる。殊に目録の各條に世之介の年齢をしるしたのが、源氏の年立の模倣であることは、いふまでもなかつた。

かゝる事實を前にして、さきに疑問とした「五十四歳」を見直すと、西鶴の過失の偶然でないことが注意せられる。西鶴が世之介の一代記を書いて、事件を七歳から六十歳までの五十四年に配したのは、もとより五十四帖に擬してのことである。五十四帖意識は彼にあつては強かつた。六十歳の本卦かへりの意識よりも強かつた。その五十四帖の五十四が、ふと六十を過らせたのである。

『好色一代男』を書きはじめ時の西鶴の念頭には、かうまで『源氏物語』があつたとして、改めて「桐壺」を読み直すと、さきに提示しておいた疑問の幾つかも、どうやら片寄せられさうである。

さすがにものゝあはれの權化たる源氏の君の父にふさはしい桐壺の帝であつた。帝が源氏の君の母桐壺更衣に對する纏綿の情を、詳に書いてしるしたのが「桐壺」の卷である。この卷には、また幼き源氏の君の聰明に就いても細やかにしるしてある。西鶴は大體に於て、そのおもかげを取つた。しかもなほ移して精しいものがある。

源氏の君のふみはじめは七歳の時であつた。その聰明は漢學などはいふまでもなく、琴笛にも長じてゐた。「すべて言ひ續けば、事々しううたてぞなりぬべき人の御様なりける」と本文にしるされてゐる。西鶴の日の町人には要なき學藝である。わけて性慾を基調とする作家西鶴である。その聰明を直に翻して世之介の性的早熟とした。言ひ續けば事々しうと原作に避けたのを、具體的にとり戻す時に



「戀は闇」となつたのである。

それにしても世之介の七歳は、いかな早熟としてもあまりに甚しい。或は五十四の數を重んじてする西鶴が、六十歳から逆算した結果、かういふ無理が出来たのかとも、思はせられる。しかし、その數よりも本文に重きをおいた西鶴は、とくに源氏君の早熟を本文の中に見出してゐた。

御かたぐもかくれ給はず、今よりなまめかしう恥かしげにおはすれば、いとをかしううち解けぬあそびぐさに、誰もくおもひきこえ給へり。

御かたぐとは女御更衣をさしていふとのこと、さればお腰元衆といつてもよい。その腰元衆に相應心づかひさせる源氏君のなまめかしさ、恥かしさは、七歳の時から見られたのである。西鶴はその事柄をとり用ゐると共に、その言葉をもあだにはしなかつた。こゝはさきに引用しなかつたが、斯うかいてある。

身はへうぶきやう、袖に焼かけ、いたづらなる、よせい、おとなも、はづかしく、女のこゝろをうごかゝさせ——

また西鶴はその次をうけて斯うも書いてゐる。

同じ友とちと、まじはる事も烏賊のぼせし、空をも見ず、雲に懸はしとはむかし天へも、流星人ありや、一年に、一夜のほし雨ふりてあはぬ時の、こゝろはと、遠き所までを悲しみ……

幼き源氏が星合の空眺めて、かういふ詠歎を漏らしたことは、つひに本文には見えない。しかも本文

には十二歳の源氏が、心ひそかに藤壺の君を慕ふ旨が語られてある。それが「桐壺」の結びをなしてゐる。

もとの木立、山のたゞずまひ、おもしろき所なるを、池のこゝろ廣くなして、めでたく造りのしる、かゝる所に、思ふやうならむ人をすゑて、住まばやとのみ、歎かしう思しわたる。

西鶴は源氏君の悩みを、後の事件から切り離して、たゞ戀を戀ふる心持だけを、七歳の世之介に移さうとする。それには紙鳶遊びが必要である、紙鳶の空から星合の空が必要となつたのである。西鶴が本文にあと附ける見えがくれの態度は大方かうであつた。

かう見て来れば、少くとも七歳の世之介は源氏君であつた。「むまれて世之介と名によぶ、あらはに書しるす迄もなし、しる人はしるぞかし」とあるのは、本文の「世の人光君と聞ゆ」とある筆意を模しながら、直に源氏君を暗示するのであらうか。しかし、世之介の生涯は必ずしも源氏君をモデルとしてのみ書かれてゐなかつた。ある歳の世之介には、その頃の人の誰もが、それと名ざすことの出来る實在の粹者を隠したのである。知る人ぞ知るぞかしとは、例の摸索その宜しきに從へとの筆法であらうか。虚と實との交錯、それが西吟のいふところの轉合の一つであらうか。

轉合といへば、「櫻もちるに歎き、月もかぎりありて入佐山」の起句にも、何かありさうに思はれる。この句は、「浮世の事を外にして」の浮世を、原義憂世に戻して、いひ續けるものとも思はれなかつた。こゝの浮世はどうしても生計活路の意と解せられる。それならば、やゝ離れて夢介の夢に應ず



るものであらうか。それ等の無常を一切の夢と観じて、享樂三昧する夢介をよび出すまでの洒落句であらうか。或はその無常感を、六十歳にしてなほ女護島わたりする歎きなく、限りを知らぬ心境に對應させたのであらうか。さきにふさはしからぬと見たのが僻目で、却て作者の肚はらを辨へなかつたのであらうか。つひに曖昧極まる一句であつた。

それとも、西鶴が但馬、入佐山の縁を以て、月をいひ、さて花をいひ出すまでの無造作の言葉であらうか。その無造作は、西鶴がなほ歌枕趣味に徘徊してゐることを明示する。ましては、月と入佐山を結ぶのは古歌の常であるが、例歌はまた『源氏物語』の中にも見出される。

里わかぬかげをば見れど行く月のいるさの山を誰かたづぬる

あづさ弓あづさいるさの山にまどふかなほのみし月のかげや見ゆると

この「末摘花」「花宴」の二首が必ずしも起句と因縁ありといふのでない。またそれまでを拉し來つて、西鶴と『源氏物語』を結ぶ要はなかつた。たゞ起句が、これ等の古典趣味を背景とすることを知ればよいのである。

この一句が深く考へられた結果であるか、無造作のためであるかは、こゝの問題でない。とにかく新時代の新文化生活を描きなす『一代男』を、ともすれば古典仕立にする西鶴の曖昧な態度に注目すればよかつた。新と舊との交錯、それが西鶴が無意識にも、また意識しつゝもなした要求であらうか。さうすれば、源氏君と、世之介の關係の如きは、わづかにこの要求の一端に過ぎない譯である。

この要求の必然と偶然が何であるかが問題である。

更にまた起句にいふが如き、無常感が古き心ながらに依然として、西鶴に存在してゐたらどうであらうか。或は西鶴が、さもそれを存在してゐるやうに、見せかけてゐたとしたら、どうであらう。これは『一代男』にも、その他の好色本にも極めて大きい問題を成立させる。

またこんな事も考へられる。しるされてゐるやうに、夢介の遊樂ふりは、まだ／＼粗野の極みであつた。天和の遊樂を標準としていへば、狂態といはうほどに、一昔以前は粹の何たるを解してゐなかつた。しかし、夢は宜しきに會へば現實となる。現實を名におふ世之介の粹は、畢竟この遊びを露拂にしなければならなかつた。西鶴は父夢介から筆を起して世之介の生涯を叙した。それはおのづから粹の夢が現實する徑路を説くことになる。説き來りて色道の妙諦に達するまで筆を續けたのである。

しば／＼繰りかへさるべき『一代男』と『源氏物語』の比較は、翻案のあとを辿ると共に、この色道と、かのものゝあはれのけぢめを、考へることを要求してゐる。

色道の夢が、現實化されるためには、いかなる条件が必要であるかは、『一代男』とよりは、西鶴の好色本全體に互る問題である。しかし、この「けした所が戀のはじまり」の一章に於ても、すでに、富の重要条件であることが明示せられてゐる。

ものゝあはれを眞に體得するために、位司を重要な条件としたのは、平安朝の物語であつた。當代に於ては富がその代りをなしてゐる。西鶴は、世之介のために富を興へようとする。故にまづ夢介を



富豪とした。彼を生野あたりに住はせたのは、何も鑛山成金にするためでなかつた。一富豪を拉し來ればよかつたのである。

斯くして『一代男』は、一面當代の理想小説として、富豪の生活を描くことでもあつた。その頃、果して夢介、世之介のやうな富豪があつたか。少くともその頃の人々に、それと推定される者があつたかは、後の問題である。それは町人物と聯關して考ふべきことに屬する。こゝには、例の西鶴の轉合を指示すれば足りる。

西鶴は六十歳の世之介が、女護島に渡るに當つて、このやうな事をしたと記してゐる。

ありつる寶を投捨、残りし金子、六千兩、東山の奥ふかく、掘埋めて、其の上に、宇治石を置いて、朝顔のつるをははせて、かの石に一首きり付て讀り、夕日影朝顔の咲、其下に六千兩の光殘して、と、欲のふかき、世の人にかたられけれ共、所はどこもしれ難し、

古くから行はれてゐる長者傳説の中に、大方長者がいろ／＼の珍寶を人知れず埋藏したことを傳へる。その寶の所在はつひにさだかでなくして、歌一首が人々の口の端に遺つてゐる。歌の言葉は土地土地によつて、違つてゐるが、寶の所在は朝日さし、夕日輝くあたりといふことになつてゐる。

朝日さし夕日かゞやく木のしたに黄千盃漆千盃

これが最も多く知られてゐる歌である。世之介の夕日影の歌は、その改作に過ぎなかつた。西鶴は口碑に傳へる長者までを世之介に結びつける。しかも、さも世にその人あるやうに語つてゐる。こゝに

も虚實錯綜する世之介の存在を見る。その錯雜を知る人をして、西吟がいふ婬謗と同じく大笑ひに笑はせるのが彼の計畫であつたらう。

富は粹に到達させる必須の條件であるが、更に重んずべきは、その人である。西鶴はまづ世之介の父を説き、母を説いた。父はともあれ、母を都島原の太夫にしたのは、世之介の極めて好ましい遺傳を有することを語るものであつた。西鶴は何故に母の名を傳へなかつたか。その意、けだし、太夫の階級たることを明にすればよかつた、そのかほる、三夕、かつらぎのどれであつてもよかつたのである。

明暦二年『まさりぐさ』にいふ、

判云先此名不都合也。惣じて太夫天神かこひの名とて、別々にわかちて有る也。然れども亡八文盲成によりて、わが持たる女郎の鼻眞といひ、又其家につきたる名なども有、よき名といふを幸に、女郎の高下をもわかつたず、むりやりに名つくる事也。たとへば

吉野 野風 三夕 葛城 萬重 浮船 初音 唐土 薫 八千代

などいふは、しかと太夫分の名にて、おぼろげの女郎に付べき名にあらず、さるをあやしきかこひ半夜などにも此名有り、痛むべし、悲しむべし。

『まさりぐさ』の作者の言は、いつも山だしの新造のやうな遊女が、野風と名乗ることの不埒沙汰に發する。西鶴が、特に葛城、薫、三夕といふのは、彼の太夫に於ける尙古趣味に基つく。見るところ



おのづから『まさりぐさ』と一致する。まして一篇の趣向から見る時代の関係は、天和より以前のおしもおされもしない太夫名を擧げなくてはならなかつた。三つの名の選びがある所以である。さすがに太夫出の母である。わが子が幼くて粹の權化たり、色道の達者たる資格を有することを聞いては、嬉しがらぬ筈はない。西鶴は「御よろこびのはじめ成べし」といつた。少くとも、この發端に於ては、西鶴は斯う解したのである。

されば西鶴は『一代男』の出立に於て、いろ／＼の意味に於ける理想小説を書かうとしたのである。しかもその理想が寫實と密接の關係を持することは勿論である。

## 四

「消したところが戀のはじまり」の章に見ゆる轉合の要素は多かつた。いづれを先といふことはないが、まづ『源氏物語』の翻案から考へてみる。

「桐壺」に端を發した翻案は、ものゝ順序として「帚木」に移らねばならなかつた。「はづかしながら文言葉」がそれである。

「帚木」の雨夜の品さだめの中には、頭中將が源氏君の御厨子から文どもひき出でて讀むくだりがある。その文はこれと書かれてゐない。たゞ源氏君がとかく紛らはしつゝとり隠し給ひつとのみある。西鶴はその文の一つを極めて具體的に現はさうとした。世之介の從姉にあてた戀文がそれである。

西鶴は、その文を候文體と口語體とをとり交せて、八歳の子のらしくする。また細やかに句讀を切つて、世之介が指南坊に口授する調子を示さうとした。原本の句讀を正しく寫せば斯うである。

今更馴々しく、御入候へ共、たへかねて申まいらせ候、大形目つきにても、御合點有べし二三日跡に、姨さまの、晝寢を、なされた時、こなたの糸まきを、あるともしらず、踏りました、すこしも、くるしう、御座らぬと、御はらの、立さうな事を、腹御立候はぬは、定而、おれに、しこのふで、いゝたい事が御座るか、御座るならば、聞まいらせ、候べし、

このやうな『源氏物語』の興り知らぬ趣向立をする西鶴は、また別様の筋立をさへとり入れた。兼好の艶書の代筆沙汰であつた。兼好はこゝでは世之介の指南坊である。とんだ嫌疑をうけた彼の法師が「惣じて、物事に、外なる事は頼まれても、かく事なかれ」といふのは、例の兼好の癖である教訓の口吻を模するものであつた。

西鶴はかゝる戯れの中にも、いはゞ一篇の本筋ともいふべき性生活の展開の徑路に就いていふことを忘れなかつた。腰元から從姉へ、多くの性的記録の示すところの事例が、こゝに見られる。

あれにも、これにも互る西鶴の用意を合はせ述べることとは、ものゝ混亂をおそれる。西鶴の『源氏物語』の翻案といふものは、決してその一筋をのみ追つてゐないことを一言して、しばらくは、専らその翻案のあとを辿らうとする。

「帚木」につゞく「空蟬」がまた西鶴の翻案の料となつた。



源氏君は空蟬の宿に忍び行きて、空蟬と軒端萩が碁を打つのを垣間見る。軒端萩の姿が残るところ、なく見られる。「紅の腰ひき結へるきはまで、胸あらはに、ぼうぞくなるもてなしなり、いと白うをかしげに、つぶく／＼と肥えて、そゞろなる人の、頭つき額つきものあざやかに、まみ口つきいと愛敬つき、花やかなるかたちなり」、『源氏』にいふところはたゞこれだけであつた。西鶴はそれでは憚らなかつた。仲居ぐらゐの女房を素裸にさせる。なほ足れりとしな。我より外には、松の聲、若きかば、壁に耳みる人はあらしと、ながれはすねのあとをもちぬ臍のあたりの、垢かき流し、なをそれよりそこらも糠袋にみだれて、かきわたる湯玉、油ぎりてなん」それだけでなかつた。世之介をして亭の遠眼鏡を取持て、「わけなき事ども」すなはち女が沙汰せられて困る「今の事」を見咎めさせるのであつた。

『一代男』にして、はじめて存在する垣間見であつた。俳諧師西鶴の阿蘭陀流がこゝにも見られる。行水の女を見咎めた世之介は、その夜忍んでいつた。西鶴がその女に就いてしるしてゐることは極めて朦朧としてゐる。「女是非なく、御心にかなふやうにもてなし、其後」しかく／＼とも見える。と思へば、世之介に膝枕されて「よもやたゞ事とは人々も見まじ」しかく／＼とも見える。女と世之介の關係がどうであつたかを明瞭に語らない。

行水の女は、前には軒端萩であり、後には空蟬であることはいふ迄もなかつた。或はこの曖昧も、西鶴がわざとの筆の跡であらうか。事は「帚木」に戻る譯であるが、源氏君がはじめて中川の宿で空

蟬に逢うたその夜の關係はどうであつたか。今の『源氏』の讀者は、その夜だけは許した空蟬と解してゐる。しかし、その頃の註家は必ずしもさうのみは取らなかつた。例へば『湖月抄』に引くところも或は實事ありとし、或は事實なしとする。兩説未だ決せざる形をなしてゐる。西鶴の筆の麗なるはこれに拘はつてゐるのであらうか。かうも思ひながら、穿鑿に過ぎることをおそれてゐる。

## 五

「袖の時雨は懸るがさいはい」には、十歳の世之介がさる男に衆道心を寄せて、つひに靡かせる顛末を語る。その男には年比命はそれと思ふ若衆があつた。その人ゆゑに、男はすぐに世之介の心に従はない。と知つた若衆は、さりとはむごき御心入りと、自ら媒して世之介との中をとり持つて身は外になしたとある。

これをしも、「帚木」「空蟬」に見えたる源氏君と小君との關係と見るのは、前にもまさつて過ぎたる穿鑿であらうか。またそれをおそれながら、『源氏』を讀み直して見る。

「帚木」のをはりにある。

よしあこだにも捨てそと宣ひて、御傍に臥せ給へり、若くなつかしき御有様を、うれしく、めでたしと思ひたれば、つれなき人よりは、なか／＼あはれにおぼさるとぞ。

源氏君は、どうしても空蟬に逢ふことがかなはなかつた。悶々の情は、わづかに空蟬の弟小君を側に



寝させてみづからを慰める。小君は源氏の君若くなつかしきを嬉しくもめでたくも見る。さう知つて源氏君は空蟬よりも却つて可愛くなるのであつた。

「空蟬」のはじめには、斯うある。

文は直に「帚木」のをはりに續いてゐる。

寝られ給はぬまゝに、われはかく人に憎まれてもならぬを、今宵なんはじめて愛しと世を思ひ知りぬれば、はづかしうて永らふまじくこそ思ひなりぬれ、などのたまへば涙をさへこぼして臥したり。いとらうたしとおぼす。てさぐりの細く小きほど、髪の毛いと長からざりしけはひのさま、似かよひたるも思ひなしにやあはれなり。

前文に於て、源氏君が念者としての愛を、小君に注ぐやうにほの見せてゐたのは、こゝに至つて極めて明瞭となる。『源氏』の中から男色を見出すの註は、何も萩原廣道の『評釋』を待たなかつた。色道二つに目を配る西鶴は、すぐにそれほどの敏感があつたと見てもよささうである。

「永らふまじく」と歎くのは、源氏君である。「涙をさへこぼす」のは小君である。小君は源氏君に愛されるをうれしと思ふまゝに、その心の悩みにかぎりなき同情を寄せてゐる。

源氏君は、小君に、「さりぬべき折を見て對面すべくたばかれ」とのたまはされる。小君は、それを「わづらはしけれど、かゝる方にてもたまひまつはすは、嬉しうおぼえ」るのであつた。空蟬の夫紀伊守の留守のほどに、小君は源氏君を案内した。彼が源氏君に對する同情は、おのが源氏君から棄て

られるをいとはなかつたのである。この小君の心は、すなはち「袖の時雨は懸るがさいはい」の若衆の情であつた。

西鶴の『源氏物語』譚案に於ける態度は二三でなかつた。必ずしも源氏君を世之介にのみ仕立直さない。形と影の關係は、すべて事の便宜に従つてゐる。これほどの穿鑿は、西鶴に於ては必ずしも過ぎたりといはずものことと思はれる。さう思へば、西鶴がその章の結びに「おもひの中の、中川の橋かけそめて」といつた中川といふ言葉もまた棄て難き一つであつた。

世之介が若衆たるべき齡して、何故に念者を口説き立てるか、それが粉本はつひに『源氏』には見出されなかつた。けだし作者の別意より出づる。しかも西鶴として最も重要な條件であつた。後にいふことにする。

世之介十一歳にして伏見の撞木町に遊ぶ。その里一人の貧者を親方とする遊女のもとにゆく。よろづ不自由がちなる中にも、やさしき女の心根をいとほしく、その親もとを尋ねる。親は相應の武士であつたのが、今も昔忘れぬゆかしさを見せた。「尋てきく程ちぎり」といふのがそれ。

十二歳の世之介は須磨の浦に遊んで、蟹女のわけもなう磯臭いのに困じた。又の日、兵庫に行つて湯女に戯れた。こゝにもさもしい風俗を見せつけられる。この章、題して「煩惱の垢かき」といふ。

十三歳の世之介は清水八坂のいやしき遊女に戯れた。その家の様、女のけはひ、いふに甲斐なきものであつた。「別れは當座ばらひ」といふのがそれである。



以上三章、すべて「帚木」雨夜の品さだめのかゝりと見られる。品さだめとは、女を上中下の三階級に分ち評することであつた。馬頭の評言にいふ、「さて、世にありと人に知られず、淋しくあばれたらむ葎の門に、思ひの外に、らうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ、限りなく珍らしくは覺えぬ。いかではた斯りけむと、思ふより違へる事なむ、怪しく心とまるわざなるべき」西鶴はその珍らしき人の例を、撞木町の貧しき妓家にもとめ出たのであつた。世之介がその女ゆかしと見て、侶の瀬平に尋ねる言葉、

此君は何として、懸るしなくだりたる宿に置けるぞ

の品下れるは、西鶴がその據りどころをほの見せたのである。

馬頭の言はまた續けて、「父の年老い、物むつかしげにふとりすぎ、兄の顔にくげに思ひやり異なることなき閨の内に」意外な娘や妹の存在するおもしろさを語つてゐる。その父を逆用して、義ある浪士とし、撞木町の遊女の父としたのが、西鶴の轉合である。この轉合はまた西鶴の俳諧ともいひ代へられる。

「煩惱の垢かき」「別れは當座ばらひ」共に、雨夜の品さだめにいふ下の下を傳へるものであつた。兵庫の湯女のさもしい風俗を書いたあとで、丹前風呂の勝山に就いていふのも、畢竟は、湯女の中での品さだめである。西鶴が自ら馬頭を以て任じたのである。

## 六

『一代男』の卷一の八章を、かう見ると、どれもこれも『源氏物語』の雛案であつた。卷二もまた序次を以て「夕顔」からはじまつてゐる。しかも、西鶴は極めて周到の用意のもとになしてゐた。「はにふの寢道具」は一つ／＼本據と看比べて、はじめて、作の意を知り、作のおもしろさを味ひ得る。おもふに、西鶴が本文をゆがめ、ねぢつて、滑稽を横溢させるために、得意の俳諧手段を最もよく弄したところであらう。その點からいへば、『一代男』のみか、好色本全體の白眉の章と思はれる。煩はしいけれど、より／＼に全文を引くことにする。

其年、十四の春も過、ころもあらためて、着更る朔日より、袖などをふさぎて、世の人に惜しまるゝも後つきぞかし、

この一節は、たゞ章のをはりに應ずるためである。別に「夕顔」と關はつてゐない。

聊おもふ事ありて、初瀬にこゝろさしける、一人ふたり、召仕を伴ひ、雲井の舎りといふ、坂を上りて、人はいさ心もしらずと、貫之が讀し梅も、青葉なる山ふかく、起誓かけまくも、かたじけなき返事をとる事、いつ迄かとつふやきけるを聞て、又此度もかなふまでの戀をいのらるゝと、おもふぞかし、

一事一物の解は避ける。「夕顔」と結ぶ關係に就いてのみいさゝかの言葉を添へる。初瀬の一語、文の



表はその頃の信仰に繋ぐに過ぎなかつた。しかし、雲井の舎、貫之の梅と一つになりて、かすかに、ほのかに、平安朝の氣分を揺曳させてゐる。『源氏物語』の中でも、わけて聞えたる卷のおもかげであるこの章には、翻案にそれほどの用意を缺かすべきでなかつた。

つぶやく者は世之介、聞いておもふ者は召仕、「いのらるゝ」の敬語は、召仕の言葉であることを明にする。「いつ迄か」の後の言葉は、まだ世之介の口の中にあるその折に、はやくも召仕は、わが主人が古き戀を捨て、またぞろ新しき戀に向つてゐると察したのである。これほどに、早解りする召仕は、すでに「夕顔」にゐた。惟光のもとを訪ふ折に、おん供申した隨身その人である、源氏君は車ながらに、おのれひとりゑみの眉ひらく花を見た。おもはず「をち方人に物まうす」と獨言せられた。隨身はついで、「かの白くさけるをなん夕顔と申侍る、花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲き侍る」と申上げた。隨身は源氏君の半句を耳にすると共に、その意が白き花の名にあることを知つた。「打わたすをち方人に物まうすわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも」の歌は、もとより彼の語らんとするところであつた。西鶴は直にその呼吸をとり來つたのである。

西鶴の文は、本文の會話の輪廓を引くと共に、その内容をも具してゐた。

世之介が「かたじけなき返事をとる事、いつ迄か」といふ「いつ迄か」は、もとよりいつ迄か待たんの意である。その返事を一日も早く手に入れたやと思へばこそ、觀音のおん前にも祈願したのである。それはおもかげである。本據たる源氏君は、藤壺の御方の返事をこそ待つてゐた。「秋にもなりぬ、人やりならず心づくしにおもほしみだるゝこと共あり」といふのは、その間の消息を傳へるものであつた。「かけまくもかたじけなき」この一句をおもかげの縁として、西鶴はうつし出したのである。

西鶴は、召仕をして世之介のつぶやきを解して、かたじけなき返事をいつ迄か待たん、待つゝの要なしと思はせ、さて、又此度もかなふまでの戀をいのらるゝと思はせたのも、やはり「夕顔」があるためであつた。

「夕顔」の源氏君は、六條御息所のもとに通はれる。御息所のまだゆるさぬほど、源氏君は限りなき狂熱を寄せる。しかし一度戀がかなへば、熱はとみに冷める。あやにくなのが源氏君の性癖であつた。「六條わたりにも、とけがたかりし御けしきを、おもむけきこえ給ひて後、ひきかへしなめならむは、いとほしかし。されど、よそなりし御心まどひのやうに、あながちなることはなきも、いかなることにかと見えたり」と本文に見える。さすがは、西鶴である。これを軽く「逢ふまでの戀」に要約してゐる。そこに御息所と藤壺との混亂があるのも、それは咎める必要がなかつた。却つて西鶴の俳諧のをかしさが見られる。

西鶴の筆は召仕が主人の態度に嫌らず、また新な戀の使を煩はしとする意あることを傳へる。「思ふ事ぞかし」の一語の重さがわけてさう考へさせる。それにもまた本據があつた。源氏君は夕顔の扇の歌を見て、新しき戀を思つた。惟光に何者とぞ問はれる。惟光は例のうるさき御心とは思ひながら、さうも申されず、「隣のことはえ聞き侍らずなど、はしたなげに聞ゆ」と本文に見えてゐる。



歸るさは、過ぎにし花の思はるゝ、櫻井の里をすぎ、十市、布留の神やしろを、北に詠こして暮におよべば、椋橋山の麓に、かすかなる草の屋に、折しも、麥も穂のなかば、から竿の音のみ、里の童部、ねぢ籠、あまがへるの家などして、塵塚より、なた豆といふ物、いと笑しく、生さがりたる、垣根を見れば、今こそ今とおもはるゝ、脇あけの下人に風情をつくらるゝもあり、西鶴は、まづ五條あたりの夕をそのまゝに、「暮におよべば」といつた。きりかけだつ物にはひかゝる夕顔を、塵塚のなた豆の生さがる垣根とした。さては彼のから白を、から竿に、あやしう打よろほひて、むね／＼しからぬ軒を、あまがへるの家にうつしとつた。西鶴の細心は、夕顔の花を折る隨身と扇をさし出す女の童のとり合はせをも忘れなかつた。

(隨身)このおしあけたる門に入りて折る。さすがにされたるやり戸口に、黄なるすゞしの單袴、長く着なしたるわらはのをかしげなる出で来て、うち招く。白き扇のいたうこがしたるを、これに置きてまゐらせよ、枝も情なげなめる花をとてとらせたれば云々。

この風情を男色に仕立てるとして、その女の童を、今こそ今と思はるゝ最盛りの脇あけとし、隨身を下人としたのである。下人はいふまでもない、世之介の召使であつた。

髪結ふけしき常ならず、紙ひもの編笠の様子、懸る所にはと、尋ねられけるに、此里は仁王堂と申て、京大坂の飛子、しのび宿なると、よろつに付て、我しり貌に語りけるに、

「髪結ふけしき常ならず」とは、句の表には、飛子の色めかす髪結びぶりを描き出しながら、裏に

は例の「夕顔」を寓するのである。源氏君は夕顔の宿を見る。「籬などいといと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影、あまた見えて覗く」けしきを見た。「たちさまよふらん下つ方思ひやるに、あながちにたけ高き心地ぞする、いかなるものゝつどへるならん」と思つた。『源氏』の作者は、外から源氏君の心を推して「とやうかはりて思ほさる」といふ。その一句を西鶴は仕立直して「常ならず」といふのであつた。

「紙ひもの編笠の様子」とは、夕顔が源氏君に寄せた扇の假用であつた。夕顔の扇は、もて馴らしたる移香、いとしみ深うなつかしう、をかしうすさび書いた歌

心あてにそれかとぞ見る白露のひかりそへたる花の夕顔

をそこはかとなく書き紛らはしたるも、あてはかにゆゑづきてある。源氏君はこれを、いと思ひの外にかしうおぼえなされた。その好奇心は惟光に、あの宿の主人は何人なるかと問はせる。惟光も知らなかつた。あの宿守の男を呼んで尋ねる。

揚名の介なりける人の家になん侍りける、男は田舎にまかりて、女なん若く事好みて、はらからなど、宮づかへ人にて來通ふと申す。くはしき事は下人のえ知り侍らぬにやあらんと聞ゆ。

『一代男』の我しり貌に語る者は、誰であるか、西鶴はつひに示してゐない。たゞこの「夕顔」の下人を拉れ來つて、おもかげのその人が知られるだけである。それでは、「下人のえ知り侍らぬにやあらん」をいかに。これも亦逆用であらうか、とのみは解せられないのは、その一節につゞいてある、本



文には「さらばその宮づかへ人なまり、したり顔に物なれていへるかな」とある。源氏君の思はくをいふ言葉である。西鶴は、その「したり顔」を「我しり貌」に轉用した。源氏君と下人とを一つにして、しかもなほその人を表面に現はさなかつたのである、さきにも西鶴の俳諧は本據を看取して、はじめて、その作意が徹するといつた。これは極めてよき一例として考へられる。

今宵一夜と、おもひながら、色なきかたに、舎りはといと、口惜しかりけるに、爰こそ、假寢の夢計よと密に才覺して、かすかなる亭に入れば、あるじそれ／＼の名をふれける、思ひ川染之介様、花澤浪之丞様、袖島三太郎様、いづれもおもしろ、笑しきさま、兎角酒にして、こんがうの角内、九兵衛を呼出し、よろこぶ物をとらして、後は戯れて盃にすこしは、無理など云懸り、更行まで、月がゆがふたの、花がねぢれたのと、我がまゝつもれば、見合て、寢道具取さばきぬ、よこ島のもめん蒲團にせんだんの、丸木引切枕、夏をのがれたる、蚊もあればとて、摺鉢にすり糠を煙らせける、烟と思へば、是も伽羅のこゝちして、おのづから近よる程に、ひぜんなをりて、いまだ、間もなき手を、うち懸らるゝも、嬉し悲しかりける、

馬頭などが、下の品とさだめ慢れるやどりに思ひもよらぬ女夕顔を、見出すのが「夕顔」のおもしろさである。西鶴が讀者に與へようとする興は、そこに意外なる飛子宿を展開することである。一方には『源氏物語』の筋を追ひながら、一方には、現代の興味事項を箴め込むのが西鶴の計畫である。その計畫ははやくから標榜するところであつた。十四歳の章はすでに題して「仁王堂飛子宿の事」と

いつてゐる。

「狂言役者、男子を遊女屋の女を抱ふる如くに抱へ置きて、藝をし入れるなり。……いまだ舞臺に出でぬはかけまといふ、他國を巡るを飛び子といふなり」と『人倫訓蒙圖彙』にいふ飛子の宿の有様と、飛子の内幕とが、彼の披露せんとするところであつた。しかもなほ「夕顔」の趣を棄てなかつた。

夕顔の宿は佗しかつた。その佗しさを、飛子宿にうつしたのが「寢道具」である。

夕顔のもとに宿れる源氏君は、その且、やり戸を開けて庭を見る。「ほどなき庭にざれたるくれ竹、前栽の露はなほかゝる所も同じごときらめきたり」その露を、糠の煙に轉じたのであつた。

さて勤なれば、尤愛しく、思はるゝ、すきにし程は、いかなる里、いかなる國々／＼を、廻りけるぞ、懸るうへに、つゝむべき事も、何ならん、我そも／＼は、京より權三郎殿にありしが、笛ふきの、喜八かたにわたり、宮島の芝居すきにさまよい、備中の宮内、讃岐の金比羅に、ゆく事もあり、いづく定ず、すみよし安立町に隠れ家、又は河内の柏原、此里にきて、今井多武峯の、出家衆を、たらし侍る、中にも更に、なさけなきは、八幡の學仁坊、まめ山の四良右衛門とて、無類の此道好、是は飛子の、うき灘を越るがごとし、御兩人に揉れて後、此勤ならざるといふ事なし、或時は片山陰の柴かりて、適／＼手にふれし、銀子をしてやり、浦人の鹽馴衣を、はだかにして、假にも取る分別計、情なきは衆道こゝろは、外になりましてと語る、皆うそにしても、偽とも思はれず、



源氏君のつねに知らうとするのは、夕顔の素性である、閱歴である。しかし、夕顔はその問をそらして、殆ど答へなかつた。一篇の作意はそこに存する。西鶴は世之介をして、しばし飛子に、過ぎ來し方を尋ねさせた。源氏君に模するためである。西鶴はまた飛子をして夕顔と違つて、仔細に身上を語らせた。これがはじめからの計畫であつた。

「はにふの瘧道具」の作意がその轉用をしからしめたのである。

語る飛子と語らざる夕顔とは、轉用以外に他の本據の存在することを便利とする。

西鶴は本據たるものを要めて、謡曲「花月」を得た。花月といふ少年が、七歳の折に天狗に攫はれて行方を失つた。それを出離の縁として、諸國を修行しありき、つひに清水寺にて再會するといふ一篇は、若衆物に仕立直すのに都合がよかつたからである。

談林の俳諧と、謡曲との關係は、依然として、西鶴の好色本の上にも存する。かたゞ西鶴はこれを利用したのである。さきに西鶴は「更行まで、月がゆがふたの、花がねぢれたのと、我がまゝつもれば」といはせてゐる。折々は、わざと據るところをほめかす西鶴である。或はこれも「花月」の花と月とを示す微意でないかを疑はせる。

花月をシテとする「花月」は、その父をワキ僧としてゐる。ワキは頻りにシテに問ふことがある。その問答はかうもあつた。

ワキ「御身はいづくの人にて渡り候ふぞ。シテ「是れは筑紫の者にて候ふ。ワキ「扱何故斯様に諸

國を御廻り候ふぞ。シテ「われ七つの年、彦山に登り候ひしが。天狗に捕られて。斯様に諸國を廻り候ふ。

問ひつ問はれつして、まさしき父子と知つた二人は、相携へて郷に歸らうとする。去るに臨んで八撥を打つ。これ舞臺の上の約束、謡曲作者の慣用手段であつた。八撥に伴ふ地謡は斯うである。長くとも引かずにはゐられないほど、西鶴の文と密接の關係があつた。

シテ「扱もわれ筑紫彦山に登り、七つの年天狗に、地「捕られて行きし山々を、思ひやるこそ悲しけれ。まづ筑紫には彦の山。深き思ひを四王寺。讃岐には松山。降り積む雪の白嶺。扱伯耆には大山。く。丹後丹波の境なる。鬼が城と聞きしは、天狗よりも恐ろしや。扱京近き山々。愛宕の山の太郎坊。平野の峰の次郎坊。名高き比叡の大嶽に。少し心の住みしこそ。月の横川の流れなれ。日頃は餘所にのみ。見てや止みなんと眺めしに。葛城や高間の山。山上大峰釋迦の嶽。富士の高嶺に上りつゝ。雲に起き臥す時もあり。

この花月の苦しさを、飛子の惱みに翻す時に、山々は、すなはち、僧にしては學仁坊となり、四良右衛門となつた。また山々は飛子宿の所在地となつた。

さて心にそまぬ人に、あふ夜はと尋ね侍れば、譬ば、あかぢれあし 跣足一代に、やうじ 齒枝つかはさる人にも、いやとはいはし、そのみ宵よりあま 穉の夜の明るまで、とやかに、おもふ儘に成こそ、無念いくたびか、人しらぬ泪にして、



西鶴の轉合は「花月」を翻案してこゝに至つた。翻案と原據と照し合はせる時、誰か笑はずにゐられよう。笑ひやんで、俳諧の妙を嗟嘆せずにはゐられよう。

かく年月やう／＼、程ふりて、くる年の四月には、身自由なると、思ふをたのしみ、心いはるに然も、明後日より金性の者は、有封に入まする、年の七年は、仕合と申侍る、金性ならば、二十四の金か、我とは十違ひぞかし、假初にもかゝる一座にて、年せんさくは、用捨あるべし、西鶴がこゝのはじめに、世之介をして袖とめさせ、人に後つきを惜ませらるとしたのは、この笑ひを強めるためであつた。この事實の笑ひは「夕顔」の悲しい最後と、どこやら通ずるところがありながら、また思ひがけぬ隔りを見出して笑はせる。その笑ひこそ、俳諧の笑ひであつた。

## 七

『源氏物語』との關係以外に觸れまじとした筆は、西鶴の俳諧に誘はれて、つい謡曲「花月」との交渉にまで及んだ。この筆を舊に戻す前に、も一度「花月」のをはりを考へてみる。

シテの花月はワキの父に連れられて歸國する。「さ候はゞ、あれなる御僧に、連れまゐらせて佛道の、／＼、修行に出づるぞ嬉しかりける、／＼」この嬉しい筋を飛子のあさましさに轉じたのが西鶴の轉合であつた。「夕顔」のをはりの方の源氏の君が怪しい女の正體を知つたことと、この世之介が飛子の實狀を聞き得たこととの間に、すでに立派な俳諧を構へてゐるところへ、この花月の親子の關係

が、十も年上の、親ともいつてよい飛子を買つた世之介の呆れ顔のをかしさを、附け加へたのである。複雑なる西鶴の附合であつた。

二十四歳の飛子の話は、悲惨な感を讀者に與へることなしに、却つて朗かな笑ひを催させる。西鶴の規ひがそこにあることは確かである。さうおもふ時に、ふと胸に浮んで來るのは『好色一代女』の「夜發附聲」にある、五十九の惣嫁である。

その女を買つた若衆が、そなたは幾つぞと年をたづねる。女はもの靜かに作り聲して十七になりますといふ。

さては我等と同年とうれしがりぬ、闇の夜なればこそ此形をかくしもすれ、もはや五十九になりて十七といふ事は四十二の大偽世おその後の鬼がとめても舌をぬくべし、是も身をすぐる種なればゆるし給へ、

これが屢々悲惨な事實として指示されてゐる。その章はもつと甚しい人生の悲惨の事實をしるしてゐるといふ事で問題にされる。『一代女』の主人公は六十五になつた。彼女は惜からぬ命、今といふ今浮世にふつ／＼と飽きが來てゐた。

一生の間さま／＼のたはふれせしを、おもひ出して觀念の窓より覗ば、蓮の葉笠を着るやうなる子供の面影、腰より下は血に染て、九十五六程も立ならば、聲のあやぎれもなくおはりよ／＼と泣ぬ、是かや聞傳へし孕女うぶめなるべしと氣を留て見しうちに、むごいかゞ様と銘々に恨申にぞ、扱



はむかし血荒をせし親なし子かとかなし、無事にそだて見れば和田の門より多くて、めでたかるべき物をと過し事どもなつかし、暫有て消て跡はなかりき、

をかしくも、恐ろしくも讀まれる筆の跡である。今の西鶴の讀者は、この中から表現の誇張をとり棄て、残る事實だけを凄惨なる人生記録として扱はうとする。今の世の見解に即していへば然るべきことと思はれる。しかし、西鶴の頃の人々もさう讀んだ、西鶴もさう讀ませるために書いたといふことになる、即座にさうだとは斷りきることが出来ないやうである。

何故に西鶴は藁がたつた飛子では笑はせ、年寄の物嫁では笑ひを收めさせるか、何故に男には酷に、女にはやさしくするか、女若二道への中に男色の方を軽く見る傾向が西鶴にはあるにしても、この場合もそれであるか、まづそれ等を決定してから、『二代女』の凄愴を承認すべきであらう。それ等に就いて考へるには多くの時を要する。それは最も重要な問題であり、西鶴好色本の本質に關する事である。今はたゞその孕女の挿繪には、一脈のをかしが動いてゐることだけをいひおくことにする。そして西鶴の文と繪との間には、かなり緊密な關係があるが、これもその一つであるとのみいふことにする。

西鶴の觀るところ、書くところは變轉自在端倪すべからずとやうにもいはれる。しかしまた、同じ事柄、同じ手法をくりかへす場合も少くない。「はにふの寢道具」の一節と『好色五人女』の「八百屋物語」の一節を合せ見て、一つの例を拾ふことが出来る。「八百屋物語」の吉三がお七の宿に忍んで來

て、その土間に一夜を凌いでゐる。久七といふ下男が一碗の湯を惠んでやる。

くらまぎれに前髪をなぶりて、われも江戸にをいたらば、念者の有時分じやが、痛しやといふ、いかにも淺ましくそだちまして、田をすく馬の口を取、眞柴煎るより外の事をぞんじませぬといへば、足をいらひて、奇特に尻を切さぬよ、是なら口をすこしと——その悲しき切なき齒を喰ひしめて泪こぼしけるに、久七分別していや／＼根深にんに喰し口中も知れずとやめける事のうれし、

これは精粗の違ひこそあれ、心にそまぬ人にあふ夜はと世之介に聞かれて、尻足、一代に齒枝つかはざる人にもいやとはいはじと答へた飛子の言葉と同じ筋におちる。八百屋の店前なる故に、根深にんに喰し口中といったが、さもなくばやはり一代に齒枝つかはざる口を恐れる久七であつたらう。こんな些細の一例も、飛子と物嫁に對する西鶴の態度の異同と聯關して考へることを要求する。西鶴の中に於て、相似たものを探し出すことは、外に於て相異なるものを區別することになる。をり／＼不用意に使つてゐた俳諧といふ言葉を、少くとも蕉風の俳諧と區別しておく必要がある。

瘦骨のまだ起きなほる力なき

史 邦

に附けた

隣をかりて車ひき込む

凡 光

は「夕顔」のおもかげであるといはれる。長患ひの人を源氏君の乳母大貳の尼と見立てる。病を見舞



ふとて車しづかに訪れて来る源氏君、そこを中宿として夕顔のもとに忍び通ふ源氏君をあひしらふ。けれどそれを凡兆の心の底に秘めおいて、色ならば匂、音ならば韻とやうに、ほのかに、かすかに見せもし、聞かせもするのが蕉風の體である。談林の俳諧はこれとは違ふ。談林の例はその俳諧を散文化したまでである。「はにふの寢道具」の章で事足りる。そこには原據を露はにし、轉換のあとを明にして、はじめて傳へられる興趣がある。蕉風にも、其人、其時、其場を以てする附味はある。しかし、蕉風の妙諦は却つて其人、其時、其場をかゝりとして其情感に融合するにある。談林は其情感を軽くして、其人、其時、其場を描寫するにある。西鶴の散文的俳諧は、わけてもこれを興趣の中心としてゐる。

同じ「夕顔」を原據としたものではあるが、西鶴の散文と蕉風の附合では、比較する上にふさはしからぬ節もあらう。同じ散文に於て見ることにする。

芭蕉は福井に舊識である等裁を訪れた。

市中ひそかに引入りて、あやしの小家に夕顔へちまのはひかゝりて、鶏頭ははきぎに戸ぼそを隠す。さてはこのうちにこそと、門を敲けば、わびしげなる女の出でて、いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや、あるじは此のあたり何がしといふ者の方に行きぬ。もし用あらば尋ね給へと云ふ。かれが妻なるべしと知らる。昔物語にこそかゝる風情は侍れと、やがて尋ねあひて、その家に二夜とまりて云々。

芭蕉がその家を見て、聯想したのは「夕顔」の巻である。その中にある「昔物語にこそかゝる事は聞け」をさへ轉用して文を成してゐる。しかし、芭蕉が歎んで寫し出したのはその風情だけである。筆の運びからいへば、立派に一つの短篇小説になつてゐるこゝも、その風情の點出にははつてゐる。等裁の妻は若く、美しかつたらう。芭蕉はそれを隱微の間にはめかしながら、辭の表にはわびしげなる女とのみいつてゐる。西鶴が書いたなら、決してさうでなかつたらう。事の始終は違つてゐるものゝ、「はにふの寢道具」からも類推されないことではなかつた。

同じ『奥の細道』である。芭蕉は心に野ざらしを期しながら、長途の旅に上る。

彌生も末の七日、あけぼのゝ空、朧々として、月は有明にて光をさまされるものから、不二の峰かすかに見えて、上野谷中の花の梢、またいつかはと心ぼそし。

「月は有明にて光をさまされるものから」の辭句は源氏「帚木」の巻に出づる。源氏の君がまだ空蟬の心をとらへかねて悶々として去る曉の空のさまである。そのわびしさを旅に移し、旅に死ぬかも知れぬのさびしさに轉じたのである。これを『一代男』の「帚木」の翻案に見る。「人には見せぬ所」にも「袖の時雨は懸るがさいはい」にも、このわびしさは見出されなかつた。蕉風と西鶴の好色本との比較も、こゝまで来れば、もうおちつく所におちついた譯である。

これ以上にいはうとすれば、それこそ一辯を加ふるものは無用の指を立つの臂を免れない。



「はにふの寢道具」は「夕顔」の佛であつた。つゞく「髪きりても捨てられぬ世」も同じ巻の佛である。

世之介は今年十五歳になる、石山に詣でる。身分ありげの後家に誘惑される。據るところは源氏と六條御息所の関係である。そのはじめには、なか／＼に源氏の意に應じなかつた御息所を、西鶴は逆用に用ゐて、更に誘惑の手段を説明するのであつた。

その次の「女はおもはくの外」は「夕顔」の佛でも、また「若紫」の佛でもなかつた。また前にかへつての「帚木」である。西鶴が順序を逆轉した理由は何であるか。

岡崎のくら宿に世之介が仲間の男達氣取の不良達と寄り集る。西鶴は彼等を謡曲「小鹽」の前ワキ都人に誘はれて大原野の花見に行く若き人々に擬うてゐる。ワキの名乗りは、「かやうに候ふ者は、下京邊に住ひする者にて候、さても大原野の花、今を盛りなる由承り及び候ふあひだ、若き人々を伴ひ申し、唯今大原山へ急ぎ候」とある。西鶴は季節を晩春とした。そこで「小鹽山の名木も、落花狼藉、今しほと、惜まるゝ」といふ書き出しにしたのである。

前シテの樵夫は、主の尼妙壽である。妙壽はワキなどに對してくら宿に來る女の素性を説き明す。後シテの業平は世之介である。晝下りの暖さにも、世之介は頭巾をぬがなかつた。仲間の者はいふ、

其方は十六なれば、初冠して、出來業平と申侍る、ほど似合たる、お貌かほを見む、と無理に頭巾をぬがせる。左の鬢先かけてうたれた疵がある。この場のシテ役、世之介は疵の由來を語る。丹後宮津へ通ひ商する者の留守をめぐけてその女房にいひ寄る。諸かない。脅迫する。漸く一夜を約束させる。その夜の事であつた、手ころの割木で此ごとく、眉間を討て、私兩夫に見え候べきかと戸をさしかためて入つたのはと語る。

この貞女は「帚木」の空蟬である。宮津の通ひ商人は、國に下る夫伊豫介である。西鶴はこのやうに「空蟬」を移し來ると共に、同じく巻の指くひ女を移し來つたのであつた。嫉妬のあまりに男の指を噛んだその事を、額に疵つける事にもちつたのである。指くひ女の話は、いふ所の雨夜の品定めを席上に於てなされた。すなはち、岡崎のくら宿とは、まことは宮中の源氏の宿直所であつた。

それにしても何故に西鶴は「帚木」の順序をかへてこゝに挿んだのであらう。考へるまでもない。若い男を誘惑する後家と、世に又かゝる女もあるぞかしの貞女との對照をみたまでである。醜列そのものが彼の俳諧であつた。

こゝにまだ蕉風との比較を見る。「猿蓑」の附合に

旅の馳走に有明しをく

芭蕉

すさまじき女の智慧もはかなくて

去來

といふのがある。芭蕉の句は、凡光の「冬空のあれに成たる北風」に附けてゐる。窓外に木枯わびし



い夜を、旅の身のさこそと申うて、枕頭に有明を置く。旅の馳走の一語、このもてなしを心から嬉しと思つた芭蕉の経験にしていひ得る。去來はそれを物語の風情でうけた。指くひ女の佛で附けたのである。舊註かくの如き解あるか、くはしくは知らない。たゞ自分はさう解してゐる。西鶴との取材の比較も、さう解しての上である。

指くひ女に、指をくはれた馬頭は、しばらく消息もしなかつた。臨時の祭の調樂に、夜更けて、いみじう曇降る夜、何處にゆくあてはなかつた。「内裏わたりの旅寝もすさまじく思はれるので、雪うち拂ひながら、彼女のもとに行つた。「火ほのかに壁に背け、なえたる衣どもの厚肥えたる、大なる籠にうちかけて引き上ぐべき物の帷などうち上げて、今宵ばかりやと待ちける様なり」馬頭はこの馳走ぶりを見て得意であつた。しかし、彼女は家にゐなかつた。その後も二人は和解しない。女は頗り馬頭のすき心を咎めて改めよとのみ責める。男もまた懲さうとして改めるといはない。二人の争闘は女の浅い智慧によつてなほ續く。さうかうしてゐる間に、女は歎きのあまりにはかなくなつた。

去來のおもかけ附は、なか／＼に原據に即いてゐる。それにも拘はらず、必ずしも其人、其事になづまない。概念の聯絡に重きをおかない。主とするものはたゞ情趣である。西鶴の俳諧「女はおもはくの外」では主觀の結合、氣分の繋結は問題でなかつた。努めて其人、其事を轉換することによつて興趣を喚び起さうとする。甚しい相異である。

西鶴と蕉風の比較とはいひながら、例は「猿蓑」からのみ引いた。「冬の日」あたりの比較には、幾

分の異同がある筈である。煩はしさをおそれて、言及しない。「猿蓑」との比較も、もう繰りかへさないことにする。

## 九

十七歳「誓紙のうるし判」十八歳「旅のできこゝろ」十九歳「出家にならねばならず」二十歳「うら屋もすみ所」みな一様に「若紫」の卷の佛である。斯くして『好色一代男』の卷二も、すべて『源氏物語』の翻案であつた。

今はもう言つておいてもよささうである。『好色一代男』一部五十四章、いづれか『源氏物語』の翻案でないものはないと。

「若紫」の源氏はわらはやみを煩うて、北山の聖に加持を受ける。そこに宿れるあくる日の空は美しい、三月もつごもりであれば、山には鳥が囀り、名も知らぬ木草の花も散りまじる。

名も知らぬ木草の花ども、いろ／＼に散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたゞすみ歩くもめづらしく見給ふに、惱しさも紛れはてぬ。

この鹿が、西鶴にも珍らしかつたのであらうか、鹿から聯想して「若紫」の舞臺を直に奈良に移した。奈良の町中には妻なるゝ鹿の風情がをかしい。聯想はまた秋の半の戀をひき出し、やがて戀のただ中木辻町を齎らせる。世之介をそこに拉れて行くことは勿論である。



世之介は竹隔子の内から遊女どもを見てあるいた。近江といふ女がある。大阪にて玉の井といつた女であることを知つた。

西鶴はこゝで「若紫」の筋にかへしたのである。加持を受けた源氏は、夕暮の霞みに紛れて小柴垣のもとに立ち寄る。そこにはおひ先見えて美しい女の子の十ほどなのを見た、源氏はゆかしと思つた。「さるは限なう心を盡し聞ゆる人にいとよく似奉れるが、まもらるゝなりけり」その子が紫の上である、似るも道理、源氏が戀ひわびる藤壺の姪であつた。西鶴はその二人の關係を、今の近江、もとの玉の井としたのである。「水の流れも、爰に住む事笑しく」と鞍替の女にしてのけたのである。

世之介は近江を敵方にする。揚屋は佗しかつた、あひ床もをかしかつた。これも北山の宿の佛である。あひ床の客は、明日は國もとへ歸るといふ、馴染の遊女は、二月堂の牛王、西大寺の薬をおくり物にする。客もをかしい男で「古里の山の神見て瘡かさふるうたらば是にて落すべし」といつた。客はなほ面白いことなどをいふ。世之介は餘所ながら聞いて、「かゝる所にもすれものありや」と思つたのである。二月堂の牛王で瘡を落すとは、いふまでもない源氏の瘡を治す護符をきかせたのである。遊女はすなはち山の聖であつた。「かゝる所にもすれものありや」は紫上を見た時の源氏の述懐であつた。本文にかうある。

あはれなる人を見つるかな、かゝれば此のすき者どもは、かゝる歩きをのみして、よくさるまじき人をも見つけるなりけり、たまさかに立ち出づるだに、かく思ひの外なることを見るよ、とを

かしうおぼす。

源氏は紫上を、薬壺の代りに明くれの慰めに見たいと思つた。強ひてその祖母に乞うて、貰ひうけようとした。幾多の曲折を経て貰ひうけることにした。西鶴はそれをも用ひてゐる。「夜も明れば互に別れ、戀にのこる所ありて、重て宿によびよせ、近江にさらしの縫しるしなどせさせて、かはいかられ、にくからず、かための誓紙、うるし判の、くちぬまでとぞ、いのりける」

ついでなればいふ、その祖母と孫娘とを、母と娘として、「宿に似合ぬ大俎板、つぶれ懸りても、かな色あり、昔しは、かくは、あらざらぬ者のはて成へしと、いな所に氣を付て、世之介是非に入聲」と、も一度仕立直したのが「うら屋も住所」であつた。

紫上を二條院にひきとつたあと、源氏が心のまゝに教へ導くのが、卷三の「戀のすて銀」であつた。これもまた「若紫」の佛である。

幾度か西鶴によつて仕立かへられた「若紫」の北山行であつた。「誓紙のうるし判」で奈良としたのを、「うら屋も住所」では吉野の峯入にした。「出家にならねばならず」では江戸谷中の東、七面の明神の邊の寺住ひとした。すき者の源氏君が、わづかに二日でも三日でも山籠りして、靜かに經讀んでゐるのは希有の事であつた。山から歸ればまたの戀のすさびにうき身を襲す。西鶴の繹案はそこを覗つての事であつた。北山にはしばしば水の流れのおもしろさが書かれてゐる。西鶴はまたそれを逸しはしなかつた。「出家にならねばならず」の佗住居のくだりに、



やうく身の置所も爰に、水さへ稀に、はるかなる岡野邊より、笈の零手して結びおのづから世を見かぎりてひと日二日は阿彌陀經などいと殊勝に見えしが、

とあるのは、それによる趣向であつた。趣向はまた山の源氏が紫上を見出すことによつて、寺に入り込む香具賣をあしらつてゐる。はて知らぬ西鶴の俳諧心の働きであつた。

けれど「若紫」を翻案して、心にくい限りを見せたのは「旅のでき心」であつた。西鶴はあまりに讀者を翻弄する。「好色一代男」と『源氏物語』の交渉を考へる者をして惑はせ、考へない者をも惑はせる。さんざ惑はせて、擧句のはては高笑ひにすべてを紛らすのであらう。探りそこねもあらうが、とにかく探らずにはゐられない彼の腹黒さである。

十八歳の世之介は江戸に旅立つ。けふ二日目の泊りに鈴鹿の阪の下の大竹屋といふ大座敷について、「水風呂に入もあへず、さて此宿に口きくやさ者は、と品定めける、鹿山吹みつとて、此三人其比柴人の、すさみにもうたふ程の女とて、かれらを集め、夜のあくるまで山水の、絶えず飲かはして、さらばの鳥に別れて」ゆくのであつた。

「旅のでき心」の章で、「若紫」の佛をうつすものはたゞこれだけである。それも巧みに掠めなしてゐた。

北山に登つて、加持を受けた源氏は、聖のもとを退るとすぐに、後の山に立ち出でて京の山を見る。供の人々は、源氏の心を紛らさうとて、國々の名所の品定めをする。品定めは明石の君の上にも及ん

で、例の女の品定めとなる。世之介の大座敷はこの後の山であり、宿のやさ者の品定めはこの品定めであつた。源氏は京より迎へに來た人々と酒くみかはした。

「落ち来る水のさまなど故ある瀧のもと」であつた。「山水の絶えず飲かはし」の語はこれに基づく。そればかりではなかつた。本文のこゝらあたりには、幾度となく山水といふ言葉が用ゐられてゐる。紫上のゆかりの僧都が、源氏にまゐるところにも、源氏の言葉として、「山水に心とまり侍りぬべけれど、内裏よりおぼつかながらせ給へる畏ければなむ」とある。「さらばの鳥」と續くのは、これであらう。しかし、西鶴の細心はこゝに意をうけながら、「さらば」の言葉をもそのまゝに持つて來るのを忘れなかつた。源氏が後の山に品定めを終つて後、すぐに歸らうとするのを、聖が今宵はなほしづかに加持など奉りて出でさせ給へと申し上げる。「君もかゝる旅寝にならひ給はねば、さすがにをかしくて、さらば曉に」と宣はれた。さらばの鳥の「さらば」の出所はこれであらう。

世之介は江尻に宿つた。その夜歌説經を聞いた。宿のはした女に訊ねる。女は「されば此宿に、わかさ、若松とて、兄弟の女ありける、其貌畫みせましたい其女郎の口まねをして、あれは」と答へる。世之介は見ぬ戀にあこがれた。もう江戸行を忘れて、長滞留する。

彼のはらからの女に馴て、其夜の枕物語、左のかたにわかさ。右のかたに、わか松と召れさむらふぞや、今中納言平さまと、名に立て、都へのぼらば、つれてゆかひではと、抱の人に隙とりて、今切の女手形も、人の情にて立こし、其暮は、ふた川といふ所に、旅寝して、過にし比往來を留



めてありつる、物語もおかし、

「左のかたにわかさ、右のかたにわか松と召されさむらふぞや」は直に「松風村雨と召されしより」を思はするさへあるに、「今中納言平さま」とも斷つてゐる。謡曲「松風」が原據であると思はせられる。さう思はせながら、西鶴はそれよりも重く、『伊勢物語』を土臺としてゐる。顧みて、江尻あたりの筆に、『伊勢』の風情も少からず揺うてゐることが注意される。

むかし男は、春日の里に「いとなまめいたる女はらから」を垣間見た、古里にいとはしたなくてあるを見て心地まどうたとあるその女はらからを、わかさ、若松に仕立直したのである。西鶴はまたそれを村雨松風に託してもゐた。「松風」にはゆかりの一本の松がある。西鶴の俳諧は、その松をすぐに、あねはの松に見立てる。さうして「都へのぼらば、つれてゆかひでは」と言ふのであつた。

むかし男はまた陸奥の女に戀をゆるしたことがある。女はすさまじかつた。二度とは通はない。ただ京へまかる時に、歌一首をおくつた。

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

歌は女が人がましくないために、連れて行かぬの意を裏に隠してゐる。世之介の場合はさうでなかつた。故に西鶴は歌の正面について言葉を探つたのである。

水無月の程は、蚊の聲、もの悲しき夜は崩黄の二疊つり、次の間に釣懸、はだへみる人もなき物、いつそはだかよと獨事に申せば、其聲につきて、御伽にまいろうかと、それより事調ぬ、又冬の

夜は、寢道具を、かすやうにしてかさず、庭鳥のとまり竹に湯を仕懸て、夜深になかせて、夢覺させて追出し、色々つらくあたりぬる、其報ひ、いかばかり今のがれての、有難さよと、

あはねの松に喩へられた女は、そのはじめ、男を戀して歌を詠む。歌までも鄙びてゐた。男はさすがに哀と思つた、その意に従つた。「いきて寢にけり」と本文にある。その筋をうけた西鶴は鄙びた歌説經女に、旅寢の客を誘はせることにした。客はつい御伽にまゐらうかと、それなりに事調ふやうに改めたのである。

むかし男は、いきて寢はしたものゝ、荒涼の感を懷いて、夜深く歸る。女はわびしかつた。

夜も明けばきつにはめなむくだかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

と詠んだ。西鶴がその俳をとり、その歌を利用して、鶏をまだきに鳴かす秘法を書いたのが、これである。

俳諧の妙は聯想の絲の細くして、また數多きにある。少くとも談林の俳諧はそれを生命とする。聯想の絲の細さは、配合の奇抜で人を驚かすことになる。數の多きは融通自在で、また人を驚かすことになる。西鶴は『伊勢』をもぢり、すぢつて、この散文の俳諧を書いて來た。夜も明けぼの歌から、鶏を鳴かせ、さて旅客を追ひかへす流れの身の苦しさ、世之介に身請されて、その苦しさからのがれた有難さを書かうとした。鶏、——のがれての有難さ——そこからまた聯想させるものがある。西鶴はおそらくこゝで「盛久」の一節を口ずさんだであらう。さうして、



其報ひ、いかばかり今のがれての、有難さよと、いやましに、よろこび侍るに、ひとつの難義あり、いつ音羽の山を見るまで、道すからの、遣ひかねとてもなくて、と書いたのであらう。

「盛久」は、平家の侍主馬の盛久が囚へられて鎌倉に下りて斬らるべき前夜、日頃信ずる觀世音の靈夢によつて救はれる筋である。

既に八聲の鶏鳴いて、御最期の時節唯今なり、早々御出で候へとよ。

ワキ役の土屋三郎にかう促されて、盛久は足よわくと立ち出でて、最期の座に直る。觀音の御名を唱ふれば、太刀取の太刀は二つに折れて段々となる。「末世にてはなかりけり、あら有難の御經や」西鶴はこれによつて、「今のがれての、有難さよ」とわかさ、若松の述懐を書いたのであらう。

しかし、さうのまいふのは、未だ西鶴の筆の運びを解さぬ者であつた。彼は早くから「盛久」を利用してゐた。例の『伊勢物語』と、とり交せて書いてゐたのである。「羨しくも歸る波かな」「ひしきものには袖をしつゝも」などを聯想させる江尻あたりの文は、また「盛久」の

シテ越えては關に清見瀉地へ三保の入海田子の浦、うち出でて見れば眞白なる、雲の富士の嶺箱根山、

を下に踏へてゐた。

世之介は路銀に困じた、いつ都に歸られるか當がない。西鶴がそれを「いつ音羽の山を見るまで」

と書いたのも、また「盛久」あるがためである。「盛久」にはシテが京を立つに當つて、清水寺に名残を惜しむ心がかう書れてゐる。

あら名残をしや、いつか又清水寺の花盛地へ歸る春なき名残かなシテへ音に立てぬも音羽山地へ瀧つ心を人知らじ

それにしても、うるさ過ぎる西鶴の聯想である、諸曲の好みである。さきの本文のつゞき、

遣ひかねとてもなくて、——ふたりの女の、うは氣などをしろなし、芋川といふ里に、若松むかしの馴染有て、人の住あらしたる笹葺をつゞりて、所の名物とて、ひら饅飴を手馴て往來の駒とめて、袖うちはらふ、雪かと、見ればなとようたひ懸て、火、を焼片手にも音しめの、糸をはなさず、うかくとおとろひ、後はふたりの女も花蘭山の、しも里に、まことの髪そりて世にすてられ、たのしみし人に、捨られ道心とぞなれる。

芋川の名物饅飴の粉の聯想は雪となり、袖うちはらふの歌となつて、こゝにも諸曲「鉢木」が撮合はせられたのである。

「ふたりの女の、うは氣などをしろなし」のしろなしは、浮氣すなはち媚としては、やゝふさはしからず思はれる。うは氣の氣は着の假字か、西鶴の用語例にはこれほどの假字をゆるしてゐる。もしうは氣が上着ならば、それも「鉢木」の「人は鶴篋を着て立つて徘徊す」の鶴篋から來てゐる筈である。上着をうは氣にかけたとすれば、それは貞門の俳諧とならう、それから出た近松の洒落とならう。西



鶴の意のあるところ、つひに知るよしがない。

西鶴は「旅のでき心」の一章に於て、『源氏』で惑はせ、『謡曲』で惑はせ、『伊勢』で惑はせる。『伊勢』かと思へば謡曲、謡曲かと思へば『伊勢』、二段三段の構へして自ら嬉むものであつた。煩はしいほどのこの章の詮議立も、こゝで止めたなら、まだ西鶴から擲揄れはせぬかの懸念がある。一事を書き添へる。

西鶴から擲揄れさうなといふのは、饅飩屋の亭主世之介の趣向を、言葉の表からのみ見て「鉢木」とすることである。西鶴の微笑が嫌さに、鑿解のおそれを冒してまで、考へておきたいのは司馬相如と卓文君の艶事である。

司馬相如は臨邛に遊んで富人卓氏の女文君の美しいのを見た。思ひのたけを詩にものして、琴に合はせて歌つた。文君は戸の隙間から窺つて、うれしいと思つた。二人は手を携へて出奔した。間もなく遣ひ金もなくなつたはてに、二人はまた臨邛に流れて來た。卓氏の家近くに酒屋を開く。文君は酒の酌をする、相如は犢鼻褌一つで器を洗ふ。卓氏を見るに忍びない。つひに二人を迎へた。思ふ壺に當つた後の相如の身持はよくない。あだし女を娶らうとする。文君は悲痛の情を一詩に寄せた、白頭吟これである。初句に「皚如山上雪」とあり、中に「願得一心人、白頭不相離」とある。相如はこれに感じて、その女を娶ることを止めたといふ、かういふ事が傳へられてゐる。

一心の人を、右に左に女はらからを召す人とし、山上の雪を饅飩の雪としたのが、例の俳諧でなか

つたか。「たのしみし人に捨てられ」とあるのも、それと連繋がありはせぬか。とにかくありふれた二人比丘尼の懺悔物の型とどつか違ふところがあるやうに思はれる。

このやうに、西鶴の原據を探し出したのにせよ、まだく西鶴を博識の士にしてしまふ虞はない。ものゝ至りの浅さ深さは別として、どうしてもこれだけの故事を心得てゐなければ出来かぬのが談林の俳諧であつた。謡曲は談林の俳諧からいへば、立派な鼻唄である。『伊勢』や、『源氏』にしても、有職故實といふことになるかと別であるが、むかしの物語としては、常識になりきつてゐた。『源氏』の梗概の書が頻りに俳人によつて成されたのも、その用意のためである。西鶴の『源氏物語』に對する造詣の程度は鮮でない。しかし、筋讀みとしては、別に學者畠にひけをとらぬ程であることは認められる。梗概の書からは、とても出来さうもない彼の俳諧仕立である。「白頭吟」のことまた怪しむを要さない。西鶴は「袖の時雨はかゝるが幸」の章にも、蘇東坡の詩を引いてゐる。その類がなほ他にも散見する、尤もそれもこれも貞門の俳諧、談林の俳諧に慣用せられてゐるものに過ぎない。それにつけても、貞享元年、住吉社頭の二萬三千句の大矢數の俳諧が現存しないことが憾みである。一日一夜にそれほどの句を詠むといふのは、畢竟は腦裡の塵を棄てるやうなものである。塵棄場から、その料理場の有やうは髣髴される。更に佳肴『好色一代男』などの材料を敷へ立てることが出来るはずであつた。なほ今残る一日四千句の俳諧からも、これを推測することは十分である。

けれど、人生の觀察に於けるほどの鋭さが、源氏讀みの上にも存することは極めて明瞭である。急



所々々を取つて押へる手際があつて、はじめて天晴な俳諧が出来るのであつた。まして西鶴がその頃の古典の翻刻、また古典の新註に注意を拂つた形跡はたしかにある。「好色一代男」の成るのは偶然でなかつた。

「旅のでき心」は「若紫」の翻案を尋ねる者をして、思はぬ方にまでそれさせる。複雑なる彼の俳諧は幾度か『源氏』にのみ専らであることを期しながら、旁系の原據を棄てることをゆるさなかつた。たゞ心して、この後は「謠曲」にだけは觸れないことにする。

「若紫」の翻案は『一代男』の中にまだ一つ残つてゐる。少し離れた卷三の「集體は五奴の外」である。

「若紫」の源氏君は北山の宿をわびしく思つてゐる。けれど主の僧都は心を籠めてもてなしに忙しい。世に珍らしい菓物を何くれとなく谷から掘り出して奉る。源氏君が京に歸る折は唐土將來のいみじき物々をさし上げる。君もまた布施、まうけの物など、さまざまに遣はされる。山がつにまで然るべき物を下された。

別の宴は瀧の下で催された。京より迎への人々は歌をうたひ、篳篥を吹き、笙を吹く。源氏君も琴をかいならした。君を見奉る山の人々は、「この世のものとも覺え侍らず」と噂する。

僧都も、あはれ何の契にて、かゝる御様ながら、いとむつかしき日本の末の世に、生れ給ひつらむと、見るにいとむ悲しき、とて目おし拭ひ給ふ。

紫の上も、君の姿を美しと見た。父の兵部卿宮より美しと評した。君の去つた後も

遊遊にも、繪畫い給ふにも、源氏の君とつくり出でて、清らなる衣着せかしづき給ふ。

「若紫」が「集體は五奴の外」と交渉のあるのはこれである。

二十五歳の世之介は寺泊の傾城町に遊んだ。揚屋もなかつた。親方の家はわびしかつた。しかし、夜食の膳はよかつた。「先蓋をあけぬれば、小豆食はおもしろひ、鯖きざみて、穂蓼置合こそ、心にくし」これが僧都のもてなしに當る。壁一重あちらでは、所の若者が、流行おくれのさゞんざの小歌の稽古に夢中であつた。柴垣踊も知らないのである。これが瀧のものとの遊びに當る。

その夜の遊女は限りなき好意を世之介に寄せる。

我江戸にてはじめの高雄に、三十五までふられ、其後も首尾せず、今おもへば惜ひ事哉、この女か、其太夫にて、是程自由にならば、尤おもしろかるまし、昔をおもひ出し、うそ腹たつて、むく起にして、罷歸る、

その遊女が源氏君の姿を美しと見た紫上の俳である。高雄の事は、源氏君の煩悶の種である藤壺のうへを匂はせたのであつた。世之介は同道の人に、付とゞけをよいやうに頼んだ。

あるじに三百口鼻に百、はたらく女共に、貳百、合六百文蒔ちらせば、いづれもおどろき、さても大氣な大じんと、

源氏君が山の人々に遣はした贈物は、かういふ姿となつて現はれた。



近付に成し女郎、袖をかざし、舟ばたまでおくりて、互にみゆる内は、小手招き、京にて出口まで、送らるゝ心知ぞかし、彼女郎舟にのりさまに、私語しは、こなた日本の地に、居ぬ人じやと申ける、心にかゝれど、今に合點ゆかず、

西鶴は源氏君を評した僧都の言葉をこゝに轉用した。「あはれ何の契にて」と僧都の解さなかつたのをそのまゝに、世之介に「今に合點ゆかず」と思はせたのである。

僧都が解し得ないといふのは、前世の因果に關する事である。別に紫式部に聴くまでもなかつた。世之介をして合點ゆかずと思はせる西鶴の意は何であるか。

西鶴は當面には、世之介の堅藏を暗示することにした。その堅藏が唐人、紅毛人を思ひ出させる。日本に居ぬ人を聯想させたのはそれが爲である。源氏君の美しさ、やさしさは、古い昔の物語の事である。今の好色本ではかう書かなくてはならなかつた。

これはまた遠く世之介の女護島行の伏線をなしてゐる。世之介が女護島渡りする前年に、長崎に遊んで、唐人紅毛人の遊びぶりを評判するのと同じ心からである。

西鶴の散文的俳諧は、『源氏物語』を前句とする附味の外に、また一部一卷に通ずる心を求める。これもその一例として見られる。

『二代男』を通じて五十四話、最後の「床の賣道具」が巻の名のみある「雲隠」に假託したのを除けば、『源氏』の本文に據るものは五十三話である。それにしては、餘りに多くを「若紫」の翻案に割いてゐる。しかし、それとほぼ同数の翻案は「夕顔」に於ても見ることが出来る。卷二の「はにふの癡道具」はいふまでもない、その他、卷四の「因果の關守」につゞく世之介二十九歳の章「形見の水ぐし」以下四章、すなはち「夢の太刀風」「替つた物は男傾城」「晝のつり狐」は一括して「夕顔」の翻案である。

『好色一代男』と『源氏物語』との關係は、明治に於ける西鶴研究のはじめ頃から問題とせられてゐた。特に「形見の水ぐし」と「夢の太刀風」と「夕顔」の關係が顯著なる例證として引かれてゐた。一目瞭然たるものがあるからである。今はもう西鶴常識にさへなり決つてゐる。従つて、こゝに、それに就いて縷説することを避ける。たゞ後の二章は、ともすると、「夕顔」と何等の交渉のないやうに思はれがちである。煩はしいが、一應の解説を試みる。

「替つた物は男傾城」に扱はれたのは、御殿女中である。大名の奥方に召しつかはれる女中方は男といふ者を見る事も稀に、二十四五迄も、枕繪、一人笑ひを見て、わづかに鬱を慰める。これさへ、結局は辛氣の種となる。その女中の一人が、女中頭から、錦のふくろに包んだ異様な道具を預り、たけはこれより少し長いのをといふ怪しい註文を承つて、堺町邊の細工人のもとに使用する。生憎と望むほどの物はなかつた。主に申しつけて歸る途中、ゆくりなく世之介に會つた。當時三十一歳の彼は、江戸



にあつて、唐犬權兵衛のもとに身を寄せてゐたのである。女中は便宜を得て世之介に囁いた。

近比指<sup>き</sup>あたりたる御難義に候へども、まづは、御人體を見立、是非に、頼たてまつり候、私は、或御屋敷方に、勤て、奥さま、まぢかくありし身にて候、かたれば長し、親の敵程に存じ候人を、けふといふけふ、見付申候、女の身なれば、及難し、御うしろ見、あそばし、此所存、はらし候やうに

涙ながらの物語に、世之介は即座に承引する。宿に歸つて鎖帷子に身を堅め、同じく鉢巻、目釘竹に心を付て、とつてかへせば、女は急ぐ風情もなく、錦のふくろを出して、是にて我心の程が知れます、御覽といふ、紅の緒を解けば、中には何年かつかひ減らしてさきのちびた物。興さめてこれはといへば「此形さまをつかふ時には、死入ばかり思ふにより、命の敵にあらずや、此敵を、とりたまはれと、世之介に取付」世之介は直にその意に従つて、敵といふものを討つてやる。「夕顔」にはもとよりこんな筋のあらう筈がない。例の俳諧の手段とはいひながら、西鶴は何に本づいて、かういふ趣向立てをしたことであらうか。その穿鑿は西鶴がいかに細心に「夕顔」を讀んでゐたかを證據立てる。それよりも、西鶴が『源氏』の中から利用し得られる箇所をいかに敏く捉へ、いかに巧みに利用したかの一證左と見ることが出来る。

「夕顔」には一挿話として、源氏君と六條御息所の侍女、中將のおもとの交渉が書れてある。霧のいと深き朝であつた、源氏君は御息所のもとを辭し去らうとする。中將は廊の方へ御見送り申す。紫苑

色の折にあひたる、羅の裳あざやかに引きゆひたる腰つき、たをやかになまめける姿であつた。いつにてもあれ、機會を逸さぬ源氏君は、見かへりて、隅の間の勾欄に、しばし引きすゑる。中將のうちとけぬものごしが、彼の心を惹きつける。「咲く花にうつるてふ名はつゝめども折らで過ぎうきけさの朝顔、いかゞすべき」と源氏君は手をとらへる。もの馴れた中將は驚かなかつた。早速の挨拶とて、「朝霧のはれまを待たぬけしきにて花にこゝろをとめぬとぞ見る」と答へる。いふところは、自らの心をいふにあらずして、おのが主、御息所の上に託するのである。『源氏』の作者は、これを「おほやけごとにぞ聞えなす」としるしてゐる。

西鶴はそのおほやけごとをわたくしごとに轉用したのである。主人の道具を種に、おのが思ひを晴らす奥女中に、その中將を變へ、いひ寄る源氏君を、いひ寄られる世之介にかへたのである。『源氏』の本文には、またそこに、短いながら巧みなユーモアを點出してゐる。

をかしげなるさぶらひ童の、姿好ましうことさらめきたる、指貫の裾露げげに、花のなかにまじりて、朝顔折りてまゐるほどなど、繪にかゝまほしげなり。

侍童いまだ年少にして、事を解さなかつた。源氏君の「折らで過ぎうきけさの朝顔」を言葉の表に即して、朝顔を折つてまゐつたのである。本文に於ける笑ひは、これほどの軽さである。それを哄笑に轉じた西鶴の轉合が注意せられる。尤も西鶴には、その轉合の中に奥女中なるものを現はさうとする計畫のあることはいふを要さない。



「晝のつり狐」と「夕顔」の関係は極めて稀薄である。それは殆ど題目の上に於ての関係であるといつてよい。その章は、老女に一生の中のいたづらを語らせる趣向になつてゐる。語り出づるのは、切貫雪隠、しのび戸棚、あげ疊、空寝入の戀衣、後世の引人などの、くら事であつた。それが「夕顔」と関係ありとすれば、つひにおのが素性を語らず、過去の戀を明さぬ夕顔の上を、戀のてだて、四十八手の祕密をすらくと説き聞かす老婆に逆用したまでである。それよりも、源氏君が夕顔をなにがし院に誘はうとする時の問答、夕顔の「なほ怪しう、かく宣へど、世づかぬ御もてなしなれば、もの恐しくこそあれ」に對する源氏君の「げに、いづれか狐ならむな、たゞ謀られ給へかし」の「狐」によつて、世間を誑し謀るくら事と關係づけた名題の方に、重要な交渉のあることは勿論である。

おもふに、西鶴は古へのものゝあはれ床しい一部の書を、あらぬ今様姿に仕立直す計畫に於て、人を驚かして足れりとせず、更に、各章の譚案ぶりの奇抜、時に原據にひたりと即き、時に原據からさらりと離れて、人々を驚かさうとしたのであらう。どうかすると、謎にもなりかねぬ談林の手法を、こゝにも用ゐたのであらう、少くとも「晝のつり狐」と「夕顔」の関係は謎といひ得る。けれど、この種のもは他にも多く存する。今、ついでを以て、更に奇抜なる俳諧ぶりを見ておくことにする。

卷六に「匂ひはかげ物」の一章がある。吉原の名物、口舌の上手、太夫吉田の利發の話が書かれてある。それに馴染を重ねてゐた世之介は、例の浮氣から他の太夫に移るとて、何かの難を見出して、切れようと心構へしてゐた。折も折、吉田は廊下を過ぎゆく時に、とりはづした。世之介も、供も、

横手をうつて、「おもしろの春邊やな、天晴、くぜつのもとだて、重而出たらば、座敷が嘆ふて、居られぬといはふ」などとうれしがらる。やがて、吉田は衣装仕替へて、櫻一本持ちながら立ち出る。その態度に壓れて誰もものはぬ時、吉田の方から、「此中の御仕方、惣じて、よめぬ事のみ、はじめよりあるゝまでとの、御つたへ、成程けふ切に、あきました、御げんも、今よりは後は」といひ出して、すぐに立ち去る。世之介は裏をかゝれて悄然として辭し去る。この仕なしよからぬ事と沙汰せられて、望みの太夫もつひに逢はなかつたとのことである。

これは「螢」の卷の面影である。源氏君が、夕顔と頭中將の間に生れた玉葛を養つて子としながら、いつかそれに心を焦す仕なしは、たしかによからぬ沙汰であつた。中にも、玉葛に思ひを寄せてゐる兵部卿宮を、ひき合せて、物蔭から宮の話を立て聞く態度は悪かつた。また宮が玉葛に執心なのは、わが娘と思ふためであらう、よしそれならば、玉葛の美しさを見せて、一段と思ひ惱ませようと、かねて薄い紙に包んでおいた多くの螢を、突然とり出して、その光で玉葛をあらはに見せた仕打は更に悪かつた。『源氏物語』の作者は、すでにその態度を評して、「實のわが姫君をば、かくしももていで騒ぎ給はじ、うたてある御心なりけり」といつてゐる。

源氏君は、また機會ある毎にいひ寄らうとする。「思ひあまり昔のあとをたづぬれど親にそむける子ぞたくひなき、不孝なるは、佛の道にもいみじくこそ言ひたれ」ともいひ出づる折もあつた。しかし、玉葛は「ふるき跡をたづぬれどげになかりけりこの世にかゝる親の心は」と靜かに答へる。源氏君



はその理に壓せられざるを得ない。本文にいふ、「心はづかしければ、いといたくも亂れ給はず」と。西鶴が吉田の口舌上手に擬する原據はこれであつた。

螢を放つの一、西鶴はまた棄てなかつた。これがその巻の眼目であるからである。

手は野風程書て、然も、歌道に、こゝろざし深し、或時飛入といへる、俳諧師、涼しさや夕よし田が座敷つきと、有に、螢飛入我床のうちと即座の脇、是にかぎらず、毎度聞かれし事ぞかし、吉田の口舌上手、歌道の志はともあれ、この脇が果してその詠であるか、どうかは、飛入といふ俳諧師が實在の人物なるか、否かと共に、深く考へる要もない。文面すでにその洒落を明にしてゐる。まして、吉田に放屁の事實が存在するか、否かに至つては、はじめから問題にする必要もない。何となれば、西鶴は「螢」を、直に「屁垂」に換つて、この一章の趣向を立てたからである。

もはや、こゝに至つては、「ほたる」が「火垂」であるとか、ないとかの議論でなかつた。あなむづかしの語原論や、と西鶴はさつさとかういふ轉合に興ずるのであつた。『一代男』の談林ぶりは、『源氏』の巻の名の振り方と、「晝のつり狐」の名題に於ける『源氏』の本文の附會の程度からも、推測するに十分であると思はれる。

## 一一

西鶴の翻案ぶりの自在にして奔放なる、どの章はどの巻に本づくといつたゞけでは、要領を得ない

場合も多い。冗辭や、厭はしきに至つたのは、これが爲である。しかし、以上の數例によつて、ほと部分に於ける翻案の略を傳へ得たものとして、問題を大綱の翻案の上に轉ずることにする。

西鶴は『源氏』を翻案するに當つて、まづ『源氏』の大綱を移さうとした。故に「桐壺」「帚木」の序次を以てはじめ、「御法」「幻」を前に据ゑて、「雲隱」を以て筆を收めた、その中軸に「須磨」「明石」を配した。かくしてほと『源氏』の輪郭を髣髴させた。しかし、すべての章が必ずしも『源氏』の順序を追はなかつたことは、「夕顔」に據るものを、幾つにも裁斷しておいて、「はにふの寢道具」と「形見の水ぐし」の間に、他の巻々の翻案を混入してゐることによつて明である。現に「形見の水ぐし」の直前にある「因果の關守」の牢屋の原據は、「賢木」の塗籠である。

かういふ順序の變更は、時に「髪きりても捨てられぬ世」と「女はおもはくの外」のやうに、配列の俳諧による場合もある。けれど「紅葉賀」を原據とする「目に三月」を、「須磨」を原據とする「火神鳴の雲がくれ」の前に置いたのは、西鶴が特に考慮を拂つての上の事と考へられる。けだし、『好色一代男』一部の大意はこゝに存する。

『源氏』の古註家は、しばしば一部の大意として、天台の教義を説くもの、また褒貶を寓するものなることをいつてゐる。西鶴の日の『源氏』の解なるものは多くはこれであつた。西鶴は一長篇小説としての『源氏』といふよりは數多の短篇小説の集群としての『源氏』を、古典といふ軌範を離れて味ひながら、また從來の一部大意の解を棄てなかつた。彼は繋いでゐる大筋と、繋がれてゐる箇々の事



件を翻案すると共に、また一部大意の翻案をもなしたのである。『好色一代男』の大意とは何か。それは「目に三月」の翻案と原據との比較に於て、明に知り得る筈である。

朱雀院の行幸に先つて、試樂が行はれた。殊更に藤壺に見せようとする帝の御思召による。源氏君は青海波を舞はれた。相手の頭中將も容貌用意共に傑れてはゐるが、源氏君と比較すれば、花の傍の深山木であつた。源氏君が舞に合せての詠ずる聲の美しさは、佛の迦陵嚩伽の聲ともいふべきであらうか。帝は感に堪へて、涙をさへ落しなされた。藤壺はこれを限りなくめでたしと思ふにつけて、もし源氏君との秘めたる戀がなかつたならば、ましてと夢心地であつた。そのあくる朝、源氏君から藤壺に消息があつた。

いかに御覽じけむ、世に知らぬみだり心地ながらこそ、

物思ふに立舞ふべくもあらぬ身の袖うちふりしこゝろ知りきや

あなかしこ

日比は、御かへりもせぬ藤壺であつた。今は目もあやなりし御様かたちに、そのまゝには黙してゐられなかつた。

から人の袖ふることは遠けれど立居につけてあはれとは見き

源氏君はこの返歌を見て、青海波を唐樂と知つてゐる藤壺の博識に感じた。その手紙を持經のやうに展げて讀んでゐられた。

西鶴が、「紅葉賀」に據るところはたゞこれだけである。まづ試樂を見るとうち集ふ御方々を翻して、遊山に出づる御所方の上臈達とした。舞の青海波を、上臈の衣装の模様にはのめかした。すなはち、「下には水鹿子の、白むく、上には、むらさきしぼりに青海波」といふのがそれである。さて肝心の青海波の舞を翻す場合には、世之介を頭中將役とし、善吉を源氏君役とした。この轉換に作意があつた。

世之介は七代の大分限者の夢山に供して島原に行く。彼は三十三歳にして、はじめて天下第一の遊廓に遊ぶのであつた。隠れもなき粹士善吉が案内する。善吉は、この仕懸を見習へと世之介等に揚言する。しかし、善吉はこの里にはしるべもなく、丸太屋の見世のさきに挾箱をおろさせ、腰懸て、内を見やれば、色人許り集り、酒飲んでゐたが、石州は一つうけて、禿に申付て、門に居る善吉に、知らぬ御方様へさしますといふ。是はと二つ飲てかへす、女郎戴く時、善吉、御着とて挾箱から接竿の黒檀、六寸ぢ懸を取出し、僕うたへといふ。世之介は畏つて、弄齋をうたふ、其聲の美しさ、彈手は上手、さりとは石州が見立と、おのゝ感に入る。女は馴染の方へ、斷りの文遣し、ひたすら善吉と語り暮した。

「目に三月」の主題とするところはこれである。西鶴は斯くして源氏君と頭中將のつれ舞をとり入れた。また藤壺の青海波を解し得た事と、源氏君への返歌を趣向とした。しかも、西鶴はこの弄齋の上手の世之介を、作意によつて、傷しい目に合はせることにした。善吉が石州に大持てに持てたにひき



かへて、彼は太鼓女郎にさへふられたのである。彼ははじめて島原の本場の遊びがいかに金を要するかを適切に體驗した。つひに發憤せざるを得なかつた。

世之介は、たいこ女郎にさへ、ふられて、此口惜さ、人に、買てもろうて、遊べき所にあらず、おれも一度は、中く、是では、果じとぞおもふ。

斯ういふ世之介を、やがて大々々盡にするのが、次の章「火神鳴の雲がくれ」である。「須磨」「明石」のおもかげを寫して、勘當を受けて、諸國流浪の身の世之介が、父の遺産を貰ひ得たやうに、西鶴は趣向を構へたのである。

二萬五千貫目の遺産を繼いだ後の世之介の生活は、急に光輝を發した。粹となり、譯知りとなつたのである。

西鶴は世之介の生涯に一線を劃してゐる。三十四歳以後の世之介と、三十五歳以後の世之介との間の一線は、富まざる彼と、富める彼との間の一線である。また粹に到達せざる彼と、粹に徹する彼とを區別する一線である。富と粹との關係、これが、『好色一代男』一部を貫く大意であつた。

『一代男』の卷四は「火神鳴の雲がくれ」に終つて、卷五は、世之介三十五歳の章、「後には様付てよぶ」にはじまる。世之介が「わけ知りの世之介様」と吉野太夫によばれるほどの粹生活は、こゝから開展する。すなはち、『一代男』一部八卷の中、前四卷は、粹の資格を養ふ世之介を寫し出し、後四卷は好色道の達人、粹世之介を寫し出してゐる。西鶴は斯くして、粹の諸條件を一部の趣向の中に、隠

微の形を以て數へてゐた。

世之介が七歳すでに戀を解するはその一條件であつた。恵まれたる彼の境遇は、この好き素質を伸びるがまゝに伸すことを得た。腰元から、従姉、隣家の女房、田舎の遊女、京の私娼と、その經驗を重ねてゐた。「別れは當座はらひ」の彼は、わづかに十一歳にして、京の八阪の女に、一つも口をあかせぬ應對が出来るほどの訓練を得てゐた。西鶴は卷一、すなはち七歳から十一歳までの世之介には、性的發展の徑路を叙するに専らであつた。

西鶴はまた卷二、十四歳の後の諸國流浪の生活、殊に親から勘當を受けて後には、到るところの諸遊里の探求、また隈なき戀の種々相を體驗せしむる事に筆を盡してゐた。その好色修行は、三十二歳、「晝のつり狐」のくら事四十八手を知るに至つた。しかし、彼はつひに金を持たなかつた。故にあれほどの素質と教養とを并せ有する彼も、未だ粹に到達する最大條件を缺くがために、三十三歳、「目に三月」のはじめの島原遊びには、太鼓女郎にさへふられてしまつたのである。その彼が、三十四歳にして大々々盡となつた。世之介の粹者たる資格はこゝに至つてはじめて完備したのであつた。斯くして西鶴は世之介に譯知りの世之介様といふ尊い稱號を與へたのである。粹と譯知りとは、語を異にして義を同じうしてゐる。粹はまた水とも書いた、月すなはち野暮に對する汎稱である。



粹とは何か、西鶴が考へる粹の本質は何か、これが西鶴の好色本研究の焦點でなければならぬ。こゝにもそれを中心として説明すべきであるが、今は抽象的解説を避けて、西鶴がどんな構圖の下に、また『源氏』とどんな關係を保ちながら、粹の生活を寫し出さうとしたかの一端に就いてのみ考へようとする。西鶴の粹の研究は、順序として、斯くあるべきことを信ずるためである。

粹を譯知りといひかへることの出来るのは、戀の諸譯を知るといふにあるが、所詮は組織としての遊廓、また職業としての遊女本來性質の理解に歸着する。西鶴の好色本のすべては、遊廓の雰囲気や揺曳することを期してゐる。當時の文化は、遊廓を中心にして動いてゐる。西鶴の筆は、最も巧みにその時相を寫し出したのである。

小刀鍛冶の弟子がおほけなくも太夫吉野に戀して衷情慇懃すべきものがある、と聞いた太夫は、その心入不便とひそかに呼入れて、首尾してやる。その日は丁度世之介約束の日であつたが、世之介は事情を知つて咎めるどころか、却つて「それこそ女郎の本意なれ」と褒めそやし、なほ「我見捨じ」と、その夜直に身請の沙汰に及んだ。「後は様つけて呼」は、筆をこの事に起してゐる。

遊女は一人の私すべきでない。また遊女は一人にのみ身を委すべきでない。傷しいかぎりであるが、遊廓の組織、遊女の職業やむなきに出づる。これが情の道であり、好色の道である。遊女と嫖客はおの／＼の道を體して、遊廓なる組織の機能の活動を妨げてはならない。永い間の修養によつて、世之介はくるわと女郎の本意の何であるを知つた。譯知りであり、粹士の稱ある所以である。

情の道を最もよく知る吉野は、最もよき遊女である。しかし、遊女はかなしき身過みすであり、卑しい職業である。世之介は吉野の遊女として傑出せるを知ると共に、その卑しい職業に従はねばならぬ女の身の上を感む。さてこそ、その夜俄の身請沙汰となつたのである。遊女は私有すべからず、獨占すべからず、たゞ、かゝる過程に於てのみ、私有獨占がゆるされるのである。

よりよき遊女資格の第一條件は、必ずしもよりよき主婦でない。しかし、變態なる時代相は、遊廓を以て文化第一の府たらしめ、また遊女の最高階級太夫をして、文化第一の教養ある婦女たらしめてゐた。「後には様つけて呼」の後半は、身請された吉野がその卑鄙の出なる故に、世之介の妻とすること難しと排せられんとする時、その教養の限りを盡して、世之介一門の衆女を驚かし、衆女却つて彼女を推擧する顛末をしるしてゐる。西鶴は實にこの事件を叙すると共に、かねて、當時の太夫が、いかなる教養を有してゐるかを數へる形をとつてゐる。

『一代男』巻五以下、世之介を通じて展開された粹生活の中心をなす遊女は、西鶴當時といふよりは、多くは少し前に溯つた實在の人物をモデルにしてゐるやうである。事實は天和の頃は、太夫の品格のやゝ遽下した時代である。一篇の理想小説に意圖をおいた西鶴は、背後をば今の相としたものゝ、人物には却つて眼前の者を避けて、巷説にのこれる、より高い昔姿を假りてゐるやうである。

そのモデルの扱ひがどの程度までモデルに忠實であつたかは、今日からはよく知ることが出来ない。たとへば吉野にゆめ／＼劣らぬ新町の夕霧の如きは、時からいへば、まさしく西鶴も目睹し得



た筈の實在の人物であつたが、卷六の「身は火にくばるとも」にしるされてゐるのは、必ずしもその人の實事のみではなかつた。夕霧が世之介と忍び會ふ折柄、まづ火燵の火を消しておく。約束の客が来る早速に、世之介を火燵の中に隠す。さて、不思議のたつやうに、何でもない文を持ちながら、臺所へ逃げる。客が追ひかける、見る見せぬの争の中に、世之介を戀のぬけ道ぬけさせる、西鶴は夕霧の情をしるすと共に、この利發機轉の一條を傳へてゐる。この一條は、實は西鶴の虚であり、俳諧である。例の『源氏』の譚案であつた。

源氏君の子夕霧大將は落葉宮にいひ寄ることがあつた。さて文を贈る。母御息所が宮に代つて返事を書いた。かねて他意あることを悟つてゐた妻の雲井雁は、とくそれを奪つて見せない。幾度かの押し問答を重ねても甲斐がない。大將は憂慮の間に時を過し、わづかに機を得て、とりかへした。

西鶴がこの「夕霧」の卷の一事を彼に轉用したのは、外にも本づくところはあつたが、主としては夕霧といふ名の相通による。轉合のあとの顯著なる一例である。

斯ういふ虚も混る西鶴作中の太夫の中に、「後には様をつけて呼」に於ける吉野が、實在の人二代目徳子吉野の實事を傳へて謬なきことは、種々の文獻によつて證明せられる。吉野傳の闡明は延いて、彼女を身請したる客の灰屋紹益なることが實證される。彼は京の上立賣の富豪、佐野氏、通稱三郎右衛門であつた。都をば花なき里の歌は、實に彼の詠である。紹益の遺事遺物の今に存するもの少からず、その人物ほど考ふべく、その著「にぎはひ草」一篇によつて、その才識窺ふべきである。

紹益程の教養あつて、はじめて前代未聞の太夫吉野に配すべきである。當時の粹客なる者、事實に於て大方これであつた。世之介またこれほどの教養のあるべき筈である。西鶴が世之介の性の力と金の力とに多くを説いて、その學識才能に就いて語ることの少いのは、畢竟『一代男』の轉合の書であるからであつた。これなほ『源氏』が多く源氏君の學識を語り、わづかにその經濟力を説くのを逆用した感がある。

吉野が刀鍛冶の弟子を感んだ一條は有名なる巷説であるだけに、近松も亦『山崎與次兵衛壽門松』の一趣向としてゐる。たゞし、これは遊女の本意に専らでなくして、母と子の人情を中心としてゐる。二者を對比して、兩作者の態度の相異を知ることが出来る。

### 一三

西鶴は時と所と人と事との間に虚實を配することによつて、『一代男』のをかしさを饒にしよとす。今の吉野の如き、殆ど實に専らなる場合には、前後の關係に於て、なほ『源氏』の譚案たることを暗示するを忘れなかつた。事多くいふも煩はしい。「火神鳴の雲がくれ」が「須磨」のおもかげであり、「ねがひの搔餅」が「關屋」のおもかげであるならば、吉野の身請はいふまでもなく、源氏君が明石上を京に迎へる事の譚案なるは、極めて明である。

世之介が大盡となつた後、大津の柴屋町に遊ぶ、たま／＼舊識である京の禿三人が、立派な馬に乗



つて伊勢參するのに逢つた。世之介は三人が一所に晝も寝ながら、手づから搔餅焼いて行ける乗物を造つてやつた。この「ねがひの搔餅」が「關屋」を原據とするといふのは、源氏君が石山寺に願果しにゆく途、關山に於て空蟬等の一族が常陸より歸京するに邂逅した事件の醜案であるからである。空蟬などの車十輛ばかり、出衣いでしきぬの袖口の美しさを、禿が乗れる三匹の飾馬に擬したのである。

吉野の事が「明石」の佛であることは、廣きに互つていふべき事であるが、その教養に就いてはなほ狭く源氏君が明石を去るに臨み、明石上の琴を聞いて、その妙手に驚くくんだり、「月頃など強ひても聞き馴さざりつらむと悔しうおぼさる。心のかぎり、行くさきの契をのみし給ふ。琴はまたかきあはずまでの形見にと宣ふ」などを考ふべきであつた。

西鶴が『源氏』の醜案を事としながら、巧みに粹道を説き得た一例としては、卷六の「全盛歌書羽織」を擧ぐべきであらう。

世之介と傳七が、互に太夫野秋を争ふ。二人に甲乙がない、野秋はいつれを選ぶべきでなかつた。野秋は隔日に會つて、昨日の噂を今日いはず、今日の事を明日語らなかつたが、後には、「三人同じ枕を並べながら、下卑て首尾する譯もなく、あぢな事共許、前代未聞の傾城ぐるひ」をなすに至つた。一人が遊女を私せぬのが遊廓本來の性質であるとすれば、粹はまさにこゝにまで到達すべきであつた。野秋に果してこの事あつたか、ありとすれば西鶴の筆の誇張ほどの程度であつたか、もとより知るすべのない今は、これをも「薄雲」のおもかげと見るのを心易いやうに思はれる。

その巻にある源氏君は、二條院の美しき方々を、とりづくによしと見て、選擇の餘地がなかつた。その時である、君は秋好女御に斯ういはれた。

はかばかしき方の望はさるものにて、年の内ゆきかはる時々の花紅葉、空の氣色につけても、心の行く事も侍りにしがな、春の花の林、秋の野の盛りをなむ、昔よりとりどりに人争ひ侍りける。

その頃のげにと心よるばかり、あらはなる定こそ侍らざなれ。唐土には、春の花の錦に如くものなしと言ひ侍るめり。大和言の葉には、秋のあはれをとり立て、思へる、いつれも時々につけて見給ふに、目うつりて、えこそ花鳥の色をも音をも辨へ侍らね。

女御は秋のあはれをと答へる。源氏君は、また紫上に語つた。

女御の秋に心をよせ給へりしもあはれに、君の、春の曙に心しめ給へるも理にこそあれ。時々につけたる木草の花によせても、御心とまるばかりの遊びなどしてしがな。公私の營しげき身こそふさはしからね、いかで思ふ事してしがなと、たゞ御ためさうづくしくやと思ふこそ心苦しけれ。

この春秋の争、いつれをいつれと分け難き源氏君の惑ひを、野秋の心としたのが、西鶴の醜案でなかつたか。

西鶴は野秋と世之介傳七の遊びをしるした後の筆に、「あはねば知れぬよき事ふたつ有」とて細やかに紹介してゐる事がある。さりとては三人枕を並べて、首尾するわけもない傾城狂ひを傳へる筆に續けるには、ふさはしくない。しかし、粹の境地は、さういふ性の發展を基調にして、そこに微妙なる



即離の關係を持することに於て到達する。西鶴の筆を怪しむ事を要さない。西鶴の好色本の妙味は、つひにその關係に歸着する。

好色本の根柢は性慾にある。故に、世之介が床の責道具を好色丸に満載して、女護島に渡るの趣向は、『二代男』として、當然の結論でなければならぬ。しかし、それが『源氏』に於ては、源氏君の墓去の悲愁を傳へてゐる筈の「雲隱」の翻案であることを知る時に、西鶴の轉合に心惹れざるを得ない。溯つて、京大阪江戸の女郎の人形を遠い長崎で見せる「都のすがた人形」が、源氏君が紫上の死を悲しんで、その風貌を夢現の間にはの見る「幻」であること、水揚の仰々しい作法をしるした「一盃たらいて戀里」が、紫上の追善供養の儀式的叙述に専らなる「御法」の翻案であることに氣づく時に、誰か西鶴の轉合に笑はない者があらう。『二代男』はその形に於て、小説ではあるものゝ、西鶴の意は散文的俳諧を期してゐたのであらう。それならば、何故に原據に『源氏』を選んだか。内容に就いて多くの理由が數へられる外に、長篇小説にして、短篇小説の集群と見られる『源氏』の組織構造も與つてゐることを忘るべきでない。

## 一四

『好色二代男』『好色一代女』『好色五人女』の轉合は、すべて『好色一代男』のそれと質を同じうしてゐる、俳諧の手法また相似してゐる。たゞ翻案の原據に至つては、おの／＼異なつてゐる。

『一代男』の轉合の穿鑿に就いて、やゝ多くを語つた今は、全く態度を同じうする他の好色本の轉合の一つ／＼を縷説するを要さないやうに思はれる。たゞ異なる原據との比較の一端を示せば、さしあたつては事足りると考へられる。

『二代男』の世傳は『一代男』の世之介と、都の若後家の間に生れたのが、慶安四年の秋、襦袢ながらに棄てられたことになつてゐる。趣向として、『一代男』の卷二の「髪きりても捨てられぬ世」に聯絡する。しかし、世之介の六十歳を天和二年として、その事があつた筈の十五歳に溯れば、慶安四年に該當しない。けだし、西鶴が『二代男』と『一代男』との關係を割合に軽く見て、翻案の原據を重く見たために、この誤算を生じたのであつたらう。

世傳はさる人に拾はれて育てられたが、十四歳の時に、養父養母に死別したとある。西鶴が特に十四歳と斷つたのは、『源氏』の薫君の行跡の年立に現はれる年齢を轉用したためであらう。源氏君の子ならねど事情あつて子といはれてゐる薫君を主人公とする「雲隱」から後の『源氏物語』、いふところの宇治の卷々こそ、實に西鶴が翻案『好色二代男』の原據であつた。

『二代男』の翻案ぶりは、これを『一代男』に比すれば、更に自由な態度を以てしてゐる。『一代男』が「夕顔」「若紫」「須磨」を原據とする場合のやうに、一卷から數話を構成し、薫以外匂宮その他を主人公に轉用してゐる。ために殆ど原形を認め得ないものさへある。今こゝには事多くいはずに濟みさうな二三の例を拾ふことにする。



卷一「誓紙は異見の種」には遊女の誓紙に關することが多くしるされてある。これは原據にないことであつた。そこにはまた平野橋の源といふ粹客が、新屋の小太夫に、我を思ふといふ誓紙を書かせようとしたところが、小太夫はそれほど思つてゐぬ故に書くことが出来ないといふ、それなら惚れぬといふ誓紙を書けとて書かせた事がしるされてゐる。源は老いての後に、その誓紙をとり出しては、悪所狂にもよい程知るべし、惚れませぬと云ふ起請世にない事なれども、これさへ見棄て難く心を盡して通つたものをと手代どもに異見したとある。これは「橋姫」の宇治八宮が、その子大君中君を教訓するくだり、または八宮の薫君に對する法談のくだりのおもかげであつた。

姫君、おん硯をやをらひき寄せて、手習のやうに書きませ給ふを、これに書きたまへ、硯には書きつけざなりとて紙奉り給へば、はぢらひて書き給ふ。

いかでかく巢立ちけるぞとおもふにもうき水鳥のちぎりをぞ知る

よからねど、その折は哀なりけり、手はおひさき見えて、まだよくもつゞけ給はぬほどなり。若宮も書き給へとあれば、今少し幼げに、久しく書き出で給へり。

泣く泣くもはねうち著する君なくば我ぞ巢守りになるべかりける

源が小太夫に誓紙書けといつた原據の本文はこれであつた。

「橋姫」にはまた薫君が姫君だちをかい間見るくだりがある。一卷の眼目となつてゐる。

内なる人、一人は柱に少し居隠れて、琵琶を前に置いて、撥を手まざりにしつゝ居たるに、雲隠

れたりつる月の俄にいと明くさし出でたれば、扇ならでこれしても月は招きつべかりけり、とてさしのぞきたる顔、いみじくうたげに匂ひやかなるべし。そひ臥したる人は、琴の上に傾きかかりて、入る日をかへす撥こそありけれ、様異にも思ひ及び給ふ御心かなとて打笑ひたるけはひ、今少し重りかによしづきたり。及ばずとも、これも月に離るゝものかはなど、はかなきことを、うち解け宣ひかはしたる御けはひども、更に餘所に思ひやりしには似ず、いと哀になつかしうをかし。

西鶴はそのくだりに據つて、卷一の「詰り肴に戎大黒」を成した。薫君が夜深きに、とみに宇治へ行ぐやうに、一群の粹客は更けてから島原へ急ぐ。薫君がかくれなき御匂に、寢覺の家を驚かすやうに、また姫君を垣間見るやうに、これは揚屋町の一軒々々を覗きまはる。薫君が琵琶の音を遠くに聞いたやうに、これには、「此里の夜起の面白さ、早隣には弾いて投節、河内と聞えた、あれを此方の肴に」といふ風情があつた。さても西鶴は大君の琵琶の撥をどう翻案したことであらうか。夜の轉合ふりが明である。

粹客どもは太夫まじりに臺所に出でて、料理事をする。そこには形の上から琵琶の撥を見立てた飯ヒがあつた。

野秋は飯を盛る筈と定めければ、つひに飯ヒ知らぬとは、或時女院様に杓子を見せ奉りしに、それは飯盛る物よと仰せられたる事もあるに、是非に盛り習ひや、自然簾籠屋の女房に成らうよも



知れぬ浮世と云ふ、此示しは聞き所で御座んす、如何にも盛りまじよが、誰やら二階から見さんすものといふ、それこそ任せ、所帯の取付くろめてやらうと、日傘をさし懸けて、上からは見えぬぞ、下の御用心、それ出たわ、いかい嘘の、たしなまんせ、さあ何も出来た、直れといふ。西鶴はかくして、薫君のかい間見のくだりの、「奥の方より人おはすと告げ聞ゆる人やあらむ、籠おろして皆入りぬ」までを、こゝにとり入れたのである。

西鶴は宇治十帖に據つて、かういふ轉合をすると共に、その出發に於て、更に大なる轉合をなしてゐる。ものゝ順序から、『二代男』につゞく『二代男』として、宇治十帖に據ることを思はせてゐるところに、その宇治をかゝりにして、も一つの原據として、内容に於ても、形式に於ても、『宇治拾遺物語』を利用してゐた。

『二代男』の序に當る「親の貌は見ぬ初夢」に、世傳が揚屋町の出口の茶屋に腰かけて、朝歸りの客に讚付けてゐるところへ、古狸のくくといふ遣手の開山が来て、諸國の諸分の話する、その開書がすなはち『二代男』とあるは、いふまでもなく、『宇治拾遺』の序に、宇治大納言隆國が旅人の開書をとつたとあるのに據つたことは明である。西鶴はまた遣手の古手のくくを、「橋姫」の老女房、辨君に擬してゐる。女護島の美面鳥またそれに擬したものであつた。美面鳥が傳へ、くくの語る形は、辨君が薫君の素性を語り、また實の父柏木の古手紙を傳へるくだりを假用してゐることは勿論である。

西鶴が『宇治拾遺』を原據としたために、『二代男』は、怪奇談が多くとり入れられる事になつた。

また『二代男』のやうに、一人の主人公によつて事件を統一しない事になつた。思ふに、西鶴が『宇治拾遺』を選んだ理由は、「宇治十帖」の宇治の名によるだけでなく、むしろ『二代男』のやうな形式的統一を避けて、箇々の事件に就いて、また背景に就いて、叙述と描寫を専らならしめんとする意圖に本づくことであらう。『二代男』すでにそれである。たゞ長篇小説の形式を假りるが故に、これを蔭にうつしたのである。西鶴はこゝに長篇小説の形式を解體して、『二代男』の蔭にあるものを表に出さうとした。『二代男』が目錄にも、たとへば「戀は闇」と題して「腰元に心ある事」とあるのを、これは「親の貌は見ぬ初夢」の章下に、「一女護の島より美面鳥渡る事、一島原の衣装替り姿の事、一遣手の國が諸分物語の事」と各章、各三事を添へて、意のあるところを明にしてゐる。これもまた『宇治拾遺』の體裁に倣ふことであつた。

形の統一を離れて、箇々の事を主とすることは、却つて俳諧の手腕を發揮する上には都合がよい。たゞ『源氏』の一部大意に擬した粹道の解の如きは、これを隱微の間に寓するも面白いが、あらはに語るも興なしとしない、と思つた西鶴は卷末の「大往生は女色の臺」に於て、好色道の妙諦を正面から説明してゐる。

世傳は三十三の三月十五日切に、差引なしに、遣ひ棄て、大往生を極めたことになつてゐる。これを世之介が六十歳にして、なほ女護島渡りすると大なる相異がある。これは薫君の若くして道心の深きを移しなしたか、どうか。その解釋もゆるされることと思ふが、文の表は「是れ世の中の浮かれ男



に、物の限りを知らしめんが爲なり」となつてゐる。

二十より内の騒ぎは、此道に入る皆足代と譯知り和尚も説き給へり。それより十年大興に入りて、太夫の難有いとところを覚え、四十より内に留る事を覺らずば、揚錢の淵に沈むこと眼の前なり。手前にある程叩き上げて、既に廻向の金の無い段に、俄かにやめるも見苦し。

世之介の遊びは父夢介の夢幻の遊びぶりを現實化したものといへる。しかし、その富の一面は依然として夢幻であつた。世傳はその點を現實化するものといひ得る。『二代男』の考察が、『一代男』よりも町人物に近く連絡する事を要するは之がためである。『一代男』の粹客も、遊女も、なほ理想化されてゐる事は明である。『二代男』に至つてまさしき現實の姿を見ることが出来る。こゝにまた西鶴の轉合を考へざるを得ない。彼が多く現實に就いて語る『二代男』には、却つて非現實の事象、すなはち怪奇の一面を挿むことが多い。これがまた『宇治拾遺』などに據ること勿論である。あらゆるものを利用する彼の腕の凄さに驚くと共に、飽くまで讀者を誑弄する彼の腹の黒さが考へさせられる。『二代男』はまた『新可笑記』などとも参照すべき位置にある。もし作の位からいへば、いふまでもなく『二代男』の下にあらう。しかし、西鶴研究としては、『二代男』は種々の點に於て、最も重要な材料であらう。今は殆どそれ等の諸問題に觸れることさへなくてやむ。たゞ『宇治拾遺』がいかやうにとり入れたかの一例を擧げておく。わざと怪奇から怪奇へ移したものでなく、彼の怪奇をあらぬものに歸した一條を選ぶこととする。

『宇治拾遺』に「高階俊平が弟入道算術事」といふ章がある。その入道は唐人から算の術を傳受した。ある時、若き女房どもの集りて庚申した夜、一人が入道に何か人笑はせの物語せよといふ。話下手の甲斐なれど、笑はせるだけの術は心得てゐると答へる。さて算を置きはじめ。女房どもは何をとばかり嘲つてゐたが、やがてすゞろに笑壺に入る。はては笑ひ止めようとすれどかなはず、殆ど死なんとする。入道が漸く置いた算を毀つたので、辛うじて笑死からのがれたとある。

西鶴はこれを諷案して、卷二の「髪は島田の車僧」の「物真似の末社揃への事」とした。生れつき笑ふ事が嫌ひといふ三人の女郎を笑はせる、笑はぬで賭をする。末社どもはあらゆる滑稽を盡しても、女郎は笑はない。身上りの悲しさ、淋しい時の親方の顔色を思ひ出してゐるからである。どうしても京中のかし仲間が負けと決まる時、一人が、「分別して、小石を紙に包み、袖に入れて、耳近く寄りて、さゝやくは、九月の節句も遠いやうだから今の事じゃ、あとも先も爲手があるぞ、まづ是で忙しうといふ拂をしやれと、一包投げ出せば、莞爾と異な事にて笑ひぬ」西鶴はたゞ行くらべといふ點で、謡曲「車僧」を題に据ゑながら、内實は他に據つたのである。例の二重の轉合である。

西鶴が算おきの怪奇を棄て、かういふ趣向立をしたことは、『二代男』一部の大意からいへば當然である。これは『一代男』と同じやうに粹客の全盛ふりと、遊女の氣位の高さを説く一面に、努めて『一代男』の裏をかくて、粹の吝さ、遊女のさもしさの穿ちに力を盡してゐるからである。



『二代男』の別名「諸艶大鑑」の本づくところは、畠山箕山の『色道大鏡』にある。西鶴の好色本の研究に於て、缺いてはならないのは、この書との関係である。材料と作品との関係である。殊に『二代男』に於て然り。『二代男』よりも、素材そのものに近いからである。しかし、今は題名以外、説くべき餘裕を有さない。

こゝにまた作者西鶴が關り知らずして、却つて今日から推測し得る『大かぐみ』の義がある。けだし、『大かぐみ』は『榮華物語』と共に、藤原道長の全盛ぶりを傳へて、なほ『榮華物語』の如く、禮讚のみに専心でなくて、時に忌憚なき批判を以てしてゐる。もし、その異同を借り來つていふとすれば、『二代男』は『榮華物語』と類を同じうし、『二代男』は『大かぐみ』と態度を一にしてゐる。よし西鶴は氣づかなくて命名したにしても、その名がおのづから實を示すことも考へられもする。

『二代男』が粹の禮讚に併せて、粹の批判の性質を有することは、廓遊びの裏面を描寫する筆を多くし、また粹客遊客の手管魂膽を穿つ叙述を多くする。これはまたその穿ちを教材とする教訓の一面を随伴せしめる。

この穿ちと教訓の傾向を助長する時に、『好色一代女』は成立する。西鶴の作風は、好色本と町人物なるを問はず、その本質を同じうしながら、その相は常にある傾向を以て流動してゐる。『一代女』と

『二代男』の關係に於ても、それと指示することが出来る。

『一代女』は形式からいへば、『二代男』から溯つて『一代男』に復歸するといひ得る。これは世之介に當る一人の女を以て主人公としてゐるからである。『二代男』は世傳を以てたゞ聞書をとる人としてのみ扱つた。すなはち『二代男』そのものゝ編者としてのみ見た。諸國の遊里、遊女、粹客の事蹟を傳へるには、この方が便よいと西鶴は考へたのであらう。

西鶴が源氏君に擬する世之介を以て『一代男』の主人公として、一篇を貫かせたのは、諸國の遊里を紹介し、また戀の諸階段を紹介しながら、島原の粹と比較させる便宜のためであつた。世之介はそれがために、西鶴の傀儡として、大盡たる以前にも諸國の旅をさせられ、以後にも旅をさせられてゐる。大盡以前には勘當をうけたための放浪の旅であり、以後は町人經濟の活動の旅、または享樂の旅である相異はあるにしても、作者の傀儡たる點に於ては同一である。たとへば「異つたものは男傾城」の場合に於て、西鶴の説かうとするのは奥女中の性的生活であつた。故に彼は世之介をそのためにのみ江戸に拉れて行つた。武家の奥女中との交渉は、この地を最も便よしとするためである。その他に世之介と江戸を結びつける必然性は何もない。世之介の任侠の如きは、唐犬權兵衛と共に、一種の江戸氣分を出す手段に過ぎなかつた。原據たる中將のおもとの行爲は、それとなく御息所の嫉妬の性格を傳へる重要な一條件になつてゐるが、翻案せられた女中は、たゞ奥女中なるものを示す以外に、全篇に關する關係はなかつた。



世之介をして限なき性的経験を重ねさせるための旅の趣向は、その頃の女物には極めて不利である。それならば、西鶴は「一代女」に於て、何故に都合よき『二代男』の體裁をとらなかつたらうか。何となれば、『一代女』は『一代男』が眼目とする戀の相を、しかも女の立場から説きなす意圖以外に、『二代男』の穿ちにまで入り、かねて教訓の態度を併せ用ゐようとする態度を有してゐるからである。西鶴が『一代女』に於て、一人の女を主人公として、種々の性的事項を貫かしたものは、その紹介者たるだけでなく、他に有効な結果を生ずることを思つたためであつた。もとより、性的事項の多くに觸れるためには、まづ一代女の性的期間を永くすることを要する。しかし、世之介と同じ趣向を以てすべきでなかつた。そこに男と女との相異がある。西鶴は一代女をして幼きより戀を解させると、公卿がたの娘とし、また宮中に仕へさせた。

公家がたの御暮しは歌のさま鞠も色ちかく、枕隙なきその事のみ見るに浮れ聞にときめき、おのづと戀を求し情にもとづく折から、

かういふ公卿生活の概念の上に立てた趣向であつた。またいつまでも若く見せるために、皮薄の小作りの女とした。

ゆく年もはや六十五なるに、うち見には四十餘りと人のいふは、皮薄にして小作なる女の徳なり。この種の記事はところ／＼に散見してゐる。

一代女の性的経験はこの永き期間を利用して、それからそれへと發展する、しかも西鶴は、それに

一定の順序を與へてゐる。高きより低きに、尊きより卑しき、たとへば遊びがてらの入人藝から、身すぎかなしく、大名の妾となり、やがて太夫となり天神、鹿戀と下り、いよ／＼下さまに墮ちゆきては、六十五の老齡にして、惣嫁の勤めをすることになつてゐる。これを世之介の閱歴と比較すれば、彼にはたえず向上の一路がある、すべては粹を目ざして動くからである。これは墮落の一面がある。落ち盡して悲惨の境地に呻吟するより外はなかつた。彼の光明と、この闇黒と、大なる相異を表はすものは、もとより他に種々の原因はあるものゝ、翻案の原據の違ひがまた少からず與つてゐる。

『一代女』の原據は何であるか、いふところの尼懺悔これである。その頃行はれてゐる『七人比丘尼』『二人比丘尼』等である。

これ等の比丘尼物は、多くの場合、『九相詩』によつて想を構へてゐる。人死して屍となつて骨に化するまでに、九位の變相があるといふ詩の意に據るのである。西鶴はその九位を女の諸階級に當てた。その位相を階級が持つ色調に翻した。この翻案が西鶴の轉合に出づることは勿論である。

比丘尼物の結論は、無常迅速の理を説いて、菩提の道に入るにある。『一代女』また同じ形を以て、いたましい懺悔告白を以て佛道に入ることになつてゐる。しかも、西鶴の説くものは懺悔そのものにあらずして、懺悔の中に現はれる相であつた。『二代男』に於て、しば／＼見るところの懺悔の構圖と比すれば、長短以外、殆ど變ることがない。卷二の「うら屋の住所」の世之介の懺悔、卷四の「晝のつり狐」の老女の告白、と軌を同じうしてゐる。殊に後者の如きは、『二代女』の約を示したものと



いひ得る。しかも、好色庵の額うつて、竹葉の一滴に心亂れて、常弄しいとす繩いとすならして戀慕の詩うたふ  
 尼に、どれほどの殊勝氣がある。西鶴の懺悔物、比丘尼物の正體はこれだけでも、それと知ることが  
 出来る。

さるにても、「老女の隱家」の章に於て、一代女を訪ねる二人の男は、よくもよくも、人を知る明あ  
 る者といはうか。西鶴の俳諧はこれにも籠れるやうに思はれる。然らばその原據は何であるか。「古事  
 談」の「燕王好馬買骨事」これである。

清少納言零落之後、若殿上人あまた同車、渡二彼宅前一之間、宅體破壊したるをみて、少納言無下  
 にこそ成にけれと車中に云を聞て、本自棧敷に立たりけるが、籬を搔上げ如二鬼形之女法師一顔を  
 指出云々駿馬之骨をば不買やありし云々

すなはち西鶴は、この清少納言を貶む若殿上人を、わざ／＼里離れた北の山陰まで尋ね入つて、好  
 色道に就いて殊勝な若者二人に書きかへたのである。西鶴にこの案があつたことは、「一代女」の文の  
 中に『枕草子』の語句を引き、その語法に倣ふものゝ多い事實からも判断される。こゝに一目してそ  
 れと知り得るほんの一節を、卷五の「濡間屋硯」から抜いてみる。

見るにおかしげなる貌つき八橋の吉と濱芝居の千歳老、不斷眠れど見よきもの、くだり玉が風俗  
 お裏の御堂の海棠、とうから出来いてかなはぬ物、金平のはつが唐瘡高津の涼み茶屋、夜光て世  
 に重寶、猫のりんが眼ざし杖に仕込灯挑にぎやかに見へて跡の淋しき女、釋迦がしらの久米座摩

のねり物、泣てからおもしろうないもの、徳利のこまんが床今宮の松の烏云々、

しかし西鶴の轉合はたゞこれだけであつたらうか。西鶴の頃にはこの駿馬の骨を買はずやの話は、  
 清少納言の事蹟として相應に信をおかれた話ではあるが、それを持ち出して来たといふのでは、西鶴  
 の例の手法としてはもの足りない。西鶴の俳諧はもつと大きいものを用意してゐたやうである。彼に  
 すれば「老女の隱家」に於ける清少納言と若殿上人との佛をあしらふなどは、ほんの筆ついでであつた  
 らう。随分『枕草子』をかうもぢつたことも、あの頃の俳人がよくやつた古典まがひとしてやゝ人を  
 驚かしもしたらうが、西鶴はもつと意外のものを藉り用ゐて人々をあつと言はせようとしたのではな  
 からうか。その古典は日本のものならぬ支那の古典、『遊仙窟』である。『遊仙窟』は唐代の傳奇、才  
 人張文成の作である。

書にいとところは張文成と崔女郎との濃艶の情話である。張文成かつて古老が傳へて神仙の窟と稱す  
 る中に入つた。人跡及ぶこと罕に、鳥の跡がわづかに通ふばかり。行き行きて崔女郎の家に宿をかり  
 た。主の十娘の美しさは、浮世にかういふ人ありとは思ひ知らぬものであつた。十娘は嫂と住つてゐ  
 た。これもまた美にして婉であつた。二人の女は心こめて文成をもてなした。二人と文成とが唱和し  
 た詩の數も多い。皆誦するに足りる。席上嫂は箏を弾じた。十娘もまた尺八を吹き鳴らした。楽しい  
 宵も更けて、文成と十娘との契りは濃であつた。さ夜中を聲高く叫ぶやもめ鶉も憎く、まだ明けぬ空  
 に鳴きしきる氣違ひ鶏もうとましい。その翌日を文成はなほ夢心地の中に、いつ逢ふあてもない別れ







せたのであらう。尤もこれをゆくりなくと見るべきか、故意にと見るべきか。そこに西鶴の態度の考ふべきものがある。しかも、それは容易にそれこれと斷じかねる問題である、西鶴の俳諧手法の根本に關することであるから。更にまた『一代女』のさし繪は誰が畫いたのか。畫工その人が他にあつて西鶴が畫いたのでないとしたならば、下繪は彼が畫いたのか、彼は畫かないが構圖に就いていろいろと指定するところがあつたか、今日ではさし繪の畫工としての西鶴を考へることが、かなり彼の生涯を知る上に於て大事なことになつて來てゐる。「老女の隱家」と『遊仙窟』との關係の考察はおのづから問題をこの點にまで波及させる。問題として興味は深い。けれど今はそのまゝにさし措く必要がある。

## 一六

西鶴の好色本として折紙附けられてゐるものを涉つて來た今、『男色大鑑』をあとに廻せば、残る一つは『好色五人女』である。

『五人女』はいふまでもなく、卷一に清十郎とお夏、卷二に樽屋とおせん、卷三に茂右衛門とおさん、卷四に吉三とお七、卷五に源五兵衛とおまんの情話を扱つてゐる。これ等の人物の選擇はそれ等の情事その頃の流行唄となつて流布してゐることを條件としてゐる。しかも五人の女はすべて遊廓の遊女でなくして世間の女、いふところの地女であつた。『二代男』にも地女に關するものがあり、『二代

男』にも無いことでは無い。けれどそれ等の作は、いづれも遊廓遊女に伴ふものを基調としてゐる。殊に『一代男』の如きははじめから名妓列傳といふ格で書いたことを作者みづからも斷つてゐる。『五人女』が地女のみを書いたのと大きい相異があつた。この相異は何によつて生じたのであらうか。廓を舞臺とし、粹を中心としたこれまでの作から、粹を離れた野暮の世間に轉じさせたのは何であらうか。粹を規準として考へる好色の相と野暮の中に動く好色の相とは、どのやうな變化を見せるのであらうか。この事はまた『一代男』『二代男』と『五人女』との中間に『一代女』をおいて考へることを必要とする。男物に於ては遊女を中心としてゐるが、この女物の女は始めから終りまでを遊廓にのみおくりかねる。そこに遊廓の内外の舞臺が必要であつた。従つて『一代女』の舞臺は、遊廓が舞臺として重要な條件になつてゐるが、舞臺の場數からいへば、むしろ遊廓以外が多い。五人物はつまりその遊廓以外の舞臺を延長したものと見てよい。これが『五人女』を西鶴好色本の發展に即して考ふべき一點である。

また『五人女』が從來の作と異なることは、群小話をそのままに、或は形だけを長篇めかしたのとはちがつて、一巻に一話を盛つてをることである。分量はさまざま多くないので、長篇とはいはれないまでも、中篇としての純然たる小説形態をとることこれである。しかし、今はそれ等々を注意すめて、他の觀點から考へようとする。これまで『一代男』をはじめとして觀て來た例の如きものがある。



その點から『五人女』を讀んでみると、まづ第一に考へられるのは、おの／＼。うに五段に分れてゐることである。例せば卷一の「姿姫路清十郎物語」は、「戀は闇夜」け帶よりあらはるゝ文」「太鼓による獅子舞」「状態は宿に置て来た男」「命のうちの七百兩のり成つてゐる。次に考へられるのは、五つの話の配列である。第一話はめでたい寶船に筆を起して明神が出現するやうな事などを交へたもの、第二話は樽屋と久七の戀争ひからひき續いて、思ひも寄らぬ嫌疑をうけた腹立しさからつい心にもない不義を働いてしまふおせん心の心もさくさ、第三話はやさしい、慎しやかなのが、ふとした身の過から圖太く變つてゆく女心を見せたもの、第四話は少女心の一筋に戀ゆゑに心狂うて火附けの大罪を犯すこと、第五話は若衆の若僧が、戀なればこそ、あらぬ若衆姿に身をかへて尋ねて行き、つひに女色に墮落させ、はては還俗させた面白い筋である。これ等の内容を或る條件を以て要約すれば、もとより無理もあり、附會もあるが、それも或る特殊な事情——おそらくこれが『五人女』考察の最も重大な條件であり、その無理、附會もそれによつて却つて重要意義を有つことにならうが——によつて許されるものなら、第一話は神であり、第二は修羅であり、第三話は殊に女の中の女心として女であり、第四話は狂であり、第五話は調伏である。斯うして見ると、この順序はどうやら能の五番立の順序と一致することが不思議である。第一話は神物、第二話は修羅に燃える男物、第三話は葛物、第四話は狂物、第五話は調伏に即する鬼畜物の能の形をなしてゐるやうに見られる。第一話が五段立になつてゐるのもまた能の組織と一致するものであつた。五

話の中の第一話を「春の海しづかに寶船の浪枕」とめでたい言葉でいひ起すのも、第五話をめでたい話で結ぶのもまた能の番組の約束とも見られる。わけて五話の中の四つを悲劇の筋ではらせ、最後のものを喜劇の形ではらせることも、またこの約束として見られる。

これ等は偶然の一致であり、暗合であらうか。それとも西鶴のはじめからの作意であらうか。

『二代男』と能の関係はいふまでもなく多い。その二三に就いては前にも言ひ及んでゐた。『二代男』にもその辭句を借りる外にその構想を藉りるものも少くない。中にも「七墓廻りに逢ばむかしの」と能の「六浦」との関係の如き、實に奇抜な趣向替へであつて、いつもながらではあるが西鶴の轉合に驚歎させられる。もし此の関係を重く認めると、『五人女』は當然それ等の延長であり、擴充であつたと考へざるを得ない。暗合と見るにしては、西鶴にこれまでに餘りに多くの關心を能に有ち過ぎたといへる。それならば『五人女』の一つ／＼の形が、どの程度まで能に藉つてゐるかを検討する必要がある。五人女の一人づつをシテとして、どの程度に能になり切つてゐるかを吟味する必要がある。漫に能といふよりも、なほ一段と能のどの曲といふことが問題になり、従つて例の『二代男』の『源氏物語』に於ける、『二代女』の『老女の隱家』の『遊仙窟』に於けると同じやうな俳諧手法が明になる筈である。

例として卷一の「姿姫路清十郎物語」を擧げる。

第一段には遊女皆川と清十郎との深い仲が書かれてゐる。清十郎のために死をも厭はぬ皆川の實意



ぶりは、それまで惚れ込まれる清十郎の人となりの説明することになる。全體からいへば此の段は清十郎の紹介といふ格である。しかも清十郎はこの第一話に於て、シテのお夏に對してまさしくウキである。すなはち此の段に於ける清十郎の行爲は、能の舞臺ならば序段に於けるウキの言葉に現はれる筈である。この段、題して「戀は闇夜を晝の國」といふ外に、「室津にかくれなき男有」といふ小題のあることも考へねばならない。

第二段でシテのお夏がはじめて出ることになる。清十郎のくけ帯から出た女郎どもの手紙を讀んで、かうも惚れられる男はとあこがれ心を懐く少女のやさしさが主となつてゐる。こゝの小題には「姫路に都まさりの女有」とある。能であれば、漸く事件發展の緒に就く破の一段である。

第三段でシテのお夏とウキの清十郎とははじめて獅子舞を外に花見幕の中で戀の出合をする。この戀の早業の事件こそ好色本の筋のたゞ中、西鶴の最も力を籠めるところ。能の舞臺の最高調、すなはち一曲の中心たる破二段に當る。小題にも特にそのよしを明にして、「はや業は小袖幕の中に有」とある。

第四段、事件の筋からいへば、お夏と清十郎とは駈落して大坂への船に乗る。向うに着いたら、あゝしての、斯うしてのいづれは床の算用、それも乗り合ひの飛脚の失策から大當違ひになつて二人は追手に捕へられて、清十郎は無實の罪で殺される。小題には「心當の世帯大きに違ひ有」とある。これは事の轉であり、能の破三段に當るものであるが、此の段には室明神の夢枕の出現もあり、また飛脚

のをかきさもある。そのをかきさは間の狂言に當る。

第五段、清十郎の死を歎いたはてにお夏は狂氣となり、里の子の謠ふ流行唄につれて踊つて歩く。小題の「世にはやり歌聞ば哀有」とはこれである。お夏はやがて正氣となつて尼となつた。事件はここに終る。急の段、シテの舞ひをさめである。

組織に就いてかういふ神能を求むれば、どれもこれもやゝ雲を掴む程度に當て簞る。しかし引用せられてゐる辭句の多さをたよりに、ある一曲を限つて求むれば、「高砂」がそれかと考へられる。今、しばらく西鶴が例の俳諧手法で「高砂」の翻案を試みたとして考へたなら、どういふ事にならう。

第一段の清十郎はもとより名告をするウキの神主である。その清十郎が室津から姫路に移ることになるのも、いはゞ道行の格である。第二段、お夏と清十郎とが思ひ思はれる仲でありながら、人目の關に隔てられるかなしさは、シテとシテツレの老翁老嫗によつて語られる住吉高砂の松のあはれである。二つ松は相生の松と呼ばれながら播磨と攝津と國を隔て、心ばかりを通はせてゐる。第三段のお夏と清十郎との戀の早業は、シテとシテツレが高砂住吉の松の精の夫婦であることである。その獅子舞はクセを藉りたものである。この段殊に西鶴は「高砂」の辭句を露はに見せてゐるものが多い。わけてシテの尉に手にするさらへ、また「落葉かくなるまで命ながらへて」を踏へて、「里の童子さらへ手毎に落葉かきのけ、松露の春子を取など」といふ趣向がへは、西鶴ならではと思はれる。

第四段のお夏清十郎の便船は、海人の小舟に乗つて住吉に赴くシテとシテツレである。その舟は安



安と住吉に着く。ワキの神主もまた間の狂言ではアヒに便船を頼む。これも恙なく住吉に着く。ワキはそこに住吉の出現にあひ、その舞を見る。この船の安らかな進みを逆まにして、二人の身を破滅とさせ、また住吉の神の出現を室の明神の夢枕に轉用したのが、西鶴の戯れであつた。第五段、お夏のはやり唄に合はせての踊りは、いふまでもない神の舞の轉用である。それよりも驚かれるのは、何事も知らぬが佛、おなつ清十郎がはかなくなりしとはしらず、とやかく物おもふ折ふし、里の童子の袖引連て、清十郎ころさばおなつもころせとうたひける、聞ば心に懸ておなつそだてし姥に尋ければ返事しかねて涙をこぼす、さてはと狂亂になつて、生ておもひをさしよりよりもと、子供の中にまじりて音頭とつてうたひける、とある中の流行唄の懸合である。またお夏の音頭取りである。これが「高砂」のロンギのうつしとは、けだし思ひ半ばに過ぎるものがあらう。

しかし、「姿伽路清十郎物語」は、巻五の「戀の山源五兵衛物語」と共に、かなり容易に原曲との關係を看得させるものである。「中段に見る曆屋物語」は中段だけに西鶴みづからも最多く趣向を凝らした結果か。ともすれば「誓願寺」の翻案と氣づかせないでしまふ。例として最も恰好と思ふもの、最も多く對照の煩ひを重ねなければならぬことを思つて、しばらく話の順序を便宜として、清十郎物語の例を選ぶことにした。

『男色大鑑』をあとに残した理由は、それが好色本であると共に武家物にも屬するからである。しかし嚴密にいへば、この書の武家物と見られるのはその半ばに過ぎない。全部八卷、その前半の四卷だけである。後半四卷は純然たる好色物といつてよい。それには歌舞伎の世界に於ける事件が扱はれてゐた。この武家の社會と歌舞伎の社會とを區別した前後の二部は、また地理的にも明に區分されてゐる。武家は江戸詰、歌舞伎は上方である。

西鶴がこの作をなした理由は何であるか。今日この作を読むものは、ともすれば作者西鶴を離れて、西鶴が扱つた題材の變態性の検討に重心をおき、その社會的意義の闡明を考へようとする。しかしそれは西鶴の目に於ては、さまで要なきものであらう。權道は畢竟權道ではあるが、今日の見解よりもずつと正しい色道として認められる男色であつた。西鶴からいへば別に深く考へることなくして、軽く材料とすることの出来る人間生活の一現象に過ぎなかつた。たゞ狭く好色本の流れに即して考へる時、あの女色物を書き續けた西鶴が急に方向を男色物に轉じさせたかといふことが、大きい問題となる。

女若二道、これは『一代男』に於て扱はうとしたものであるが、遊廓の粹の生活を中心とするだけに、男色の若道に就いて多くをいふ暇がなかつた。『男色大鑑』はそれを補ふためである。しかも男色



に専らにするとて、しばらく男色黨の立場に於て之を扱はうとした。好色といへば一つであるが、その中に入つて見れば、女に興みする者と男に黨する者とまさに相對峙してゐる。男に黨する者は、おのづから、女を貶まざるを得ない。故にその序文に於て、女を悪しざまに罵り、女を中心とした『一代男』をおのが作ながら口ぎたなく罵つたのである。いつもの戯れからである。

この序文が後の八文字屋本などによく見うける男色女色優劣の論争の折の男色黨の典據となるものであるが、西鶴をしてさういふ語調を弄させたのも、つまりは、男色が有つ性質のあるものと調子を合はせようためである。もし西鶴にして女色黨の立場に於て男色黨を難するものを書くとしても、あは息まきはしなかつたらう。それもこれも彼一流の戯れである。

男色と女色との違い、それが有つ特性の相異から、極めて明なのは、女色に淡くして男色に濃かな義理と意氣との色合である。西鶴は男色を扱ふに當つて、まづはじめにその義理と意氣とを主眼とした。それには、武士の階級がふさはしい。

武士といへば江戸、かくして前半を江戸屋敷詰の武士に限つて材料を集めたのであらう。その武士生活を中心とするものが、やがてすらくと延びたのが彼の武家物であつた。『男色大鑑』が好色物と武家物との分岐點として西鶴著作の流れに於て特殊の位置を占めた。

この義理と意氣とをそのままに、しかも、もつと華やかさを求めるところに歌舞伎の世界がある。西鶴はその華やかさを骨子として後の四巻を成したのであつた。前半に對する心持は、また江戸に對

する上方として、その地方的差別を立てたのであらう。こゝに『男色大鑑』は『一代男』の續篇『二代男』の女物とまさしく對立の形をとる。『二代男』が名妓列傳であるならば、これは名若衆列傳であつた。

『二代男』の男色に關するものには、すでに『男色大鑑』に於ける義理と意氣とが見られる。それと共に職業としてあさましい歌舞伎の男色稼業があつた。『二代男』には名妓のすぐれた節を傳へると共に、また太夫の口過ぎのかなしい半面を暴露した。しかし『男色大鑑』の若衆の場合にはこれ等をは避けて觸れない。それに作者の用意が認められる。

『男色大鑑』が純なる好色本でないやうに、『西鶴置土産』は好色物と町人物との中間にある。しかもこれは最も多く『二代男』と聯關して考ふべきである。『二代男』の遊びの態度と、これの遊びの態度の相異は、畢竟金と遊びの關係の見方の相異である。この相異は『二代男』で一度扱つた材料をもう一度立場をかへて書き直したものに就いて見れば、極めて容易に明にすることが出来る。問題は西鶴の齡と共に推移する心境に觸れ、またそれを書きかへることをあへてする晩年の生活にも及んで来る。極めて興味ある問題であり、西鶴その人を知るためには重要な問題ではあるが、或は好色本といふ範圍内で扱ふべきものでないかとも思はれる。





西鶴研究

昭和十一年七月五日印刷  
昭和十一年七月十日發行

發行所

11.7.7

東京市牛込區矢來町七一番地

新潮社

電話牛込 八〇〇五番  
八〇〇六番  
八〇〇七番  
振替東京 一七四二番  
八〇〇八番  
八〇〇九番

著者

岡良一

發行者

片山 剛  
山口 良  
佐藤 義亮

東京市牛込區矢來町七一番地

(定價二十五錢)

東京市小石川區江西戶川町 富士印刷株式會社印刷

—了—







折口・澤瀉著	萬葉集研究	近刊	生田春月著	眞實に生きる悩み	35
齊藤(清)・藤(茂)著	山家集・金槐集拾遺研究	20	生田春月著	影は夢みる	35
加藤・藤村著	近松研究	20	生田春月著	旅ゆく一人	近刊
片岡・山口著	西鶴研究	25	生田春月著	生命の道	55
太田・河東著	芭蕉研究・蕪村研究	25	トラスティイ著	人は何によって生くるか	25
相田隆太郎著	解説テクノクラシイ	20	トラスティイ著	我が懺悔	20
大杉 豊著	種の起原(上・下)	各45	トラスティイ著	光ある光の中に歩め	20
北原白秋著	雀の生活	35	メテリック著	貧者の寶	20
吉田絃二郎著	小鳥の來る日	30	久保正夫譯	聖フランシスの <small>イサ</small> 寶	40
吉田絃二郎著	草光	35	久保正夫譯	森の生	50
吉田絃二郎著	木に凭りて	30	久保正夫譯	賈金つくりの日記	20
吉田絃二郎著	わが詩わが旅	35	久保正夫譯	人 生 論	20
吉田絃二郎著	山家日記	35	久保正夫譯	性 慾 論	15
吉田絃二郎著	静かなる土	35	久保正夫譯	詩歌壇六家著	明治詩歌選
吉田絃二郎著	春の一日	35	久保正夫譯	詩歌壇六家著	大正詩歌選

11. 6. 25 訂正

フイリッブ著	ビュビュ・ド・ルナス	20	牧 逸 馬著	バッド・ガール(上・下)	各35
サンビエラ著	海の嘆き	25	米川正夫譯	神々の死(上・下)	各40
モオバツサン著	モオバツサン選集	45	千葉龜雄著	現代世界文學概観	15
平野威馬著	幼年・少年	35	吉江喬松著	佛蘭西文學概観	30
江馬 修著	小さな町	30	山岸光宣著	獨逸文學概観	30
小牧 近江著	サ フ オ	35	昇 曙著	露西亞文學概観	20
ドオデエ著	カルメン	25	新野上・吳田著	ギリシア文學研究	30
武休無思著	サアニン(上・下)	上下40 35	木村 毅著	小説研究十二講	35
梅里メエ著	背 德 者	25	森 田・野著	近代文藝十二講	55
市川 淳著	アツシヤア家の没落	25	上 野・野著	近代思想十六講	60
谷崎 潤二著	痴人の告白(上・下)	各35	中澤臨川著	東洋思想十六講	60
ストリンドベリ著	寶 島	40	高須芳次郎著	日本思想十六講	60
三井 光 彌著	ランデの死	40	高須芳次郎著	日本近世文學十二講	55
スライヴンソン著	森の處女	30	高須芳次郎著	明治大正藝術史	45
押川 春浪著	ヘルマンとドロテア	15	土岐善麿著	古事記研究・祝詞研究	近刊
原 久一郎著	最後の線(上・下)	上下60 55	次田・武田著	日本書紀研究・宣命研究	近刊
アルツィバセフ著					

11. 6. 25 訂正







新 潮 社 新 刊 書 目

小 説	小 説	小 説	現代小説	時代小説	詩散文集	傳 記	傳 記	自叙傳	戰 記	處世訓話
夜明け前	聖 處	盛	新 巖窟	妖 棋	早	人類の 恩人	情熱の 妖花	私の文壇生活を語る	流血の丘	生きる力
島崎藤村著	女 室生犀星著	装 横光利一著	王 谷 讓次著	傳 角田喜久雄著	春 島崎藤村著	野口英世	新居 格著	川端・宇野・室生 他現文壇十二氏著	櫻井忠温著	佐藤義亮著
送價各二・三〇	送價二・〇〇	送價二・〇〇	送價一・六〇	送價一・六〇	送價一・五〇	送價一・四〇	送價一・四〇	送價一・三〇	送價一・五〇	送價一・三〇
一・四〇	一・四〇	一・四〇	一・二〇	一・〇〇	一・〇〇	一・二〇	一・二〇	一・〇〇	一・〇〇	〇・八五



910.25

KA83

3



終